八つ当たり伝道論

１９８８年１２月３０日
日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団
フィリピン派遣宣教師
佐々木正明

なんでこんな文章を書こうと思い立ったか

世の中、何かと便利になった。だからといって、人間の頭がそれに応じて良くなったわけではない。今、わたしが立ち向かっているものが、原稿用紙からワープロに変わったからと言って、すらすらと文章が浮かんで来たりはしない。 あこがれの人の前に出た初心な少年は、振り返った美しい瞳に射すくめられて、日頃の募る思いの一片さえも伝えることができない。葛藤と奮闘の末、やっとひとこと言ってみたが最後。とたんに、それが恐ろしくまぬけで、気の利かない言葉に思えて来てへどもどしてしまう。その夜、彼は頭から布団をかぶってひとり惨めさを噛みしめる。

わたしも、日頃の募る思いをと意気込んでみたは良いが、最初の文を打ち込み始めただけで、もう、諦めて投げ出すことを考えている。だが、どうしても言いたいことがある。身のほど知らぬ大それた事と自重していたが、言いたいことを余り長い間言わずにいると、不満がつのる。不満は、踏んづけた犬の糞、鼻の奥の腫れ物のように厄介だ。

これでも、自分は伝道者のはしくれであるから、少々の不満は胸の内におさめて、にっこり笑う作法も心得ている。信徒に匂わすことも、まあ、滅多にしない。そのかわり、でき損ないである故に、妻にはいつもやつ当りしている。いにしえの人のように、「穴を掘りて言い入れ侍りけめ」とは行かないし、「胸のしこりはことごとくただ主のみに打ち明けて」などという、霊的な芸当もできない。人間は、やはり人間に打ち明けたい。人間に同情して欲しい。その様に創造されたのだと思う。ところが、いまや妻へのやつ当りでは解決できそうにもない。他人に不満をあげつらうのは、はた迷惑もはなはだしい甘えであると自戒しても、それで収まるわけもない。胸の不満は、日向の防波堤で釣り上げられたのろまな草フグの腹のように、どんどん膨れあがりとうてい押さえ切れなくなった。どうしてもガス抜きが必要である。

わたしは日本の教会の現状に失望している。その一員である自分にも幻滅している。１０年以上住み続けているフィリピンの教会にも、ため息のでる思いでいる。そこで宣教師として働いて来た自分にも、腹立たしく感じている。わたしたちの教会には力がない。本来の成長をしていない。自分の２０年近くに亘る伝道者生活は、数々の失敗の博物館である。挫折は、透明なゼリー状の紐の中のひき蛙の卵よろしく、見事に連なって、わたしの働きを際立たせている。

伸び悩んでいる教会に心が痛む。しかし、愛がなくなったのではない。まともな伝道ができない自分に落胆している。然しまったく希望を失ったのではない。口幅ったいが、わたしは教会を愛している。そのために死んでも良いと、常々思っている。自分の失敗の数々をも、いとおしく思っている。そこで、わたしは自分の失敗と、そこから考えさせられ、教えられた多くのことを書き記し、伝道を志す若いクリスチャンたちの、「転ばぬ先の杖」「他山の石」にしてもらおうと思いついた。そうすれば、惨めな自分の失敗も教会の宝となる。後輩の方々がわたしと同じ過ちをくり返さなければ、教会はもっと強くなるかも知れない。とすれば、不満の発散もあながち害悪ばかりではなくなる。

☆　　☆　　☆　　☆

わたしは訓練が嫌いである。するのもされるのも嫌いである。厳しいスポーツの鍛練、軍事教錬など、思い見るだけで背筋がぞくぞくする怠け者である。それにもかかわらず、かなり厳しい訓練の場を通って来た。それは、ありのままの自分では、役立たずの使い物にならない人間だと、「聖書によって語る人たち」に教えられてきたからである。神の働きをしたいと思うならば、死にもの狂いの錬達が必要だと信じさせられて来た。

「何をやらせても並み」 これがわたしである。釣鐘状のグラフにすると、間違いなく、あの山のように盛り上がった中に入る、どこにでもいる人間である。１０人いたら、たいてい３番から５～６番位に入っている。７番位なら我慢ができた。９番ではさすがに悔しかったのを覚えている。だから２番にでもなれば、ひとしきり自慢したくなるのだ。 まだ聖書学校の学生だったころ、１度だけ試験で１番を取ったことがある。たかが１６人のクラス、しかも７４点というお粗末さで、何のことはない、他の学生がどうしたわけかちょっと手を抜いたため、たまたまそういうことになっただけであるが、わたしには決して忘れられない、密かな・・・・と言いながら、こうして公にせずにはおれないほどの・・・・誇りである。

この程度の人間は、どう仕込んで見ても偉大にはなれない。一念発起して、「こと神学にかけては」の、改革派の諸先生の本を開いて見ても、理解より眠気が先に訪れて来る。ホーリネスの流れを汲む人のきよめの経験を拝聴すれば、たちまち、ただひたすら恐ろしくなり、聖霊派の熱烈な祈りの中に入ると、思わず身を縮めて、すみっこに行って、やっとこさ、ぼそぼそ祈るのが精一杯。素晴らしく立派なクリスチャンたちの証を読むと、恵まれるより先に、自分がすっかり惨めに見えてきて、やりきれなくなり、美しくも高尚な三浦綾子さんの文などは、「心臓に悪いから」、もう、始めから読まないように心がけている。「ありきたり」にも足りない伝道者にさえ、「成れたのがめっけもの」である。

こんなわたしでも、恵みによって救われた喜びを持っている。伝道したいと思う。教会を建てたいと、真剣に考える。願いだけが先走って、宣教師にまでなってしまった。そこで、ふたたびみたび奮起して、伝道だの牧会だの、はたまた宣教だのについての書籍を読みあさった。

幸いこれらは、たいてい「神学書」よりは易しく書かれている。ところがどうだ。読んで見て驚いた。それらの易しい本も、実のところ名人牧師、達人伝道者、超人宣教師、哲人学者たちによって書かれている。 それぞれ、溢れるばかりの能力を持ち、目を見張るような立派な仕事を成しとげている方たちばかりである。言わば、一流、悪くて２番の人達であって、彼らが言うことを「並み」のわたしが実行するのは至難の技、入れ歯を外して草加せんべいに挑戦するに等しい。下手に背伸びをすればひっくりかえって、大怪我をしかねない。伝道とはこんなに高等な技術なのか。牧会とは、かくまで神聖な業なのか。特別な召しをいただいて、特殊な訓練を受けた者だけにできることなのか。

少なくても、わたしが聖書を読んだ限りにおいては、そんなことはない。伝道は街の八百屋で大根を一本買うくらい易しく、牧会も特殊な働きではない。今わたしたちの教会の問題は、伝道と牧会をことさら困難で、格別な働きにしてしまったところにある。だから「物凄い」能力の持ち主でないかぎり、立派な働きはできないことになっている。しかしわたしの望みは、並みの能力の人間を、訓練に訓練を重ねて鍛え上げ、この困難な働きができるようにすることではない。そんなことは自分の訓練にさえ失敗したわたしには不可能だ。そうではなく、伝道と牧会、そして宣教をことさら難しくしている様々な要因を、見付け出しては取り除くことである。並みの人間が並みのままで、並み以上の働きが出来るようにすることである。誤解されないように断っておくが、訓練が不要だと言っているのではない。訓練はなくても伝道はできると言っているだけである。

教会は決して有能利発な人間だけの集まりではない。その教会に、伝道の使命、世界宣教の大命令が与えられたのである。絶対に、満ち満ちた能力が、タ張メロンの甘い汁のごとく溢れ流れているといった、ごく一部のクリスチャンにではなく、びりっけつも、うっかりも、おっとりも、そこつも、そして、それらを全部かね備えた者もいる、教会全体に与えられたのだ。それならば、伝道は難しいものであるはずがない。

☆　　☆　　☆　　☆

わたしは東京の聖書学校を卒業した。アメリ力のではない。日本人が日本人の伝道のために、日本人を訓練する学校である。卒業して、東京の下町の小さな開拓伝道に派遣された。かなり長い年月の歴史があったにもかかわらず、会員はたったの４人。内２人は夫婦。礼拝会の平均出席が、自分を入れて６人足らず。２ヶ月後には、会員の１人が引っ越して行ってしまった。２階建ての木造で、工場兼アパートの片隅、Ｌ字型につながった６帖と３帖を、礼拝場、食堂、寝室、勉強部屋のすべてに供し、それでも随分頑張った。看板も出した。チラシも撒いた。トラクトも配った。特伝も開いた。路傍伝道もやった。訪問もくり返した。ラッパを吹き、大鼓も叩き、オルガンも弾いた。もちろん説教は徹底的に準備した。一字一句書いて、赤い線、青い線、緑の線も引っ張った。赤い線は声を上げ、青い線は手を差し伸べて、緑の線は机を叩く。黄色い線が何だったかは覚えていない。とにかくこんなふうにして、突然、まだアメリカの施

政権下にあった沖縄へ、「宣教師」として遣わされるまでの２年間、栄養失調と戦いながら献身と意地を貫き通した。礼拝会の平均出席が１３人ほどになっていた。

わたしの試行錯誤はこの時代に始まった。わたしのような、「帯に短し、たすきに短し」、まさに、箸にも棒にもかからない若僧を、忍耐をつくして薫陶してくださった教師の方々には、誠に申し分けないのだが、この時、まず一番に悟ったことは、３年も費やして聖書学校で習ったことが、ほとんどまったく役に立たないという事実だった。青二才の思い上がりで、説教だけは他人より上手に出来ると信じていたわたしは、すでに言ったように、説教に力を入れた。ある時、ローマ書１章１節から、５回シリーズで「壮大な神学的説教」を試みた。礼拝時間を４０分も過ぎてから、やっとひとりの女の子がやって来た。それから１時間、わたしは祈りに祈って作り上げた名説教をしでかした。中学を卒業し、親類を頼って田舎から出て来て小さな町工場で働いていた、知能指数８０に足りないと思われるこの愛くるしい女の子に、わたしの説教は絶対にわからない。それは充分にわかっていたが、祈って準備した名説教である。おいそれと止めるわけにはいかぬ。しかしこの１時間、わたしはスプーンでうどんを喰らおうとするかのような、掴み所のない無力感に打ちのめされ続けたのである。わたしは説教不信に陥った。今もそこから抜け出ていない。

今の聖書学校の多くは、ムーデーやトーレーなどが起こした「聖書学校運動」に端を発している。それまでの神学校教育が余りにも高度で専門的になり、また知識に走り過ぎ、一般大衆の必要に応えられなくなってしまったのを、何とかしようとしたのである。ところが、その聖書学校もまた一般大衆から遊離し始めていると聞く。日本を始め、アメリカの福音主義の宣教地となった国々の、聖書学校の多くは同様の傾向を持っている。

しかし、それよりももっと深刻な問題は、それらの聖書学校の大多数が、いまだにアメリカの聖書学校の単なる模倣に甘んじ、それぞれの国の文化と国情、現実の必要に応じた教育をしていないということである。アメリカでは国民の６０％以上がどこかの教会に属しているそうである。４５％以上は定期的に教会に出席していて、３５％はいわゆる「ボーン・アゲイン」の経験をしているという。その様な実情の中では、牧会に秀でた牧師を作り出すことが大切である。牧会さえうまくやっていれば、お隣の 「枯れた牧草地の」の羊たちは、緑の牧場を目指して柵を越え、大挙して押し寄せてくる。成長しているといわれる教会の牧師たちは、そろって「牧会上手」である。教会は柵を乗り越えて来た隣の羊であふれている。聖書学校のカリキュラムは牧会訓練を中心に組まれている。

ところが日本はどうだ。他の宣教地はどうだ。日本ほどではないとしても、クリスチャン人口は国民のせいぜい数％というのも珍しくない。牧会するにも羊がいない。スポルジョンが思わず知らず嫉妬するほどの、見事な説教を煉り上げても、それを聞いてくれる人間がいないのである。宣教地の聖書学校で教えなければならないのは、聞いてくれる人のいない説教を上手に作ることではなく、下手な説教でも聞いてくれる人を作ることである。カリキュラムを牧会型から伝道型に変えることである。聖書学校の現状がこんなことだから、これを卒業した者たちには、説教はできても伝道ができない。わたしのように試行錯誤をくり返す牧師がふえてく

る。 試行錯誤をくり返す内は、「溺れる者」である。溺れる者は藁をも掴む。あれをつければ抜けなくなる、これを塗れば生えてくると、西洋、漢方を問わず、見る薬、聞く薬すべてを試しつつ、アデランスを考えながら植毛手術の宣伝を盗み読む、愛すべき「熟年」にも似て、われらが牧師たちは、教会成長論が効くと聴くと早速取り入れ、積極思考がよさそうだと読むと、積極的にその信奉者にもなってみる。だから繁栄の福音も大いに繁栄している。東に成長している教会があるとこれを訪ね、西に成功した牧会者がいるとこれに教えを乞う。しかし、悲しいかな。多くの牧師たちはわたしとあまり変わらず、並みの人間なのだ。一流の真似をしても、生兵法は大怪我のもとである。

わたしは２０年近く試行錯誤をくり返してきた。ただ、いささか負けず嫌いだったため、教えを求めて東奔西走したことはない。立派な方が近くにいなかったこともある。 遠くに行くには金が無かった。教会成長論も積極思考も繁栄の福音も、一応なめてはみたが、わたしの舌に合わなかった。自分が親しんできた聖書の味とは違っていた。それぞれ、プラグマティズム、アイデアリズム、マテリアリズムという近代アメリカの宗教哲学、安物のバターの匂いがして耐えられなかった。ただ教会成長論だけは、反面教師的に、少しだけ役立ったと言っておかねば、不公平のそしりを免れない。

今わたしが、伝道とは本来易しいものであると言い切るのは、自らの試行錯誤と迷走行動の賜物である。わたしは、教会教育や聖書学校教育で植付けられた、伝統的教会の形態と活動が、いかに大衆を忘れ、現実から遊離しているかを痛感させられた。そこで、はたしてキリスト教は、もとからそのようなものであったのかどうか学んでみた。さらには、聖書は教会をどう教え、どのような形態と活動を提示しているのか調べ始めた。そうして驚いた。 プロテスタントには、教会論と呼べるものがほとんど無いのである。やっと見つけると、それは「改革派の教会論」であったり、「バプテスト派の教会論」であったりで、聖書神学としての教会論、つまり聖書が教える教会論ではない。 結局、自分で聖書を読み、より聖書的な教会論を持つより他、しようがなかったのである。ところが悲しい事に、わたしは神学の素養は爪の垢ほども持たぬ、どさ回りの宣教師である。ただもう、めくらめっぽう、しっちやかめっちやか、行き当りばったり。聖書を片手に、教会に関するあらゆる本を手当り次第に読みあさり、はては、これぞと思う学者たちに質問の雨を降らせ、遂には、本棚のすみっこで挨りを被って小さくなっていた、ギリシヤ語関系の本にまで、改め丁重におでましいただくことになった。 思えばこの苦労が良かった。なまじ神学に通じていたら、すらっと理解してしまって、気持ち良く忘れ去っていたに違いない。

そういうわけで、わたしの伝道論 、牧会論、宣教論は、単なるプラグマティズム、ああやったら旨く行った、こうしたら成功したという、体験の寄せ集めに基づく効率論ではない。「聖書神学トシテノ教会論カラ派生シタルトコロノ実践神学デアル」と、大上段に構えたくなる代物である。人間が小さいから、大上段にでも構ええなきゃ脅しがきかない。しかしそれはまた、そびえ立つ霊的、学的巨人に踏み潰されまいと右在左往しながら、ひたすら自分にも太刀打ちできる働きに取り組んできた、並みの伝道者の失敗の経験に裏打ちされた神学でもある。

☆　　☆　　☆　　☆

ひとりの猟師が海辺を歩いていた。なぜ漁師でなくて、猟師なのかと尋ねる人は素直でないし、そんなことを気にするわたしもひねくれ者だが・・・・。とにかく、するとだ。一匹の猿が浅瀬で溺れていた。よほどとんまな猿だったに違いない。猟師は苦もなく猿をひっ捕まえた。これだけのことだったら、それだけのことであって、どれほどのこともない。ところが、猟師は次の日も海辺にやって来た。その次の日もやって来た。それから毎日やって来た。今日、もしも南の小島の海岸を歩くことがあったら､そっとココナッツの木の下を捜して見るがいい。白髪頭の、しなびた老人が､頬杖をついたまま、じっと海を見つめているのに出会うであろう。彼は、かつて島一番の猟師だったのだ。

この話を聞いた妻は、開口一番「あまりぱっとしないわね」と言う。それもその筈、これはフィリピンの協力伝道者たちを教えるための、わたしの創作だ。正直に言うと盗作だ。

小学６年の時、学芸会で「まちぼうけ」という一人劇をやらされた。劇がうまかったからではない。全校生徒２６人という北海道の山奥の学校のこと、何とかして出し物の数を揃えなければ、電気もなく娯楽に飢えている、父っつぁんにおっ母ぁ、じっさまとばっさま、果てはしょんべん臭い鼻ったれ餓鬼に、泣き虫娘を満足させられないという、差し迫った必要からの苦肉の策である。それがために、わたしは死んだ母の言いつけに反して、人前で 歌を唄うはめになってしまった。

待ちぼうけ　待ちぼうけ
ある日せっせと　野良かせぎ
そこへ兎が　跳んで出て
ころり　ころげた　木のねっこ

待ちぼうけ　待ちぼうけ
しめた　これから寝て待とか
待てば獲ものは　駆けて来る
兎ぶつかれ　木のねっこ

待ちぼうけ　待ちぼうけ
きのう鍬とり　畑仕事
今日はほおづえ　ひなたぼこ
うまいきり株　木のねっこ

待ちぼうけ　待ちぼうけ

今日は　今日はで　待ちぼうけ
明日は　明日はで　森のそと
兎待ち待ち　木のねっこ

待ちぼうけ　待ちぼうけ
もとは涼しい　きびばたけ
いまは荒野の　ほうきぐさ
寒い北風　木のねっこ

これが盗作のネタである。ただし、３０年も前のこととて、歌詞の正確さは保証の限りではない。著作権とかなんとか言われると、身も蓋もない。

「棚からぼたもち」「あんこうの川流れ」「濡れ手に粟」「果報は寝て待て」と、これに似た諺もあれば、「３年寝太郎」などという劇もある。「悪銭身につかず」というのがもっと近いか‥・・。とにかく、これがわたしのやって来た伝道である。聖書学校で教わった伝道であり、伝統的教会から、せっかく苦労して盗み取った伝道である。

何年か前の、天下のＮＨＫの調査によれば、日本人の３６％は、宗教を選ぶならばキリスト教と考えているそうである。猿は山に群れている。うさぎも野に跳ね回っている。ところが、今の教会は「まちぼうけ」の百姓なのだ。南の小島の、ココナッツの木の下の老人なのだ。

さてはて、散々悪態をついてしまったが、「そんならお前はどうなんだ」と言われないために、始めから自分を悪態の対象に含めてある。要するに、これは徹底して辛辣な自己批判なのだ。そして、自分はまさしくこの現代教会の一員であり、その申し子であるがゆえに、自分を教会の中に置いた教会批判である。

ところが、この拙文愚説を読んでくださっている方に取っては、まるで「藪から棒」。自分の愛し仕えている教会が、故なく、罵詈雑言を浴びせかけられているのを聞いて、突然どこからともなく現れた悪がきに、いきなり頭を三つ四つ殴られたような、腹立たしい戸惑いを感じておられるのに違いない。実は、悪がきであるわたしは腹を立てている。自分の不甲斐なさに、腹を立て、ところ構わず当り散らしているのである。不甲斐ない自分を作りあげ、不甲斐ない自分を、「まあ、結構やっているじゃないの・・・」と許しておく教会に腹を立て、荒れているのだ。通りかかった奴はだれでも、ぶんなぐってやりたいのだ。これも何かの「因果と思って」諦めて欲しい。小さくなってお願いします。

「こんな、短いセンテンスの中で、2回も仏教用語を使った」などと目くじらを立てないでほしい。 そんなことを言われると、おちおち「有難う」も言えなくなる。そういえば、「袖ふり合うも他生の縁」と、何度もくり返している説教者がいた。あるいは「多少の縁」と理解していたのか。それにしても、やはり変である。

理屈の部・でも伝道の宣伝

いつの間にか、長ったらしい前置きになってしまった。本論に入ろう。本論と言ったところで、回り道、迷い道。１杯のつもりの２杯が重なり、電信柱に抱きついて、「お巡りさん。すみません」と謝っているおっさんの、ふらつく足ほどにも心もとないと、始めからお断りしておいたほうが、少なくても正直だと誉められるに違いない。この千鳥足の伝道法を「でも伝道」と名づけよう。

「いつでも」の伝道

１０年を一昔と言うならもう三昔ほども前になるが、小中学校教師の「勤務評定」なるものが大問題になった。日頃試験で生徒を苦しめ 、「通知表」なる卑怯千万きわまりない伝家の宝刀をもって、生徒を情け容赦なく等級づけし、脅しつけていた先生どもも、これからは、評価される側に回るのだと聞いて、劣等生であった悪がき仲間は大いに溜飲を下げたものである。

ところで、わたしたちの団体にも勤務評定がある。別にことさら評定しようというわけではなく、それぞれの教会と牧師たちの実情を知ろうという、団体ならば当然至極の月々の報告義務であり、善意に解釈すれば、実情を知ってより良い対処と指導ができるようにという、親心の現われである。ところが劣等感にさいなまれる「ひがみ伝道者」には、これが、あの恨み多い通知表にも増して、嫌悪の対象となる。

この教団の勤務評定で最も重要なのは、日曜礼拝会の出席者の数である。幾らかでも「み覚え良きことを願う」わが同労者たちは、子供、赤んぼうは勿論のこと、ついつい、ひょいと迷い込んで来た子猫の小さな頭まで、数に入れてしまう・・・・・のではないかと勝手に疑心暗鬼、血迷った考えを持ってしまうほどである。いやこれは、出席者の頭ではなく耳を数えて報告し、決心者はその指の数を数えて宣伝しなければ献金を集められない、海の向こうのエバンジエリストたちとの付き合いが多過ぎた、わたしの妄想だろう。

とにかく、現代の教会は日曜日の礼拝会に賭けている。たとえば、だれかが、キリストと父はひとつ。キリストと聖霊はひとつ。キリストは父であり、キリストは聖霊であると言ったところで、たいした問題にはならないだろう。神は愛であるが故に、最終的には全人類をお救いになると言っても、かなり通用するにちがいない。福音派を標榜する新聞雑誌に、そのようなことを主張する人達の宣伝がたくさん載っている。しかし、もしもわたしが、日曜礼拝会をしない教会を建てたら、信徒に、日曜礼拝会に出席しなくても良いと言ったら、どんなことになるだろう。現代教会は、中世教会が魔女狩りに示した、あの熱烈な情熱を取りもどして、わたしを狩りたてるだろう。・・・・すでに現代魔女狩りにあった同労者がいると聞く・・・・。

現代の教会の活動は日曜日中心で、日曜日以外には満足な働きをしていない。と言うと、「そんな事はない。うちの教会は週７日間、活発に働いている」とおっしゃる方がいるだろう。いや、いて欲しい。できるだけたくさんいて欲しい。そして、それが本当だったら、わたしはその方たちに、オーバー・ジェネラライジェーション、つまり、あんまりにも一般化を急ぎ過ぎた罪を、詫びるのにやぶさかではない。誤解しないでほしい。わたしが言っているのは教会の活動であって、牧師の働きではない。牧師なら、１年３６５日忙しく仕事をしている方たちをたくさん知っている。だから、昔、小学校の荒い木目の廊下を毎日水拭きした時の雑巾のように、たちまち古び、ほころび、擦り切れて行く牧師も珍しくない。

牧師も教会の一員であるから、牧師の働きは教会の働きであるという、至極もっともな神学的議論は、今は御免こうむりたい。論点がそこに無いからだ。日本の平均的教会の日曜日の忙しさは、忙しさを通り越して繁雑になっている。どじょうと、なまずと、うなぎと、八つ目うなぎとを手桶の中で仕分けするより大変だ。ところが一方、月曜から土曜までの教会は、開店休業状態である。だから、一般の人達は日曜日以外に福音を聞くことは不可能である。

おまけに、最近の教会の多くは夜の伝道会は開いていない。人が集まらないのだそうだ。従って、現代の日本人が福音を聞くためには、日曜日の朝１０時頃から１２時過ぎまで、つまり一般の教会が礼拝会を開いている時に、時間が取れなければならない。みんなが、単純な社会生活を営んでいた時代、すなわち、重労働の中でも人間が時間を支配していた時代ならいざ知らず、この複雑多様化した社会、人間が時間に支配されている時代に生きる現代人の、はたしてどれだけが、日曜日の朝、教会に行く時間を作ることができるか。直ちに生死に関わる事柄ならばともかく、ちょっとキリスト教に興味を持っているとか、せいぜい、「そのうち暇ができたら、クリスチャンになってみようかな」などと考えている、つまり、今一番クリスチャンになりやすい状態にいるこの人たちが、わざわざ時間を作って教会に来る事などは、まずあり得ない。だからわたしたちは、特伝でも、訪問伝道でも、福音を語った相手が日曜日には時間の無い人だったら、つい、手抜きをしてしまう。小アジを釣りに行って大きなチヌの群れに出くわした。諦めるより他はない。

現代教会はひねくれた安息日主義者だ。「日曜日に教会に来ることができない人たちは、滅びるに相応しい罪人である。彼らに救いはあり得ない。何故なら彼らは教会が定めた日時に、教会に来て福音を聞こうとしないからだ。「神よ。この教会がここに３０年も建ち続けているのを知っていながら、来ようとしないこれら罪人を地獄へ送り給え。警察官も消防署の職員も電車の運転手も、デパートの売り子も、商店街のやからも、日曜日に仕事をしている者すべて。ましてやゴルフに出かけるサラリーマンなんぞ、一片の哀れみもなく罰し賜え」と、日曜日毎に、声たかだかに説教している。もしも声高々が間違っているなら、少なくても、言葉より力のある行いで説教している。日躍日に教会に来ることができないために、救われなかった人たちの魂の責任は教会にはないと、教会は信じて疑わない。

しかし、奇跡は起こる。普段の日曜日には働かなければならない人も、どういうわけか特別の日曜日などに教会に来て、救われることもある。そして、悲劇はここから始まる。彼は、日

曜日に礼拝出席を守ることができない、Ｂ級クリスチャンとして白い目で見られる事に甘んじなければならないからだ。そしてまた、奇跡が起こる。Ａ級クリスチャンを目指して、彼は、収入が減るのを覚悟で職業を変えるのだ。わたしは、何度かこの感動すべき奇跡を見てきた。素晴らしい信仰の勝利だと思う。だがこれは奇跡だ。滅多に起こらないし、そうそう起こってもらっても困る。

わたしたちは、聖日厳守をきつく教えられて育った。高校１年で救われたわたしは、現在まで 25 年近いクリスチャン人生の中で、日曜礼拝会を欠かしたことは２回しかない。一度は盲腸の手術の２日後で、かたくなに礼拝会出席を守ろうとするわたしを知っていた牧師が、そっと着物を隠してしまった。パジャマで礼拝出席はかなわぬ。ベッドの上で、「これしきのこと」で礼拝出席をとどめる牧師の「不信仰」を、独りで罵った。２回目は沖縄の開拓伝道に派遣された時のこと。台湾坊主に出くわしたわれらの船は、散々翻弄されたあげく奄美大島あたりで引き返し、鹿児島湾で一泊してしまった。日曜の朝はまだ「オエー、オエー」やっている連中と、耳慣れない琉球音楽のやたらにでっかい音に囲まれて、一人で賛美歌を唄う気分にもなれなかった。そんなことだから、高校時代にも、日曜日に行われた学校行事には一切参加しなかった。自分の卒業式にさえ参加しなかった。卒業証書と紅白のまんじゅうは後で友人が届けてくれた。わたしは、Ａ級クリスチャンである自分に満足していた。日曜礼拝会の出席のため、３０年間勤めた国鉄職員の地位を棒に振った男性は、・・・ (兄弟と言えないのが残念だ。彼はその後、同じように潔く・・・・ではないか・・・きっぱりと信仰を捨てた・・・・) わたしの英雄であった。

ところで、日曜日が聖日と呼ばれるようになったのは、いつ頃のことだったのか、どんな経緯だったのか、わたしは知らない。新約聖書はある特定の日を大切としてはいないから、あるいは、旧約聖書から来たことかも知れない。とすると、安息日を聖とせよという処から来たらしい。さすれば、日曜日を聖日と呼んでいる教会は、日曜日を安息日と考えているらしい。もしも旧約時代の安息日の定めが、新約時代の今日にもそのまま適応されねばならぬとすると、神学の上でも実際生活の上でも、いろいろ問題が生じてくる。

キリストは律法主義的安息日厳守と戦い、そのために、命を賭けられたのではなかったか。安息日は土曜日ではなかったか。安息日にはやるべきではなかった活動を、教会はやっていないか。ローマ１４の５と６、あるいはコロサイ２の１６にはっきりと記された、特定の日や安息日に関するパウロの教えをどう解釈するのか。

ユダや人はたしか、「ナントカ」と呼ばれる（ヘブル語の名前を忘れた！）特別の召し使いを持っていた。安息日に自分たちには禁じられている仕事をさせるためである。現代のイスラエル人たちも、安息日には冷蔵庫の戸を開けることも、切れた電球を取り替えることもできない。どうしても必要なときには、非ユダヤ教徒に頼まなければならないそうである。しかし、厳密には頼むのもいけないことらしい。階段を昇るのもエレベーターのボタンを押すのもいけないという。この現代の複雑化した世界に、単純な生活を背景とした安息日の、厳格な律法主義的解釈を押し付けようとすると、このような馬鹿げたことになってしまう。

教会が日曜日を安息日と考えた例は、３世紀の終わり頃わずかにあったのと、厳格なピューリタンのなかに少し見られた以外は、取り上げるべきものがない。クリスチャン安息日という表現は、２０世紀になってからカトリックが言い出したもので、ギリシヤ正教会がそれに影響を受けた。特異なものとしてはセブンスデー教会があることはご存知のとおりである。

しかし、もしも聖日という呼びかたが、その日を機能的に便宜上選んで、特別に神様に捧げる活動をする日として、聖別するというところから来たのならば、ちょうど、たくさんの皿の中から、猫に餌を与えるための皿を選び出して、分けておくように、・‥ ‥ これはいけない。これでは聖別ではなく俗別だ。そうではなく、たくさんの盃の中から、特別に王様の御用のためだけに使おうと、ひとつだけを選び出し分けておくのと同じように・・・・これなら良い・・・。その主旨といきさつは理解できる。

それなら、べつに日曜日でなくても良いわけだ。金曜でも火曜でもかまわない。人々の都合の良い日が一番良い。安息日の精神は・・・・・、キリストによると・・・・・安息日のために人があるのではなく、人のために安息日があるということだ。この複雑多様化した社会に生きる現代人に、一番都合の良い日は毎日である。もしも、現代の教会は礼拝会を伝道の場にしているのなら、少なくても、毎日、できたら１日に２回ぐらい、礼拝会を開くべきである。もしも、１週間１回きりの礼拝会で１００人なら、１週間に７回の礼拝会を開けば、７００人になるというような、付け焼刃の教会成長論者たちが良くやる、とらぬ狸の皮算用はしないまでも、１２０人位にはなるかも知れぬ。

一体、現在の日曜日の朝の礼拝会という伝統は、いつどのようにして始まったのだろう。わたしは伝統というものを大切にする。それは多くの人の、しかも歴史を重ねた多くの人の経験から生まれた知恵であり、一人の人間の生半可な考えから出た性急な結論ではない。一方、時代と環境に取り残された伝統は、形骸に他ならない。まして、伝統は神の言葉ではない。それは、ある時代における神の言葉の解釈であり、ある状況における神の言葉の適用であったかも知れないが、神の言葉ではない。ところが、伝統を大切にするあまり、神の言葉を無にしてしまうということが、キリストの時代以前からしばしば行われていた。どうやら人間は伝統的に伝統に弱いらしい。聖書の中には日曜日の朝の礼拝会を持たなければならないという教えはないし、日曜日の朝の礼拝会が確かに開かれていたという言及もない。確かにあるのは伝統である。主の日というのは、ただ一度でてくる。（黙１：１０）ここから、主日礼拝会という言い方も生まれた。これは、主の甦られた日を記念して呼んだのであり、勿論、日曜日のことである。とは言え、このような呼称が定着したのはずっと後のことで、「ディダケー」やイグナチウスによって一般化されたらしい。

もうひとつ、たった２度のことだが、週の始めの日という表現がある。そうして、どうやらこの日に、初代の、少なくてもトロアスのクリスチャンたちは、何らかの集会をしていたと考えられる。（使徒２０：７）コリントの教会の場合も、あるいは集会をしていたのかも知れない（Ⅰコリ１６：２）そこで、論理の飛躍を承知の上で、初代の教会は日曜日に礼拝会を開くの

を習慣としていたと言ったところで、はたしてそれが、日曜日の朝であったか、保証の限りではない。いや、むしろ、日曜日の朝ではあり得なかったのが明らかだ。日曜日は安息日あけで忙しいビジネスの日だったから、そんな日の朝から、何万人ものクリスチャンたちが揃って仕事を休めば、間違いなく社会の混乱を招いただろう。キリスト教は非公認宗教であった。それを奉じていた彼らは、できる限り穏健にことを運びたかった筈である。下手をすれば騒乱罪で罰を受ける可能性もあったのだ。

では、日曜日のいつ集まったのか。もちろん夜、つまり晩である。仕事のないときである。 ところで当時のユダヤの暦によれば、日曜日の晩は今で言うと土曜日の晩であり、日曜日の晩ではなかったことをご存じだろうか。当時の１日は日没に始まり、日没に終わったのである。つまり、ごく初期のエルサレム教会が習慣的に日曜礼拝会を開いていたとしても、それは、現代で言えば土曜日であったに違いないのだ。土曜日の夜の集会が長引いて、あるものはそのまま残り、次の朝、つまり、主が甦られた日の朝早く、甦りを喜ぶ礼拝をしてから仕事に出かけたことは、おおいに考えられる。少し後のトロアスでの場合は、ルカがローマ時間を用いて使徒の働きを書いたとすれば、日曜日の夜の事と考えられる。

キリスト教が揺籃期だった頃、エルサレムのクリスチャンたちはみな忠実なユダヤ教徒として、安息日、つまり土曜日には、揃って会堂に出席し、その活動に参加し、ユダヤ人としての義務を果たしていた。たとえ、ナザレの大工をメシヤと信じる新しい信仰を持ったからとはいえ、彼らは忠実なユダヤ人であることを止めなかったし、その習慣も変えなかった。 だからこそ、彼らは全ての人たちに尊敬されていたのである。（使 ５：１３）そして、安息日の会堂での活動はかなりのものであり、安息日に許された範囲ぎりぎりだったため、会堂の活動以外の活動は一切不可能だった。したがってクリスチャンたちは、土曜日には礼拝会はおろか、クリスチャンとしての活動は何ひとつできなかったのである。

当時のクリスチャンたちは、毎日集会をしていた。（正確には多分安息日以外）それは旧約聖書と使徒たちの教えの学びと、交わり会とが入り混じったような集会だったに違いない。エルサレムではユダヤ教の会堂として使用されていた家々が、クリスチャンたちの集まりにも使用されたことだろう。当然、会堂の活動や形態が手本として教会の活動と形態に取り入れられた。しばらくたって落ち着き始めた頃、教会が安息日あけの晩、すなわち日曜日の晩、現在でいうと土曜日の晩に集会を開くのを習慣とするようになったのは、自然の成り行きであり、教会が実情に対処するダイナミックな活力を持っていたことの証拠である。

しかし、日曜日であろうと土曜日であろうと、夜の集会は長続きしなかった。皇帝トラヤヌス（在位期間ＡＤ．９８～１１７） は、認定を受けていない団体の晩餐会を禁じたからである。当時の教会の集会から晩餐（聖餐がふくまれていた）を取り除いては、集会の意義がなくなったも同然であった。これを契機に日曜日の早朝、すなわち一般労働者、奴隷も出席できる日の出前の礼拝会が、重要性を増したものと考えられる。ただし、キリストの甦りが日曜日であったことが広く知られるようになったのは、２世紀の終わりであって、多くのクリスチャンたちは、まだ日曜礼拝会と主の甦りの意義とを結びつけて考えてはいなかった。そして彼らが日曜

日の午前中ゆっくり礼拝会を満喫できるようになったのは、皇帝コンスタンチヌスが日曜日を休日とした３２１年似降のことである。しかも、これとて農業に従事しているものを始め、仕事の都合で休めない者は休まなくても良かったし、コンスタンチヌスのキリストに対する信仰とか、クリスチャンたちのためとかいうことよりは、「太陽の日」という異教的感覚から出て来たことである。

とにかく、聖書は現在の日曜日の朝の礼拝会に関しては沈黙している。そのうえ朝１０時とか１０時半とか言うのは、２００年ほども前の、開拓期のアメリカの生活様式から出てきたものだという。広い土地でたくさんの家畜を飼っていた彼らは、たとえ日曜日であろうと餌を与え、乳を搾らなければならなかった。それらの仕事を終えて礼拝会に出席するには、１０時か１０時半がちょうど良かったのだった。この単純な牧畜農業生活を営んでいた人たちの古い習慣を、現代の複雑多様化した社会に生きているわたしたちが、いこじに守り通さなければならないという義理はない。

クリスチャンの中には頑固な人が多い。アメリカには、まだ、開拓移民時代の故郷の生活様式をがんとして守り続けている、「アーミッシュ」と呼ばれる人たちがいる。服も靴も帽子も頭飾りも家も家具も馬車も農具も昔のままである。車も電車もラジオもテレビも、現代機器は一切使わない。それが正しい信仰態度だと信じている。彼らの時代遅れの生活様式も、実はその昔、保守的な人が眉をひそめた、「時代に迎合し奇を衒う生き方」だったということに気付いていないのだろうか。でも、あんな生き方には何となくロマンがある・・・・・ね。

開拓時代のアメリ力人は、集まりを安息日の次の日に持ってきた初代のクリスチャンたちのように、活力に溢れていた。だから、自分たちの新しい生活様式に合わせた時間に集会を持ってきた。ところが、頑だったというか、保守的だったというか、伝統を大切にしたアングリカン（イギリス国教会）はイギリスでのやり方を変えなかった。礼拝会の時間も、７時ころが普通だった。当り前のことながら、当時もっとも力のあったこの教会は、アメリ力で成長する機会を失い、取り残されてしまったのだ。

たとえ新約聖書が、日曜日は新約時代の安息日であると教えていたとしても、（教えてはいないが）はたして、現代の日曜日は間違いなく神の前に日曜日なのか、わたしはあまり自信を持てない。１日が正確に２４時間なのではないために、閏年があることは誰でも知っている。ところが、閏年を入れても完全に時間を調節できず、長い期間には狂いを生じてしまう。だから歴史上、確か２度ほど・・・・・一度だったかもしれない・・・・・暦の調整が行われている筈なのだ。だから、その暦の調整を、神が承認したことが確かでなければ、いまの日曜日は、神の前に日曜日ではない。

日曜日に礼拝会をするのはよい。それを主日礼拝会と呼ぶのも別に構わない。聖日と言ったって目くじらはたてない。だからといって、日曜日を安息日と同等にしてはいけない。日曜日以外に礼拝会をしないのはいけない。日曜日以外に福音が語られないのは、もっといけない。

☆　　☆　　☆　　☆

だが、こう言うとすぐに、「日曜以外には人が集まって来ないんだよ」という声が返ってくる。確かに、現代人は集まらない。だから教会はせめて日曜日は何とかして集めたいと、いや、牧師はなんとかして自分の名説教を、多くの者に聞いて貰いたいと、いやいや、何とかして、報告書にひとりでも多くの数を書き込んで、勤務評定をよくしたいと、そしてあわよくば聖書学校の同期生の中では一番優秀と思われたい。なんの、もうひと踏ん張りして、教会成長の雑誌にでも取り上げてもらいたいと願って、信徒たちに脅しをかける。「日曜日は御聖日である。主の日である。安息日である。軽んじるのは罪である。礼拝会に出ないのは罪である」と。いえいえ、本当のところは、そんな悪い牧師はいません。みんな、信徒の成長と幸せを願っての事なのです。嘘を言うと閻魔様に舌を抜かれるよ」とか、「食べてすぐ寝ると牛になるよ」と言うのと同じ方便なのです。

正統的力トリックでは、日曜日のミサを欠かす事は許されない罪になっている。そこで行われる聖餐式にあずかれないからである。彼らによれば葡萄酒とパンは罪の赦しのためにくり返して捧げられる犠牲であって、それにあずからない事は赦しにあずかれないことなのである。だから一般的カトリック教徒は、戦々恐々としてミサに参加する。なにしろ、今週のミサを逃すと、先週から犯し続けた罪が赦されずに残っているのだから、事故にでも遭遇して死んでしまっては、それこそたいへん。日本のカトリックのことは知らないが、少なくても、アジア唯一のカトリック国、フィリピンの大衆はそう信じている。従って、もうすぐ早朝ミサという土曜日の夜は、飲んで踊ってギヤンブルをして女を買う。ミサが済めば、みんなきれいさっぱり赦されて、いつ死んでも大丈夫。

わたしたちも、日曜日の朝に人を集めることだけのことだったら、カトリックの教えを取り入れたら良い。それが良くないならば、あんまり効かない脅しは止めるべきだ。そして、他の方法を考えるのが得策に違いない。

人が集まらないのは、一度に全員、それが無理なら、せめて少しでも多く集めようとするからである。同じ言葉をくり返すが、「この複雑多様化した社会」に生を営んでいる現代人は、時間に操られている哀れな人種なのだ。だから、７２人の信徒全員が集まるのは、牧師が死んだ時くらいなものである。いや、その時だって怪しい。とすれば、通常の行事ではどんなに頑張ったって５０人、良くて５５人がせいぜいである。しかし一方、現代社会がこうだから、いつなん時だって、たとえそれが夜中の１２時だって２、３人は集まることができる。５人なら、昼間であればいつでも、７人なら毎晩大丈夫。要するに、少人数で牧師が満足できれば、全く問題はないのである。

悪いことに、牧師は説教をする訓練を受けている。説教というものは、１０人やそこらでは気が抜けて、２、３人では、腰が折れてしまう。やっぱり大勢でなきゃ、本調子にならない。

しかしだ、ならぬ堪忍するが堪忍。２、３人でも大切な魂。説教が駄目ならお話をしたら良い。お話も駄目なら、おしゃべりをしたら良い。それも駄目なら、おしゃべり好きの牧師夫人にしてもらったら良い。 どうしても駄目なら、信徒にしてもらうのが良い。その方がかえって良い。いよいよとなったら、みんなでごちゃごちゃ喋りあって、賛美をして祈ったら良い。ようするに、主題を聖書の教え、神様に置いてやったらそれで上等。そうしたら、どうなる。 ３人の集まりが５人になり、５人の交わりが１０人になることだってあるかもしれない。そうすれば、必然的に礼拝会の出席も多くなる。

「・・・・・・また、早く目が覚めてしまった・・・・・。薄暗い内から起き出しては、家族全員に叱られる。タベの残業で疲れている息子は機嫌が悪いし、その息子が親の反対を押し切って結婚した嫁は、低血圧で寝起きが悪い。そのうえ、可愛い孫もこの事ばかりは敵に回ってしまう。お土産で手なづけるにも、この頃の子供は少々の物には見向きもしない。『３文の得』と言われて、早起きが美徳だった頃の癖がうらめしい」 毎朝毎朝、こんな思いで３７回半も寝返りを打っている、お年寄りがたくさんいる。だから週に２、３回は、朝早く、お年寄りのための集まりをしたらよい。若い牧師は寝ているがよい。 真面目ぶって顔を出すと、勢い込んだ貫一お宮が、ハムレットの３幕２場に登場した図ができあがる。

「日曜日は駄目よ」の主婦たちにも、実はいろいろあって、幼稚園に通う子供のいる若奥さんは、午後のテレビ番組に飽き飽きしているし、子育ての終わった有閑マダムは、午前９時４７分頃から退屈しはじめる。教会のご婦人たちが、彼女たちにも福音を聞ける場を作ったら良い。若い牧師は引っ込んでいるがよい。でしゃばっては、ソープオペラがテレビから飛び出す恐れがある。

「そんなことをしたら、けじめがなくなる。たがが外れて、日曜日にはかえって集まらなくなる」そのようにおっしゃる方が必ず出て来る。わたしとて、ある程度のたがの必要性を認めている。特にわたしのような、ちゃらんぽらんの人間には、絶対にたがは欠かせない。でも、たがというものは・・・・・若い人たち、「たが」って知っているかな・・・・「箍」って書くんだよ。たいがい、竹でできていたから竹冠さ、古典落語に「たが屋ぁー」ってのがあってね。桶・・・・・知ってるよね・・・だの樽だのが、ばらばらにならないように、締め付けていた丸い環だ。そのたがというのは、もともと互いにくっつく性質の無い物を、無理にくっつけて置くためにあるものだ。

ところが教会とは何か。クリスチャンとは何か。磁石の如く、つきたての餅の如く、解けたあめ玉の如く、本来、ベッタベッタと互いにくっつき合って止まないものではないのか。迫害者たちが何とか蹴散らかそうとして、あらゆる策を弄したにもかかわらず、みんな失敗したほど、くっつき続けたものではないか。教会が、すなわちクリスチャンが病に罹り、本来の性質を失い始めるとくっつかなくなる。たがも大切だが、教会の健康、クリスチャンの健康はもっと大切である。残念ながら個人主義の福音に毒された欧米的教会は、この教会本来の、くっつかずにはおれない性質をかなり失いかけている。

だがしかしアメリカは偉大だ。教会本来のくっつく性質にとって替わる接着剤を作り出した。それがエンターテイメントだ。つまり人を惹き付ける楽しいことを一杯やることだ。アメリ力の偉大さは数々あるが、こと、エンターテイメントにかけては抜群で、これに比べると、さすがの日本も赤ちゃんだ。映画、舞台、音楽、テレビ、スポーツ、そしてギャンブル、酒場、デパート、テーマ・パーク、サーカス、更には選挙まで、実に楽しくさせて人を惹きつける。

アメリ力の教会はエンターテイメントに精出しいそしむ。有能な牧師とは、良いエンターテイナーのことである。「話のわかる楽しいやつ」というのが、牧師を誉める言い方になっている。だから、礼拝会はショーである。歌もあり、トークもあり、踊りもある。ライティングとサウンドは一流の劇場に劣らない。椅子はゆったり、床はカーペットでふかふかだ。泥足で頭にかんな屑を乗っけたイエス様にはご遠慮願う。派手なところでは、美人コンテスト、ファッション・ショーもある。ヤンキーさんは、何事も徹底してやらねば気がすまぬらしい。

でも、日本の教会のエンターテイメントの物真似は、みすぼらしくていただけない。やっぱり教会本来の性質を取り戻すことだ。わたしたちは、はっきり悟らなくてはならない。たとえ３６％の日本人が、クリスチャンになることを望んでいるか、「なんなら、なっても悪くないない」くらいに考えているとしても、教会が日曜日の朝にしか福音を語ろうとしないならば、その３６％の１０％も救われるチヤンスはないのである。 日曜日以外にも伝道しよう。いつでも伝道しょう。

「どこでも」の伝道

はてさて、では教会が日曜日主義から解放されて、いつでも働くようになったなら、四、六時中福音を語るようになったなら、それですぐ伝道の成功が保証されるのだろうか。それはあんまりにも気が早過ぎると言うものだ。４本まで切り取られた足のうち、１本だけが生えてきたからと言って、すぐに健康な蛸ができると期待してはならない。他の足も生えてくるのを待たねばならない。随分と時間もかかる。

そこで、もう１本の足について語ろう。それは、場所である。現代の教会は、まず殆ど場所を中心にした伝道をしている。開拓伝道を始めると言えば、まず適当な家捜しから手を付ける。ふつう教会を建てると言えば、それは聖書が言っているキリストの体としての教会ではなく、教会の建物のことである。一般のクリスチャンたちの会話では、たとえキリストの体である教会があっても、教会の建物がなければ教会は存在しないことになっている。教会とは建物である。立派な教会とは、少なくても、何億円もかけた教会の建物のことであって、信徒たちが愛し合い、いたわりあい、励まし合いながら生きている共同体のことではない。

わたしたちも大変おせわになっている改革派の神学に、「教会とは、福音が語られ、礼典がとりおこなわれるところである」というのがある。カルビンは 「福音が語られ、礼典がとりおこ

なわれるところには、どこにでも教会が存在する」と言ったという。だまされてはいけない。この二つは似て非なる物。うなぎとへび、井上靖と井上ひさしパヘロとパレホくらいの違いはある。パヘロとパレホの違いは、日本の皆さんには説明が必要だろう。

いま、フィリピンで一番人気のある車は、三菱の四輪駆動車、パジェロである。仕事の性質上、どうしても四輪駆動車が欲しかったわたしも、１０年来の願いがかなって、昨年とうとうこの車を手に入れた。おかげで、ずいぶん働きが拡大されたなどということは、話の本筋に関係ない。とにかく、この車をこちらではスペイン風の読み方を取って、パヘロと呼ぶ。ところが最近、どういうわけか、この実用車が贅沢車に分類されて物凄く高価になった。大工の頭領が、３０年間の収入を「耳を揃えて出して」も買えない。ベンツよりも人気がある。そこにつけこんで、つい最近、パレホと言う車が発売されだした。

外側の見てくれはパヘロとまったく同じ。車体に取り付けられた「**PAREJO**」という文字も、「**PAJERO**」と同じデザインで、よほど注意をしなければ、見分けがつかない。聞くところによると、エンジンなどの大切な部分は、日本の中古トラックから外したものをかき集めて、外側だけはパジェロにそっくりに作り上げられたらしい。もちろん随分安価に出来ている。そしてこの「**PAREJO**」なる語は、フィリピンの国語のもとになっているタガログ語では、「おなじ」という意味である。「何で高いパヘロを買わなきゃなんないのか。パレホで良いじゃないか。どっちにしたってパレホだよ」ってわけだ。ぜひとも言葉の鬼才、丸谷才一氏に教えて上げたいほどの見事なパロデー。フィリピン人の面目、躍如である。

話をもどそう。「福音が語られ、礼典がとりおこなわれるところには、どこにでも教会が存在する」という、カルビンの言葉は神学的に正しい・・・・かもしれない。むろん、厳密なことは控えての話だが・・‥ ・。しかしもう一方、「教会とは、福音が語られ、礼典がとりおこなわれるところである」という、改革派の神学はいただけない。教会は「ところ」、つまり場所ではない。絶対に、ない。１丁目１番地にあるのは教会ではなく、教会の建物であり、事務所であり、礼拝所であり、祈りの家であり、牧師の住居であるが、教会ではない。そして、教会とは、これも絶対に、「福音が語られる対象」ではない。「福音を語る者」である。 福音を語るために、その目的のために、福音を託されて、この世に遣わされたキリストの大使であり、代理である。決して、決して、断じて、福音が語られる対象ではない。

最近のクリスチャンの雑誌や新聞は、これでもか、これでもかと、高価で美しい会堂の新築をニュースにし、特集を組む。そして美しい会堂の新築こそが、教会の成長の薬だ、良薬だ、妙薬だ、秘薬だ、特効薬だ、仙薬だという。教会が成長しないのは、会堂が古いからだ、小さいからだ、目立たないからだと信じ込ませ、新会堂を建てられないのは信仰が足りないからだと断言し、糾弾する。

従って、会堂建築に一言挟む者は、信徒であれ教職であれ、悪魔に魂を売った輩である。そんな輩に耳を貸してはならぬ。だから、今まで我慢に我慢を重ねて、ここまで読んで来たこの文も、もうこれ以上読み続けてはいけない。廃棄処分にすべきである。そういうわけで、あわ

れ、この小文も浮かばれなくなる運命にある。

だから、悪魔に耳を貸す者だけが、今この部分を読んでいる。悪魔の言葉は耳に心地よいと聞く。はたしてそうか、お試しいただきたい。

ここ１０年ほどの間に、会堂新築を成し遂げられた数十人の牧師たちに聞いてみた。「会堂が建ち上がったとき、何人の信徒が死んでいましたか？」 ひどい質問とお怒りになられるな。わたしの学びの大切な一部だったのだ。その結果、死亡ゼロはたったのひとつ。どの教会も会堂を建てるときには、相当無理をしたらしい。無理をしたほど死亡率が高い。死亡者の中には必ずと言って良いほど、忠実だった役員クラスの信徒が入っている。余りの重荷に潰れてしまったのだ。

教会堂とはそれほど大切なものなのか。信徒の命に引き替えても惜しくないほど重要な物なのか。託された小さな羊を躓かせ、首に石臼をくくり付けられて、海に投げ込まれてもよいほどに、かけがえのないものなのか。

冷徹な効率主義者である、生煮えの教会成長論者は「そうだ」と言う。「たとえ、何人かは死んだとしても、建て上がった立派な会堂がある限り、教会は成長する。そうすれば、元は取れる。これこそ「一粒の麦、地に落ちて死なずば」であると。

ただ、わたしのイエス様は違う。わたしのイエス様は、立派な会堂のステンド・グラスを取り外して、古道具屋に売り、貧しい者に食べさせ、着させるお方なのだ。こうして書いていると、わたしがいつも訪れ仕えている、フィリピン山岳奥地の人々の生活を思い出す。栄養失調で、寒さに震えている裸の子供たちの姿が、瞼に浮かぶ。（海抜２０００ｍになると、熱帯のフィリピンでも非常に寒い）たかが風疹のために、次々と死んでいった子供たち、原因のわからない下痢で、一晩のうちに揃って逝ってしまった子どもたち。わたしの写真のアルバムの中で、くったくなく笑っているが、この世に生きる限り、もう二度と再びその笑顔を見ることはない。

現代の教会は建物に力を注ぐ。そして建物の中で、おおよその活動はすませてしまう。福音も、既に述べたように、礼拝会という建物の中で行われる行事の中でだけ、語られているに過ぎない。現代日本人は、たとえ、聖書の話を聞きたいと思っていても、日曜日に時間が無ければならない上に、教会堂という「薄気味悪い建物」に入って行かねばならない。これは、容易なことではない。

会堂に足を踏み入れる前、何回も何回も、前の道を行きつ戻りつした人の証。「敷居が高くて」やっとの思いでまたいで来た人の話。わたしたちは笑って聞き逃してはいけない。教会に好意を持っている人でさえこうなのだ。ましてや、興味の無い人。反感を持っている人のことは言わずと知れている。ライオンはワニの潜んで居そうな水辺にやすやすと近寄らない。ワニもライオンの徘徊する野原で日向ぼっこはしない。ボクサーはレスリングのルールでレスラーと試合をしない。レスラーもボクシングのルールでボクサーと試合をしない。それぞれ、自分が強

い場所を知っている。弱い場所も知っている。この世の子たちも、自分の強い場所、弱い場所を知っている。わざわざ試合にならない試合はしない。一方的に説教でまくしたてられ、質問もできない所に来る奴は、それこそ、飛んで火に入る夏の虫である。それよりか、飲めないクリスチャンを無理に誘って、困るのをからかった方が面白い。

☆　　☆　　☆　　☆

教会堂というものは、都合良く近くにあることは少ない。電車を二回乗り替えて、バスを三つ乗り継いで、というほどの人は多くはないにしても、１時間くらいかかって来るのは当り前のことである。どんなに遠くても、礼拝会に出席しないのは罪であると脅されて、飼い慣らされた信徒ならば、・・・・・あるいは、遠くから犠牲を払って参加していることに、献身の意義を感じている信徒ならばいざ知らず、ごく普通の未信者には無理な話である。だから、遠くの信徒は隣人伝道にも力が入らない。一般信徒に取って、伝道とは教会に誘うこと、つまり、教会堂で日曜日に開かれている礼拝会に誘うことであって、自分で福音を語り救いに導くことではないから・・・・・それは牧師の仕事。給料を貰って働いている牧師の仕事を、取り上げてしまってはいけないので・・・・・・教会堂が遠くては伝道にならない。

ご案内のように、・・・・・・今年の夏、日本に帰った折、時代遅れを取り戻そうとテレビの国会中継を観ていたら、偉い議員さんたちがしきりに「ご案内のように」という言葉を使っていた。耳なれないので早速字典を引くと、「ご承知のように」ほどの意味らしい。４０を幾つも越えてから覚えた言葉の使い方。早速使ってみたわけだが、つい先日、ある日本語にうるさい人の書いた物を読んでいると、こんな言葉は使ってはいけないと指摘されていた。それはないでしょう。せっかく覚えたのに、おしいじゃないですか。一回だけ使わせてくださいよ。もう使いませんから・・・・・・。もうひとつ、今回の国会に教えられたことは、国会は黒海と発音しなければならないということである。脱線。

というわけで、ご案内のように、現代の教会にとって会堂の立地条件は、生死を決するほど大切である。何としても市の中心部、少なくても目抜き通りに建てたい。できるだけ目立ち、交通の便の良い場所にしたい。運よく・・この言葉もいけませんか・・・・クリスチャンはこういう場合、「みむねによって」と言うらしいのですが、わたしは、 「みむね」とか「み心」が嫌いなので、お赦し願いたい。若い頃、密かに憧れていた姉妹にいつも意地悪をしていた、死んだ魚を連想させる女性から、「兄弟。貴方とわたしは結婚するのがみむねです」と言われてから、わたしは真剣に「みむね」が嫌いになった。わたしの聖書には「神の名をみだりにとなえてはならない」と教えられている。「みむね」とか「み心」の「み」とは、神様のことでしょう。

脱線を回復させて・・・・、運よく最高の立地条件の土地がみつかると、こんどは支払いが大変。高いですものねぇ･･･ 日本の土地は。最近聞いた話では、日本の土地全部の値段で、ア

メリカ５０州の土地全部を４つ半買えるんですと！！　・・・・・・また、脱線を修復して・・・・。まあ、とにかく、現代日本の平均的教会は、そんな土地を買うほどお金を持っていない。無理すると、また、死亡者が増える。それで、身分に相応しく２等地、あるいは３等地で我慢をする。

ちょっと考えてみよう。教会への距離というものは、必ずしも地理的距離だけではない。時間的距離もあれば経済的距離もある。まあこの二つは、どちらかといえば地理的距離に関係しているが、もうひとつ、心理的距離、あるいは社会的距離というものがある。人間はそれぞれ自分の行動範囲、行動圏というものを持っている。基本的には、散歩の時おしっこをひっかけて歩く犬と変わりがないのかも知れない。子供だった頃は大通りを一本隔てた向こう、あるいは、橋ひとつ越えた向こうは、奇妙で馴染みの無い小さな外国であった。大人になっても同じである。教会堂が、静かな高級住宅地にあると、鉄工場で働く職人さんや、農家のかみさん、仕事のために爪を汚さなければならない種類の人たちは、おいそれと来る事ができない。機械油が染み出ている小さな工場と、安アパートが並ぶ街角にある教会堂には、カルチャー・スクールにでも参加しているような若奥さんや、庭木に三本目の五葉松でも植えてみようかと考えている御仁は、滅多に訪れようなどとは思わない。

こう考えて見ると、教会堂はできる限り公共性、一般性に富むところに建てるのが良いのだが、大概はそうもいかない。結果として、たとえどこに建てたとしても、「神様、この町の３２万７千の魂を救い賜え」と祈っている祈りに反して、精々その人口の十分の一も伝道の対象にできれば、「御の字」である。本当に伝道の対象にできるのは、その会堂が健っている地域の環境に違和感を持たない、しかも、時間距離的にも経済距離的にも、地理距離的にも無理の無い人たちだけだからである。

当時わたしが住んでいた、人口６万の地方都市には、合計４つの教会堂があった。一番瀟洒で大きかったのはカトリック教会の建物だが、ど田舎育ちのわたしには、かえって薄暗い雰囲気が全体を包んで、まるで西洋の化け物でも住んでいるかのように思えた。だから訪れたのは、一番小さくみすぼらしく、全体が雪の重みでかしいでいるような、古い家を借りて集会をしていた教会である。本当に正しい宗教ならば、こけおどかしの建物に金は使わないと・・・・・・浅はかにも思ったからである。本当に浅はかであった。すぐに知ったことだが、牧師は「こんな借り物のぼろ会堂では、来る人も来ません。あのカトリック教会より立派な会堂を与えてください」と、２年と１１ヶ月、毎朝祈り続けていたのだった。

同じ高校の友人に、カトリック教会に顔を出しているのがいたので、聞いてみたところ彼らがカトリック教会を選んだ理由は、クラブの先輩に誘われて出席したミサで、ベールを被った隣の女子高生に、「クラッと来た」のだそうだ。ところで、この女子高生がそこまで美しくも神秘的に見えたのは、ベールを透すステンド・グラスとキヤンドルの絶妙な光の織りなしを演出した建物によるのだから、やはり建物は大切だ。わたしが行った教会の建物では、たとえ、同じ女の子が現れても、わが友人たちはあの青春の夢を見ることができなかったに違いない。

建物は教会のイメージを間違って伝える。ことさら西洋的にすると、純日本的な感覚を持っている人は来たがらない。かといって、純日本的な建物にすると、西洋にロマンチックな想いを抱いている人は、がっかりする。美しく立派、豪華な作りにすると、貧しい人や、カジュアルを好む人は敬遠する。だからと言ってみすぼらしい造りだと、ちょっとクラシーな人は見向きもしない。どんな建物を建てようが、どんな場所で礼拝会を開こうが、必ず、建物と場所自体が人をえり分けるのである。たとえ福音が、すべての人種、すべての階層の人々に対するものであったとしても、教会堂は、その中のごく一部の人だけを選ぶのである。

☆　　☆　　☆　　☆

本来、教会とは建物ではないし、ひとつの場所に静かに留まっているものでもない。教会は、ひばりが丘３丁目２番地の２１５号にあるだけではない。教会はキリストの体である。贖われた人たちである。彼らが同じ愛によって救われ、同じ命によって生かされたものとして、いたわりあい、励まし合い、助け合って、作り上げている共同体である。教会は、すずめが森にも、からすが谷にも、つばめが原にも、さらには、かもが原、ちどりが浜、そして、ふくろう山にもヨシキリ川にも、全市いたるところ、ありとあらゆるところに広がって生きている。クリスチャンが生きているところに、教会が生きているのだ。クリスチャンは、常にキリストの体の一部として生きている。教会として生きている。この教会が、福音を託されているのだ。この教会がキリストの大使なのだ。この教会が伝道をするのだ。自分たちが生きている場所で、自分たちが働いている場所で、福音を語るのだ。勘違いしてはいけない。福音は教会に託されたのだ。だから教会が責任を持って語る。牧師や伝道者ではない。当り前のことだ。

するとどうなる。町中いたるところで福音が語られる。街中あらゆる時に福音が語られる。レストランのテーブルが講壇となり、アパートの６帖間が恵みの座になる。人々はどこでもキリストの話を聞き、いつでも救いの話を耳にする。彼らはわざわざ時間を作って、電車を二つも乗り替えて、肩身の狭い思いをしながら教会堂を訪れなくても、生けるキリストに会うことができるのである。

キリストは人を訪れ、人と共におられる神、インマヌエルとなって下さった方である。教会は、このキリストの代理者、キリストの体である。教会はパウロが感きわまって「キリスト」と呼んだものであり、（Ⅰコリ１２：１２、コロ１：２４）キリストご自身が 「わたし」とお呼びになったものだ。（使徒９：４～５）だから教会は、この意味に於いて「インマヌエルなるキリストとして」人と共に生きる。人と苦しみを共にし、悲しみを分かち合いながら生きる。そのように生きることによって、そのように生きる中で福音を語る。決してひとつの場所に引きこもって生きるものではない。礼拝会というものは、キリストにあってひとつであるという、共同体の具体的表現のひとつであって、礼拝会が共同体、すなわち教会なのではない。夫婦が、たとえ一緒にいない時でも、地球の表と裏に離れている時でも夫婦であるように、教会はたとえ一緒に集まっていない時でも、教会である。教会として生き、教会として機能し、教会とし

て福音を語る。

旧約時代の神の民は、人々を自分たちの中に招きいれることによって、祝福を分けた。新約時代の神の民は、人々のいるところへ出て行って、祝福を分け与えるように命じられている。ところが現代の教会は旧約時代の方法を取って、しきりに招いている。招く為には歓迎、接待、御馳走、エンターテイメントが必要である。しかも、隣のパチンコ、向こうのバー、こちらの劇場より魅力がなければならない。だから、映画、音楽、有名人とプログラムを組む。福音は人を招かない。人のいるところに出て行って躓かせる。

間違っていただきたくないのだが、わたしは、教会が会堂などの建物を持つことに反対しているのではない。教会が、立派な建物なくしては伝道ができない、存在できない、成長できないと考えることに反対しているのだ。教会が、もっともっと大切な本質的な事をないがしろにして、会堂建築に血眼になり、信徒たち、即ち教会そのものを犠牲にしているのを、もうこれ以上黙って見ておれないだけだ。そういう風潮を許しておけないだけだ。

会堂が間違いなく、本当に必要であり、役に立つと判断しての上のことなら、自分たちの力に応じて建てたら良い。会堂があっても、それに捉われない活動をしたら良いと思う。現在の多くの教会は、会堂を建てたがために、信徒の何人かを殺し、活動が内にこもって成長しなくなり、出て行って伝道することを忘れてしまっている。

現代の、つまり、わたしたちの教会は、日曜日だけ活動しているために、救われる可能性のある人たちの９０％を失っている。そして、教会堂の中だけで活動しているために、更に９０％を失っている。すなわち、わたしたちの教会は、これだけで９９％を失っているのだ。

どうもわたしも、やたらに数字を上げる教会成長論者に、だいぶ影響されているらしい。しかし、はたして教会というものをこのように、単に機能論、効率論で片付けて良いものだろうか。あるいは、教会の形態を好き嫌いだけて論じてかまわないのか。実は、それこそわたしの大嫌いなことである。

教会は神の「み心」の中にその起源を持つ。人間が勝手きままに、作ったり作り変えたり、建てたり壊したりできるものではない。神の青写真に従わなければならない。だがら、常に聖書に戻り、神学的に考えなければならない。現代の教会の弱さは、それをしないでただ伝統を受け継ぎ、その上に様々なものを建てようとするところにある。

聖書は教会堂について何と言っているか。それが、実は何にも言っていないのだ。聖書は、こと教会の建物に関しては、一切沈黙している。何故か。それは当時、教会にとって少しも重要なことではなかったからである。聖書を良く調べると、初代の教会は、教会堂などの不動産をまったく持っていなかったことが明白である。ところが、会堂がないから伝道ができないとか、礼拝会ができないとか、教育ができないとか、やれ不便であるとか、所在地がわからないとかいう不満もなかったし、もっと人を惹き付けて効果的な伝道をするために、立派な会堂を

建てようという勧めどころか、アイデアさえなかった。

実際のところ当時の教会は、キリストをメシヤと仰ぐ信仰が、非公認宗教であったため、不動産を持つことができなかったのである。だからといって、この信仰が早く公認宗教と認められ、教会堂を持つことができるようにという祈りはおろか、そのような願いさえ聖書にはしるされていない。教会が会堂などの建物を所有できるようになったのは、４世紀になってからであったし、どんどん大がかりな会堂を建て始めたのは、この信仰がローマの国教とされてからである。それは、ローマの威光を示すことと、教会を堕落させるのに役立った。もっとも、ローマの監視が及ばなかった小アジアの田舎には、２世紀の後半に建てられたと思われる、キリスト教徒の礼拝のための建物が、ひとつだけだが存在したという記録があるそうだ。

とにかく聖書の記録によれば、教会は教会堂なしに存在し、成長し、増え続けたのである。だから、少なくても会堂は教会の絶対必要条件ではない。教会堂が教会の絶対条件化して行く歴史過程を辿るのは、大変面白い、いやそれは教会の堕落と並行しているので、大変悲しい。腹が立つと言った方が良い。興味深い学びだが、今はそれについて語る余裕がない。ただ、マルチン・ルターが宗教改革の火を付けたのは、余りにも腐れきった会堂主義の弊害、その悪臭が彼の所まで及んできたからである。残念なことにルターは免罪符と教皇権とは戦ったが、会堂主義とは充分に戦わなかった。彼は家の教会に興味を持ち、それを広めたいと願ったらしいが、徹底させるまでには至らなかった。彼が伝道と宣教に情熱を燃やしていたら話は別だったに違いない。

聖書には教会堂について何も記されていない。だから、そのために献金を集めるとか、信徒の財産を担保にして借金をするとか、無理をしすぎて教会が分裂したとか、信徒が信仰を失ってしまったとか言う、現代の教会に共通する話題には金輪際触れていない。・・・・・どうも、わたしは仏教用語を使う癖もあるようだ。

☆　　☆　　☆　　☆

ところがなにやら、わたしたちの教会は、教会と旧約時代の神殿を混同しているふしがある。たとえば、わたしが所属している団体の姉貴か母親に当るアメリカの団体には、伝統的に、教会に神殿 （Temple）という名前を付けるのが好きな人たちがいるようである。日本では、神殿は少々重苦しいし、なにかこうなんとなく、神道臭く聞こえるので、「聖堂」というのが普通で、「御聖堂」という人も中にはいる。神殿が 「神の家」と呼ばれているところから、教会堂を神の家と呼び、あたかも、神様がお住まいになる家でもあるかのように、錯覚しておられる信徒の方はかなり多い。牧師にはいないことを願うが。保証はできない。

新約聖書によれば、教会は「神の宮」すなわち神殿であり、「神の家」すなわち神の宿りたもうところである。これは正しい神学である。それが、教会イコール教会堂、教会堂イコール旧

約時代の神殿という、誤った神学に発展した。そこから、クリスチャンたちは、旧約時代の神殿建築の熱心さをもって教会堂建築に当るべきであると、しった激励されるのである。パウロが教会と、それを構成しているすべての正真のクリスチャンとを、神の住みたもうところとして「神の宮」あるいは「神の家」と呼んだのは、厳密には誤りである。なぜなら、神殿などの人の手によって作られたものに、天地をお造りになった神がお住みになるわけがないからである。パウロがそんなことを知らない筈がないから、ここは当然、パウロは一般の人たちの概念を利用して、新しい神学を説明したのにすぎない。

また教会、しいては信徒の内に神様がお住みになると言ったところで、無限で遍在の神にとって、それはおかしなことである。物理的な場所という意味で言うと、遍在の神は未信者の内にも存在される。直径１０メートルの少しの空き間もない鉄の玉を作って、この中に神はいないと言っても、その中に神はおられるのである。神にとって物理的な意味での物体の機密さなど、何の意味も無い。X線さえ通さない鉛で直径１万メートルの玉を作っても、神にとってはスカスカのスポンジよりもまだスカスカなのだ。だからほとほと説明に苦労する。神様が住むとか宿るとか言う言い方は、神と人との新しい親密な関係を、愚かな人間にわかるように親しみ易い言葉で表現しただけである。人間が家に住む。あるいは豚が小屋に住むという意味と同じに理解してはいけない。

教会が、そして信徒ひとりひとりが神の宮であり、神の家であり、神の住みたもうところであると言うパウロの神学は、新しく画期的なものであったが、決してパウロの独創ではなく、実はキリストご自身に端を発し、すでに、ステパノによってかなり発展させられていたものであった。それは、旧約時代の神殿を根本的に否定するところに特徴がある。キリストが神殿を軽視していたことは、彼の言葉の端々にうかがえるが、神殿無用論、あるいは、神殿時代遅れ論とも言える決定的な教えをされたのは、サマリアの井戸端であり、それは、ご自身がキリストであることを最も明確にされたときの事である。神殿が無用である、あるいは無用になったと言う事実と、キリストがおいでになったと言う事実は、切り離して考えることができないのである。

ステパノはこのキリストを主と信じ、このキリストの故に、神殿はもはや無用であると大胆に福音を語ったために、殉教したのである。福音は、神殿が無用であることを告げた。それはひとりの優秀なクリスチャンが命を賭けるほどに素晴らしい福音であったのだ。それはどんな福音だったのか。至聖所が幕によって隔てられていた事に象徴されていた、人を隔て超絶しておられた神が、み子キリストによりインマヌエル、即ち人と共におられる神となり、さらに、キリストのみ業によって、人の内に住みたもう神になって下さったのだ。神殿の幕は人手によらず、真二つに切り裂かれたのだ。

これは、ひとつの場所が正式の礼拝の場所、神との会見の場所として定められ、制約されていた時代から、神はどこに於いてでも真実の礼拝をお受けになり、どこに於いてでも人に会見してくださる時代への移行である。新約の福音は神殿を否定する。たとえ、それが教会堂と呼ばれるものであっても、あるいは単なる貸家であっても、神との会見の場を制約し、礼拝の場

所を制約するものは一切、新約の福音に反する。キリストの十字架の意味を否定するものである。わたしたち現代教会の教会堂中心の活動は、知ると知らざるとにかかわらず、人々が神と会見できる場を制約してはいないか。礼拝の場を人々から取り上げてはいないか。

ところで、神殿が神様の「み心」から出てきたものではないことを、ご存知だろうか。神殿は、少々贅沢になってきたダビデ王の心から 出てきたものであって、神様はそれを容認されたにすぎない。似たような例は王制である。イスラエルの王制は決して神様の「み心」によるものではなかったが、神様はそれを容認され、その概念を大切な救い主、あるいは、神の国の理解にご利用になったのである。神様は人の弱さを受け入れ、その愚かさをもお用いになるのだ。

神殿は神様に起源を持たないが、幕屋は徹頭徹尾神様から出ている。神様の指定なさった幕屋は移動可能だったが、人の作った神殿は動かすことができなかった。幕屋をお定めになった神様は、旧約時代の限られた範囲ではあったが、人を導き、人と共に動き、人のいる所におられる方であった。幕屋は、いわば、ご自分のほうから人間にお近付きになろうとする、神様の基本的態度を示すものであった。ところが、幕屋が神殿に閉じ込められてからの神様は、人から隔てられ、人が持定の場所に訪ねて来なければ、会うことができないお方になってしまった。人間が神様を訪ねる図は、キリスト教本来の福音の図ではない。 現代教会の会堂中心主義は、この神様の本来の性質と、福音の性質に反するものである。

しかしだ、わたしたちは今、教会堂、あるいはそれに準ずる建物がない限り、伝道ができない。何をやって良いのか、皆目見当が付かないのだ。 聖書学校を卒業し、神学校を出たところで、状況は悪化こそすれ、良くはならない。そのような学校で教えることと言えば、決まって、教会堂あるいはそれに準ずる建物があって、しかも、その中に既に人間がいることを前提としたことである。

まだ聖書学校の学生だった頃､いろいろな年配の先生がチャペルで奉仕をしてくださったが、多くは苦心談に終始した。なかでも圧巻は、開拓伝道をしても、礼拝会に人が集まらず、何回も壁に向かって説教したという､「説教者として召された」大先輩の勇ましくも高尚、ストイックな態度であった。武士は喰わねど高楊枝子である。本当のことだが、わたしは素直に感激した。素晴らしい献身態度だと、その先生を尊敬した。夜、先生の泊まっておられた部屋に訪ねて行って、教えを乞いたいと思ったほどだ。もちろん、今は考えが変わった。正直言ってばかばかしい。(献身態度がではない) 壁に説教して何になる。一歩外に出れば、通りには人がたくさんいるではないか。公園にも、家にも、庭前にも人はいるではないか。壁に説教するくらいなら、猫にでも説教したほうがましだ。少なくても猫には耳がある。まて？！・・・・「壁に耳あり」と言う。さてはあの大先輩、壁に耳を見ていたのか‥ ・・・。　むむ！ できる！

だが、当時はそれが正しいと思っていた。水曜日には次の日曜日の説教の主題が決まっていた。木曜日には、アウトラインができていた。土曜日にはちゃんと何時間か祈って、全説教、一字一句書き上げていた。赤い線、青い線も引っ張ってあった。それにそって、リハーサルをやったことさえ少なくない。日曜日の礼拝会の時間がやって来た。時間は間違いなくやって来

たが、人は一人も来ない。「主よ。わたしの説教を聞く者を送りたまえ。少なくても、２０時間はかけて準備した説教です」なんて、真剣に祈っていたものだ。外を歩く人の足音に耳をそばだて、これは入って来るのではないか、今度はドアが開くのではないかと、悲しい期待をしたものだ。幸いわたしは壁に向かって説教した事はない。たとえ、それが知能指数８０有るか無しかの女の子ではあっても、ちゃんと耳を持っていてくれた。

しかし、わたしは決して家の中に閉じこもってばかりいたのではない。信徒時代から路傍伝道、辻説法というのをやらされていた。わたしは聖書学校に行く前に、数え切れないほど説教をしていた。聖書学校に行って、説教学という課目があるのに驚いたものである。聖書学校に行くような者は、みんな、充分に説教の実践を積んだ人ばかりだと思っていたのだから無理はない。それで、最初の説教学の実践で、同級生の批評は「若さがない」だった。当り前である。わたしは彼らのようにあがってしまって、しどろもどろになる初々しさなど特合わせていなかったのだから。内容はともかく、堂々と自信をもって喋ったのだ。

２年生の後半から、わたしは、毎週一回、巣鴨のとげぬき地蔵に出かけて行き、辻説法を再開した。別に、それほど伝道に熱心だったわけではない。ただ、「こんな聖書学校にいたら、魂のことを忘れてしまいそう」で、始めただけである。女子学生にたすきを作ってもらい、習字の上手な上級生に墨黒々と書いてもらった。「偶像を拝むな」、「真の神を礼拝せよ」

トランペットとトラクトを持って、普段は地蔵の前の通りで説法した。警邏のお巡りさんが来ると、境内に入った。一度は、お坊さんが出て来て、説法中のわたしに、丁重に、境内からは出てくれるようにとおっしゃった。さすがに自信である。坊さん、わたしごとき若僧に、少しも腹を立てていなかった。穏やかなものだった。そういうわけで、とげぬき地蔵は今日も益々繁盛している。

一度は、胸に本を抱いたＯＬとおぼしき女性が、・・・・・当時はＯＬではなくＢＧと言った。ところが、これは英語の本場ではとても悪い意味を持つ、ビジネスガール （これも今はギヤルと言う）なる言葉から来ているから、正しくオフィス・レディ即ちＯＬと呼ぶべきであるという、ある女性週刊誌のキャンペーンが功を奏して、たちまちそうなった。これは、づーっと若い後輩の雑学のため。そして、もっと面白い言葉の変化がその数年後に起こった。これは日本人の善悪の観念、生活哲学、つまりその文化を知る上で、見逃してはならないでき事であった。

わたしのように「宣教」に携わる者には、ことさら興味深い。記憶に間違いがなければ、ある一人の留学生が、自分の国とは一切関わりのない、いささかいかがわしい行為をなりわいとする場所の名に、こともあろうに、愛する母国の名が使われているということに対する怒りと悲しみを、外国人による日本語弁論大会という場を使って訴えたということに始まる。これが新聞で取り上げられると、たちまちの内に全国の良識ある国民の共感するところとなり、あの、夜景をひときわきらびやかに飾っていた、その昔パウロが命を掛けて伝道し、多くの教会を建てた国、黙示録７つの教会があった国の名は、全く消え失せてしまった。しかし、全国の良識ある国民は、そのなりわいを廃止させようなどとは、露ぞ考えなかった。 国の名が 「石鹸の

島」に変わっただけである。・・・・・あぁ、またあらぬところに話が転んでしまった。元に戻ろう。

一度は、胸に本を抱いたＯＬとおぼしき女性が、わたしに結び文を手渡していった。胸ときめいて、結びを解くのももどかしく、物陰で開いた手紙にはたったの２行。

柔肌の熱き血潮に触れも見で
さみしからずや道をとく君

見事である。こんな揶揄なら大いに楽しい。相手が、ちょっと美人だったのが憎い。期待したが、彼女は二度と姿を見せなかった。

東京の下町の、小さな開拓伝道所に遣わされてからも、辻説法は続けた。ある夕方、買い物客でごった返す商店街で、突然、ひとりの青年が「先輩、先輩じゃないですか」と言いながら近寄って来た。驚いて見ると、なるほど、北海道の高校で、美術部と演劇部と文芸部で一年後輩だった顔がそこにあった。もうちょっとというところで、クリスチャンになり損ねた奴である。「なんだお前、こんなとこでなにやってんだ」と聞くと、ずっと前に同じ高校を卒業した大先輩が、この近くで歯医者をやっているから、そこに訪ねて行く途中だという。「それで、東京でなにやってるんだ」と、重ねて聞くと、「大学生やってます」と答える。「どこの大学に入ったんだ」とたたみかけると、こんちきしょぅ。「東大です」ときた。なるほどこやつは頭が良かった。たしか、ちょっとは名の売れていた、わが母校の野球部でピッチヤーもやっていた。それなのに一発で入るとは。けった糞悪いと思ったが、「俺は先輩だぞ」と威張った顔をしておいた。「いやー。 懐かしい。やっぱり、先輩だったんですねー」と、彼はさかんにくり返した。「なにが、やっぱりだ」。「辻説法をやっているのを遠くで見て、先輩を思い出して、もしかしたらと思って近寄って見たんです」だと？ 「おまえは何回も俺の説教を聞いていながら、信じようとしないじゃないか」というと、「あんまり、ピンとこないんです」と返しやがる。「このやろう」と思ったが、三つも同じ部で可愛がった相手のこと、懐かしくて、その夜は彼について大先輩の歯医者を訪ねた。それから暫くの間、「先輩、先輩」とくり返した彼のおかげで、３０００円足らずの月給でずっと後回しになっていた歯の治療はただになった、というような話も本論に全く関わりがない。

とにかく、わたしは辻説法も随分やったのである。が・・・・・今はばかばかしく思っている。下らんことをしたと思っている。何をやったら良いのかわからないからやったことだ。 まあ、やらないよりは良いと言えるのが慰めだ。ちなみに、わたしの辻説法を通して救われた人は、今のところひとりも知らない。もちろん、辻説法が上手で、効果的に人を救いに導く自信のある人は、大いにやったら良い。ばかばかしいと言うのは、わたしがするのがばかばかしいのであって、他の人のことは知らない。

わたしの月給は、月３０００円もあれば上々。 街の電信柱にくくりつけられている看板の、「女給さん求む」の広告は、日給５０００円をうたっていた。３帖と６帖がＬ字型につながっ

たアパートの部屋では、１２、３人も入れば満員である。子供会で、９６人も入った時など、ギネス・ブックに報告したいと思ったほどだ。当然、何とかしなければと考える。考えたって名案は浮かばない。浮かばないように訓練されて来たのだ。だから、会堂が欲しいと思った。美しい会堂があれば、伝道はずっとし易くなると信じていた。わたしの伝道がはかばかしくないのは、ひとえに、安アパートのせいであると確信していた。信仰さえ持てば何とかなると、会堂建設を夢見た。

１坪４０～５０万円。これが当時のこの辺の土地の値段であった。しかも、過密地域で、たまぁに売りに出ている土地は、入り組んだ路地の奥に引っ込み隠れ、一旦迷い込んだが最後、再び日の目を見ることができないような所に、２０坪とか３０坪とか、しょんぼりたたずんでいる。オー・ヘンリーの書いた「最後の一葉」よろしく、情け容赦なく打ちつける、冷たい雨風をやっとのことで耐えていた信仰も、たちまち萎えて、吹き飛ばされそうになった。人はたくさんいる。しかし、聖書学校で訓練を受けたわたしは、人がたくさんい過ぎたために、伝道ができなかったのだ。こうして、ほとんど毎週ふたつずつ、２年聞に渡って作り出された「名説教」の数々は、せいぜい、垢のたまった数個の耳の鼓膜を震わせただけで、その使命を終えてしまった。

教会堂の必要性、重要性、あるいはそれを持つ事の困難さというものは、それぞれの環境と状況によって様々である。従って、ケース・バイ・ケースで厳密に判断しなければいけない。何が何でもとにかく会堂をというのは、現代の平均的伝道者の共通の病である。そこでわたしは、次の様な評価表を作って考えて見ることをお勧めする。

会堂を持つことの利点	会堂を持つことの欠点
一	
経済的側面	
A	
B	
C	
社会的側面	
効率的側面	
心理的側面	

信仰的側面

伝道戦略的側面

その他
"

さらに、幾つかの側面が考えられるが、ここでは省略している。それぞれの側面の、利点と欠点に思いつくものをみんな書き入れる。どの側面に属するかわからないものは、それなりに「その他」に書き込む。それらを重要性に順じ、１０段階で点数に書き入れる。最後に点数を総合する。

わたしは、今まで数多くこれをくり返している。それぞれ異なった土地を想定して、そうしてきた。殆どの場合、欠点の総合点が利点のそれを上回る結論に達している。教会堂は絶対必要と考えている人たちにも何回か試してもらったが、差こそちぢまっても同じ結論に達している。ただし、今、宣教師として働いているわたしは、協力している伝道者や教会に自分の意見を押し付けはしない。彼らが充分納得した場合のみ、会堂なしの伝道牧会が行われている。大体、私の協力伝道者たちも、会堂なしでは何にもできない訓練を受けて来ているため、会堂があったほうが、そのあらゆる欠点にもかかわらず、よくやれる場合が多い。またまれに、会堂なして実によくやっている者があっても、親切な金持ちの宣教師が 「会堂もない状態を哀れんで」献金してくれたり、わざわざ土地までみつけてくれたり、さらには、信徒たちに「信仰を持って会堂建築に乗り出そう」と素晴らしく力強い説教をしてくださる。

しかしそれでも、わたしが今責任を持っている５０ほどの開拓の働きの中では、会堂を持っていないか、あるいはそれにおぼしき建物を持っていても、それに捕らわれない伝道をしているのが、あらゆる面から見て、より良い働きをしている。そこで、ちょっとだけ紹介させていただこう。この「なになにさせていただきます」という言い方が最近「物凄く」耳につく。わたしには慇懃無礼に聞こえて、好きになれない。これも元をただすと、極めて仏教的な思想を背景にした表現らしい。「ご慈悲によって生かしていただいている」という、深い人生観から来た。これなら、クリスチャン用語になり得る。わたしたちは「恵みによって」まさに、まさしく、「生かしていただいている」のである。用いて「いただいている」のであり、「仕えさせて

いただいている」のである。ただこれを人間にたいして多用すると、やはり慇懃無礼だ。

バラトック教会は、わたし自らがフィリピン人の家々を訪問して始めた、開拓７年の教会である。バラトックと言う場所は全体が従業員３千人ほどの金鉱山会社で、険しい山間の土地は全部会社の所有であり、会堂を建てる場所はない。人口は３万人近いということだが子沢山がなせる業で、実際は小さな社会だ。この教会は普通の 「一教会一会堂一礼拝会」という形式を守っていたら、精々７０～１００人止まりだったに違いない。実際、わたしたちより２年前に伝道を開始し、資金的にも人材的にも優れている南バプテストの教会は、「つて」で得た会社の特別のはからいで、会堂を建てることができた。車で４０分ほど離れたバギオ市内にあるバプテスト神学校から、さらに多数の優秀な神学生の応援も得て、現在６０人近い礼拝会を行っている。わたしたちの教会の牧師は、７年前、聖書学校を出てすぐ、牧会に失敗して伝道者を止めようとしていた「おちこぼれ」である。それを励ましてこの働きに就いてもらった、なみなみとした並み牧師に過ぎない。ところがこの教会の日曜礼拝会出席は４００人を越えている。少し前におこなった２日間の特別礼拝会には５５０人以上が集まった。

秘訣は何にもない。ただこの教会は、日曜日だけで７ヶ所で礼拝会を開いている。週日を入れると９ヶ所。会社の周囲の小さな小さな集落がほとんどであるが、あるものは４０ｋｍも離れている。さらに、この教会は毎日、朝といわず、昼といわず、夜といわず、いたるところで、聖書を読む小さな集まりを持っている。居間、庭前、物置、ガレージ、マンゴーの木の下、公民館、青空天井、星空天井と文字通りいたる所である。２人３人の集まりが多いが、それだけに部族意識が強く、いろいろな言葉を話す９つの異なった部族の、様々な階層の人たちが福音を聞いている。一週間にすると、礼拝出席人数を相当上回る者が、これに参加しているのである。ありとあらゆる弱さを持った、この若い牧師と教会が、取り巻くハンディキャップを乗り越えて、ここまで良くやっているのは、いつでもどこでも伝道しているからである。

もう少し説明をしよう。会堂が無かったのは、バラトック教会に取ってとても良いことであった。もちろん、不便をかこった事は限りなく、弱点は、前の広場で遊んでいる挨だらけの子供たちの、破れたポケットからジャラジャラ出て来る、コーラ瓶の王冠くらいたくさんある。しかしそれでも冷静に判断すれば、会堂が無かったから成長したのである。

もしも、一般のフィリピンの教会のように、信徒が７０人～１００人くらいになったとき会堂建築に取りかかっていたらどうなっていたか。いま、１００人収容の会堂を建てるには、たとえそれが現代の日本の標準からすると、物置というのも恥ずかしい代物であったとしても、バラトックの信徒の平均収入の、２５年分にはなるだろう。土地のことを考えると４０～５０年分だ。日本の状態に置き替えると、１億～２億円である。もうちょっとになるかな。そして、車は２５年ほども走り続けているのが、２００戸に一台あるかなし、テレビは３０戸に一台、冷蔵庫は９０戸に一台あれば良いくらいの、その日暮らしの信徒たちに貯金も財産もない。 銀行から借りることなどあり得ない。

だから、会堂建築に「信仰によって捧げる」という名目の「搾取」が伴う。信徒は子供の服、

赤ん坊のミルクを節約して捧げる。わたしは決して大げさなことを言ってはいない。「神よ彼らを恵みたまえ」と祈りたくなる。しかしこのような状態では、会堂が建ち上がるまでに長ぁーい年月がかかる。だからフィリピンには、鉄筋が飛び出している、ブロックが半分しか積まれていない、窓がない、ドアもない、屋根が葺き終わってない、建築途中で放り出されたような会堂がほうぼうにある。その長い間、信徒たちは何から何まで犠牲にし尽くして、捧げる。その結果霊的成長はおろそかになり、討死にする信徒が増えてくる。やっと会堂が完成した時には、教会全体が息も絶えだえ。救急車で運んでもらって、すぐに葡萄糖か輸血が必要だ。ところが、実際はお祭りをやってしまう。

だから、会堂は建っても教会は成長しない。牧師は長い長い戦いの後の休息をとって、すっかり落ち着いてしまう。信徒もやっと責任を果たして、ほっと一息。いまさら、伝道だなんて言われたって、もうエネルギーは底を突いている。「ねえ、もう無理はしないで、楽に行きましょうよ」とみんなが一致する。

もうひとつの方法は、金持ちの宣教師にお願いすることだ。ここフィリピンには、仕事のない宣教師が道端のコーラの空き缶くらいに転がっている。貧しいこの国に缶入りコーラは滅多に無いし、空き缶は高く売れるから絶対に転っていないので、これは日本の道端の話である。仕事は嫌いだが、本国には華々しい活躍の物語を送らねばならない。５千ドルか１万ドルくらいの金なら何とかなる。ただしこの教会は、その「宣教師の働きの実」となることを承知しなければならない。そうすると、宣教師はさらにサポートを続けてもらえる。教会は会堂を得、宣教師は名誉とサポートを得る。めでたし。めでたし。

あるいは、こんな方法はどうか。牧師は信徒たちから献金を募ってアメリカに渡り、「即席効果」を見たいアメリカ人の「大きな心」をくすぐって、献金をアピールする。これは、かなりうまいやり方だ。貧しい人々の、惨めな姿を写真に撮って行けば、より早く献金が集まるし、何だったら、わざわざヤシの葉っぱで小屋を作って、そこで集会をしているところなんぞ、写真で持って行くと、効果てきめんだね。小屋の前で、裸の子どもが遊んでいたら、さらに効果的だ。それでも、牧師が集めた金をちゃんと持って帰って来れば良い。この国では献金集めにアメリカに行ったきり帰って来ない牧師という動物は、わざわざ動物園まで行かなくてもたくさんいる。

半世紀もアメリカの植民地だったこの国の人々は、アメリカに対する強烈な憧れと、それと同じくらい強烈な恨みを、共に抱きかかえている。アメリカ人はアメリカ人で、フィリピンに対してはかつての占領国として、ある種の罪悪感と優越感を持っている。さらに、英語がすぐに通ずる上に、ちぎれそうにしっぽを振り、哀れみを乞いながら、おずおずとにじり寄って来ては、一生懸命に親愛と服従の情を示す犬のように、いじらしく仕えるフィリピン人には（金さえ出せばの話であるが）、本国では決してあじわえない、貴族か大金持ちの密かな優越感と満足感を満喫できる。わずかな場合を除いては、宣教師といえども例外ではない。

この可愛いフィリピン人が貧しくて困っていると言えば、一も二もなく金を出す。少なくて

も大概はそうやって来た。しかし、フィリピン人はアメリカに対する恨みを、密かにつのらせている。その原因が、大日本帝国陸軍の残忍な仕業のような事実に基づくより、むしろ、つまらぬ誤解であったり、間違った情報によったりすることも随分あるが、とにかく、恨みは深い。だから、フィリピン人はたとえどんなに良い事をしてもらったとしても、アメリカ人が期待するほど彼らに感謝はしないし、義理も感じない。「富める者が貧しい者を助けるのは当然のことであって、助けないのが悪である」という、東南アジアに一般的な考え方も影響していると推測される。

ともあれ、フィリピン人が期待したほど感謝もしていなければ、忠実に仕えようとしてもいないということを発見した時、アメリカ人は一種のパニックに陥る。宣教師ならば、いわゆるナーバス・ブレイク・ダウン、一昔前の言い方をすると神経衰弱という奴を経験することさえある。

わたしたちはこんなことに辟易していた。だから、「身のほどわきまえて」会堂を建てなかった。その結果どういう事が起こったか。牧師も教会も、教会の本質にあまり関わりの無い会堂なる物に心を奪われることなく、教会として最も大切な事に力を集中することができたのである。神様を礼拝し、聖書を学び、互いに愛し合い、伝道にまい進した。牧師は会堂建築に関する一切の煩いから解放されていたし、信徒は余計な経済負担がないため、心おきなく、良心的に福音を語ることができた。多くの者は、自分が拙い言葉で語った福音によって人々が救われ、変えられ、癒されて行くのを見て、興奮をくり返した。それはすぐに教会中に伝染した。必然的に信徒の数はふえた。献金もふえた。

その献金の多くは、伝道活動と信徒伝道者の育成に用いられた。伝道はますます盛んになり、信徒伝道者も何人かのフル・タイムを含めて１０人を越えた。教会は、充分とは行かないまでも彼らをサポートし続けている。また、たとえば夫が１４人の子供を作った後、早々と結核で倒れ、・・・・ 結核で倒れた後も、子供だけは作り続けていたが・・・・軒下の干鱈みたいに痩せ細った奥さんが、１日１５ペソ（１００円強）で日雇いに出ていたという家族が救われると、早速、毎月お米を６０キロ（奥さんの２５日分の賃金に相当）贈り続け、身体障害者の世話を怠らず、貧しい信徒が病気になると薬を買い与え、ならず者に殺された男の、奥さんと子どもたちの面倒を見る。こんなことがずっと守られている。・・・・・・本当は、時々忘れられるが・・・・・・　この教会には会堂もピアノも講壇さえもない。しかし、キリストの弟子であることの証明がある。互いに愛し合う愛がある。

「だれでも」の伝道

さて、日曜日と教会堂に捕らわれない、「いつでもどこでも」の伝道をしておれば、それで良いのか。そうは問屋が卸さない。切り取られた４本の足のうち２本が回復したからといって、健康な蛸ができるわけではない。まだ、他の足も生えてくるようにしなければならない。では、

もう１本の足について話そう。それは、誰でも伝道するということである。ことさら新しい料理ではない。だから、すでに多くの方たちがご賞味済みのことと思うが、わたしの味付けはいささか違う。人によっては「辛口」といい、「苦口」ともおっしゃるが、まあ、毒にはならないと思う。「食べさせて差し上げさせていただきます」。とは言え、「もったいぶるな。どうせ、欲求不満の塵、芥。腹立ちまくれのやつ当りではないか」と言われれば、返す言葉もない。

「牧師だけが一所懸命に伝道する時代は終わった」「信徒の動員が最大課題である」「信徒を使え」「信徒パワーだ」これらは皆よく言われている言葉である。それは、しばらく前キング・ジェームス訳聖書などでははっきりしていなかった、「聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ」（エペソ４：１２）というところが、正しく理解され始めたことから、単に効率上の問題として以上に、聖書的あり方として取り扱われるようになった。しかし、ほんとうに信徒たちは、充分に活動しているだろうか。牧師たちは本当に、この事に関して聖書の教えを理解しているだろうか。まだまだ信徒は無視されている。まだまだ信徒は忘れさられている。まだまだ甘やかされている。牧師は知らない。理解していない。聖書が何と教えているか。

だから、平均的教会は牧師の独断場であり、精々良くて、熱心な信徒が「牧師の片腕」として働いているだけで、とてもとても、キリストの体の一部とはなっていない。教会の奉仕でも、まあ、良いところ、司会が最高の奉仕であり、説教など、よほどの事が無い限り、つまり牧師が病気になったとか、旅行に出かけたとき以外は絶対にと言って良いほどさせてもらえない。しかも、夫のへたくそな説教にイライラしていた牧師夫人が、幸いにも病気にでもなってなければ、信徒の出番はない。大の男が真剣になって取り込む気にはなれるような仕事は、今の教会にはありえない。ちっぽけな仕事ばかりである。「主の働きにちっぽけな働きはない」などと言葉尻を捕らえて屁理屈を言わないでほしい。 わたしはとても真面目に話しているのだから。

わたしは神様のために何かをしたくて、うづうづしていた。だから、朝から晩まで教会に入り浸って、仕事と見れば大小かまわず、易しいも難しいも見境なし、片っ端からどんどん勝手に片付けて行った。そのうちに、牧師にしこたま叱られた。せっかく真面目に、一所懸命自発的に、しかもかなり手際よく上手にやっていたつもりなのに、文句を言われるとは大いに心外であった。高校時代の思い出である。ただ、今になって、この牧師の気持ちもわからないではない。彼は「せっかく、いろんな信徒に奉仕してもらおうと思って、仕事を作っておいたのに、あんたが、みんなやってしまうから、奉仕の場がなくなって成長しないじゃないか」と言って叱ったのだ。信徒は奉仕することによって成長する。集会に出席するだけ、聖書の勉強をするだけの者は成長しない。貧しくて、高校にも行けなかった２３才の田舎牧師は、この事を経験によって知っていた。神学的には大いに疑問であったが・・・・・・・。

教会にはたいした奉仕はないのである。 現代の教会のシステムは、ちょっと能力のある牧師なら、大体かたづけられるようにできていて、奉仕なんぞと言ってもとるに足りない、それでいて細々とした面倒な雑用ばかりである。だから信徒は、奉仕に情熱が湧かない。身が入らない。「大の男がやる仕事かよってんだ」と言う声が聞こえませんか? だからたいていの牧師は雑用に追い立てられ、こぢんまりと一生を終える。牧師が信徒のために仕事を準備するのはよ

い。しかし、そうしなければ、張り合いのある仕事がないという現代教会が問題である。

わたしは、信徒が説教し、開拓伝道を始め、牧会するべきだと考えている。現在の牧師の仕事のほとんどは、信徒たちが立派にできるものである。それを、心の底の底から信じている。聖書学校や神学校を出た教職者１人につき、１０人位の信徒の伝道者や牧師がいるようになれば良いと願っている。

さて、ここでまた、多くの同労者の方々は、「とんでもない」とおっしゃるに違いない。「伝道者は誰にでもなれるというものではない。特別な召しを受けた者だけがなれる尊い職である」と叱られ、「牧師の働きは一般の信徒にできるような、そんな、なま易しいものではないよ」と笑われそうである。

まず、伝道者の召しとか、牧師の召しとか、宣教師の召しとかいうものについて話したい。はたして、本当にその様な特別な 「召し」が存在するのか。大切なのは、誰が幻を見たとか、み声を聞いたとかいう主観的体験の話ではなく、聖書はどう語っているかである。それから、伝道者や牧師の働きが、あるいは宣教師の働きが、そんなに特殊で難しいものなのか、調べてみよう。

残念ながら、わたしは日本語聖書の語句索引を持っていない。そして、日本語聖書全巻を読み直して、「召し」と言う言葉が何回用いられているか、調べてみるほどまじめでもないので、英語のコンコルダンスという奴を、三つほど開いてみた。それで、日本語の「召」という訳にふさわしいもの、あるいは関連性のありそうな概念の言葉を捜し出した。なにしろ、怠け者の上にそそっかし屋ときているわたしが、まともに覚えもしなかった罪滅ぼしに快く忘れかけたギリシヤ語なんぞと、にらめっこして数えたのだから、正確なことを期待していただいては困る。

その結果、新約聖書には・・・・旧約には失礼して・・・・あちらは、「召し」に関する限り、言葉よりでき事のほうが重要みたいですし・・・・。その結果、新約聖書には 「召し」と普通呼はれている概念に関わる言葉が、６０数回出て来ることがわかった。その内５５回以上は・・・・多分・・・・なにしろ素人学者ですから・・・・「救い」という意味で使われている。つまり９割がたは、「贖い」「新しく生まれる」「神の国に入る」「永遠の命を得る」などと同じく、救いという大きな真理を表す一つの言葉として、用いられているわけだ。しばしば、伝道者が落胆した時の慰めの言葉として引用される、「神の召しと賜物は変わることがない」という句の意味も、決して伝道者の召しとか、牧師の召しなどと言うものについて、語っているものではない。「救い」の素晴らしさについて語っているのである。

現在の一般的理解に最も近い、つまり、伝道者とか牧師という「職制」への召しは、殆ど出てこない。あえて捜すと、旧約時代の大祭司に関する言及が一度ある。（ヘブル５：４）ただしこの旧約時代の職制は、今はキリストの故に廃止されている。少なくても万人祭司説をもって、カトリックと馴染むことができないわたしたちプロテスタントのクリスチャンは、そ

のように信じている。だから現代のわたしたちに、これを適用することはできない。もう一つの例は、パウロが「使徒として召された」と言っているように理解できるところである。(ロマ１:1、Ⅰコリ１:1)ただしこの場合、もともとのギリシヤ語で読むと、はたしてパウロは「使徒職に召された」と言おうとしたのかどうか疑わしい。まず、「使徒」になるように召されたのか、「召された」と言う事実があって後、つまり救われてから使徒にされたのか。次に、パウロは使徒を職とは考えておらず、「使徒的機能」を果たす者と考えていたように思える。それは、彼の使徒という言葉を修飾するために用いている言葉によって、明らかとなる。彼は、同じローマ書の１章３節で、「使徒の務めをうけました」と語り、Ⅰテモテ１：１１節では、「使徒として任命されたと言っている。それらは、召されて救いを受けたという意味のことを語った、すぐ後に言われている。

さらに、ローマ書でもⅠコリント書でも、「使徒として召された」と訳されているすぐあとに、ローマの信徒も、コリントの信徒も、同じ召しを受けていることが書かれている。だから、正しい聖書理解の原則から言って、つまり、文脈から理解するという常識に立って、パウロはここで、「使徒としての召し」などという概念を持ち出していないと判断すべきだ。これは「使徒として召される」召しがあるという、誤った先入観に立った誤った訳だ。

働きに対する召しは、一回きりではあるが、アンテオケにいたバルナバとサウロに与えられたことが、明白に記されている。(使徒１３：２）口語訳はどういうわけか「召し」と訳していないが、これが全聖書中最も明白な「召し」である。場所に関する召しは、パウロがマケドニヤの叫びを聞いた時、それを「召しと確信して」という表現で、一度だけ出て来る。 ただ、これは永久的な召しではなく、一時的な導きに相当するものである上、あくまでもバウロの主観的確信である。

社会学者マックス・ウェーバーによれば、カルビンの神学は資本主義の発展に大きく貢献したそうだが、なるほどと思える翻訳が、キング・ジエームス訳聖書にある。それに従うと、「あなたがたの召された職業にふさわしく歩みなさい」と読める。(エペソ４：1）この場合の「職業」という語の原語は「召し」であり、「召された召しにふさわしく」とするのが素直な訳である。伝統的カルビン主義にならうと、すべての職業は神様の召しによるのであるから、「両親から受け継いだ職業を大切にして、一所懸命働きなさい」となり、職業への不満は神様への不満とされ、仕事を変えようとするのは、神様の召しに逆らうものとして、さげすまれることもあったらしい。

まあ、現代の教会もそこまでは行かないとしても、いわゆる「教職」を「聖職」として奉り、特別な召しを強調し、信徒との基本的な相違を主張している。

パウロが召されていたことを認めよう。しかしだからと言って、今、牧師になりたい、あるいは宣教師になりたいと願うすべての者が、パウロと同じ召しを受けなければならない理由はどこにあるか。バウロの経験は、あくまでもパウロの経験であって、テモテの経験でもル力の経験でもない。ましてや、マルコの経験ではあり得ない。もしも、召しがそれほど、決定的な

重要性を持つものだったなら、パウロとバルナバは、あんなにみっともなく言い争うことがなかったに違いない。もしも、マルコが召されていたらバルナバの勝ち。召されてなかったら、バウロの勝ち。簡単なものだ。

少なくても新約聖書の記録が示す限り、パウロとバルナバ以外は、どのような召しも受けた形跡がない。ガリラヤの湖畔でイエス様に呼ばれた弟子たちは、その後長い見習期間を経てから、使徒として選ばれたのであって、始めから使徒として「召された」のではない。彼らが使徒として召されたとはどこにも書かれていない。旧約のほうでは、アブラハム、モーセ、などの物語、イザヤとエレミヤの召しなどが、しばしば取り上げられる。そして、確かにこれは「召し」という概念を正当化するに充分である。ただ問題は、これが現在伝道者を志すすべての者に、適応されるべき事かどうかである。

わたしは、アブラハム、モーセ、イザヤ、エレミヤ、そしてパウロ、バルナバなどと比べるに足りない人間であるが、今の日本人としては数少ない宣教師を、かなり長い間やっている。しかし、「召し」は受けていない。「だから、まともな働きが出来ていない」と言われれば、返す言葉もない。とは言え、わたしの働きがしょんぼりしているのは、わたしが「召されていない」からではなく、器が小さい上に怠け者だからである。

わたしが宣教師になりたいという野望を・・・・「少年よ、野望を抱け」。これが正しい訳である。 従って野望を抱いたわたしも、クラークの「みみっちい」弟子である・・・・・・とにかく、その野望を、当時海外伝道部長をしておいでだった先生にお話した。すると筋金入りのベテラン伝道者であられた先生はおっしゃった。「君は、『宣教師になりなさい』という神様のみ声を聞いたか」。わたしはどぎまぎして答えた。 「いいえ、でも、なりたいんです」 「宣教師にまでなろうとする者は、明確な神様のみ声を聞かなくちゃいかん。『神様。み声を聞かせて下さい』と祈りたまえ」。 先生はだめ押しのようにお諭しになり、腕を組んで、じっと天井をみつめておいでになる。まるでとりつく島もない。 わたしは恥ずかしさとやけくそで、もう一度お尋ねした。「先生は今〇〇で働いていらっしゃいますが、〇〇で働きなさいという、明確なみ声をお聞きになったのでしょうか」「・・・・・・・・！！」 「・・・・・・・・！？・・・失礼いたしました」 思わぬ逆襲に遭って驚かれたのか、お怒りになったのか、顔を真っ赤にされた先生を残して、わたしはほうほうの体で部屋を出た。

神学校で心理学をとっていた時、「宣教師の召しの心理学」というレポート作りをやった。出身国も団体も違う５０人以上の宣教師たちに、個別にこと細かなインタビューを試みてまとめたものだが、２人を除いて他はみんな「宣教師になる為には特別な召しが必要である」 と答えている。彼ら自身の召しの体験は「幻を見た」が１人、「夢を見た」が１人、「み声を聞いた」が１人で、あとは全員「聖霊による内なる確信」と「超霊的」な応答だった。だが、それをさらに細かく問い詰めると、それぞれ「家族の影響」とか「宣教師の話を聞いて」などと、ぐっと日常の言葉に近くなった。

この頃わたしは、ある「熟熟年宣教師夫婦」と一緒に、もう一つの神学校の短期講座を取っ

ていて、いつも彼らの車に便乗して苦学生のやりくりをしていた。もちろん、この２人にも別々にインタビユー済みである。或る日、交通渋滞の中で、話はわたしのレポートのことになった。ご主人は「召し」を受けていないと答えた珍種の２人のうちの１人である。ところが奥さんは、はっきり「み声」聞いた方である。しかも、「もし、明確な召しを持たず宣教師になった人がいた場合、その人に対してあなたがとる行動」という項目で、彼女は、「み旨を誤っているから本国へ帰るべきだと忠告する」という、けたたましい答えをしている。

この２人が、互いに相手の宣教師の召しに関する考え方を知った時の論争は、聞いているわたしにはとても楽しく、大型トラックが道の真ん中でエンコしていて、講座に遅れるのもちっとも苦にならなかった。でも、当人たちに取っては大問題！！　奥さん日く「まアッ！！　貴方が召しを受けていなかったなんて、３０年以上もわたしを、騙し続けていたのね！」「わたしは召しが無かったら、宣教師になんかならなかったわ。なったところで、こんなひどい生活、数年で止めてるわよ。今まで続いて来たのは、ただただ召されているからなのよ」

やっと、群がる蟻のようなおんぼろ自動車から吐き出される、まっ黒な排気ガスの海から這い出し、教室が見える頃になってご主人が優しく言った。「ハニー」・・・・これは訳しようがない・・・・・「あんたは若い頃からとっても能力があり、宣教師になるには打ってつけだった。」　・・・・・ふむふむ・・・・・「ところがあんたは美しくて、みんなのあこがれで・・・・。」・・・・・嘘いえ・・・・それほどじゃないぞ・・・・・　「ネックレスだの、腕輪だの、付け睫毛だのに忙しく・・・、」　・・・・その通りその通 り・・・・　「とっても宣教師になどなる気がなかった。神様はあんたが宣教師になるように、せっかく必要な賜物を与えてくださったのに、あんたには献身がなかった。」　・・・・・・わかる、わかる・・・・「だから神様は、あんたが道を誤らないよう哀れみをもって、み声をかけて下さったんだよ。感謝しなければいけないよ。」・・・・・奥さん、しょぼん・・・・・。

「僕の場合はね。こんなつまらない人間でも、神様に目一杯用いていただきたかった。ただそれだけが望みでね。宣教師にさせて下さいと祈ったのさ。だから神様は、み声を聞かせる必要も幻を見せる必要もなかったんだよ。僕は、神様があんたにみ声をかけてくださったことを、心から感謝しているよ。だって、そうでなければ、あんたはとても僕なんかと結婚してくれなかっただろうからね」。　・・・・ちくしょう！　うまいなぁ。アメリカ人の男は・・・・しかし、まてよ・・・・・。もしも、夫であるということが、いつもこのように、奥さんを甘く上手に扱わなければならないということなら・・・・。あぁあ。日本人で良かった。

現在の牧師、伝道者、宣教師たちの間には、物事をじっくり分析して考えるタイプの人間より、どちらかというと直感型、情緒型、あるいは感情型と言ったほうが良い人間が多いように思える。伝道者としての召しが強調されるが、その肝心の召しなるものの概念がはっきりしていない。だが、これがないと伝道者にはなれない。真面目で能力があり、分析型の人は、ああでもない、こうでもないと考える。そうして、いつまでも召しの確信が持てず、献身できない。ところが直感型、感情型の人間は、思い込んだらそれで良い。思い込むきっかけは、夢でも良いし、祈っている最中の落雷でも良いし、なんなら、犬の遠吠えでもかまわない。他の人のサ

ジェスションを召しと信じるのはまだ良いほうである。 彼らは、自分が伝道者として立つにふさわしい賜物を持っているかどうかなど、あまり考えてもみない。考えたところで独りよがりである。

もしもわたしたちが、改革派の方々が昔からしていたように、「内的召し」と「外的召し」という観点から、伝道者候補生を審査していたなら、大きな悲劇をあるていど回避できたのではないかと想像する。

「内的召し」とは個人的主観に基づく確信であり、「外的召し」とは、それを承認する教会の客観的観察である。本人の強い信仰と献身が、教会の観察という審査を通して、本物の「召し」が確立する。これは聖書的な「召しの神学」とは言いがたいが、ひとつの実際的知恵であり、むしろ教会論的にみて、教会の働きを個人の主観的確信という分野から、教会という共同体全体が関わるところへ移動させた点で正しい。

大きな悲劇とは、伝道者になるべきではない人物が伝道者になってしまったため、本人の人生を台無しにし、さらには教会を死に至らしめていることである。彼らは多分真摯な献身をしたに違いない。 しかし、彼らには伝道者になるために必要な賜物がなかった。賜物をお与えになるのは神様である。神様は、ご自分がお与えにならなかった賜物を用いるようには、要求なさらない。伝道者に必要な賜物をお与えになっていない人物が、伝道者になることを望んでおられない。ところが実際にはこれが意外に多い。

彼らが忠実な教会員として残っていたら、教会はどんなに祝福されていたことだろう。彼らの人生はどんなに実り多かったことだろう。だが、残念ながら、彼らの多くは「内的召し」にのみ頼ってしまった。あるいは、一時の感情の高ぶりを召しと勘違いした者もいるに違いない。さらには・・・・・これが、牧師、伝道者になることが、意外とぼろい儲けになることもある国では、かなり一般的なのだが・・・・・わたしよりももっと怠け者で、第三志望校にも落ち、第四志望会社にも外れた輩が 「お召し」を受けて、聖書学校なんぞにやって来る。 悲劇である。

もう一つ、勝るとも劣らぬ悲劇がある。それは、しばしば強調されて、大仰に説教される「神秘的召し」のために、そのような召しを持てない真面目な人物が、伝道者になるべく賜物を戴いているにもかかわらず、伝道者にならず、神様の栄光と教会の祝福のために与えられた大切な能力を、この世の事柄に使ってしまっている事実である。一流の会社に就職して、特急昇進しているだとか、医者になって大病院を建てたとか、弁護士として名を売っているだとか、学校の先生になって子供の教育に献身しているだとかいうクリスチャンたちの多くは、かつて、伝道者になりたいと願い、「神秘的召し」を求めて得られなかった人たちである。あるいは、ちょっとだけ勇気と決断力と信仰が足りなかった、つまり、献身できなかったために、自分のたりなさを「召し」がなかったということで、正当化している人たちである。これは、伝道者になるということが、あらゆる点から不利な状況にある土地においては、きわめて一般的である。なんという大きな損失であろう。悲劇である。

知らず知らずの内に自分を正当化するのは、人間の共通の弱点である。伝道者も人後に落ちない。まともな説教も作らず、集会の準備などしたことがなく、日曜日以外は暫しまどろみまた眠る以外することがない、さしものわたしも立ち打ち出来ない超ものぐさ伝道者も、「召された」者として、信徒の口出し、批判、批評を絶対に許さない。「神が油注がれた者に対して何事ぞ」である。

そんなわけで、わたしたちが普通「召し」と呼んでいる概念、あるいはでき事を、神秘的ベールに包むことを止めて、むしろもっと日常の言葉で表現してはどうだろう。聖書は「立てる」「任命する」などという言葉を用いているが、そのほうがわかりやすい。あるいは「献身」も「召し」よりは良い。大切なのは、特別な神秘的体験をしたかどうかではなく、神様の愛と期待に積極的に応答したかどうかである。

教会とは召された者の共同体であり、すべての真実なクリスチャンはすべて召されている。この召しは単に神様の愛への召し、神の国への召しではなく、キリストの体と呼ばれる共同体への召しであり、その共同体に託された使命への召しである。そしてこの使命は伝道である。すべてのクリスチャンは伝道の使命のため召されている。もちろん、与えられた賜物よって、各々の果たす役割は異なる。しかし、その召しに積極的に応答し、賜物に応じて献身の道を求めるべきである。その道を選ぶに当って、祈り、聖書に照らした自己分析、まったき自己放棄・・・・・身の毛がよだつほど恐ろしい言葉であるが・・・・・などが必要であろう。しかし選ぶのは、多くの場合神様の仕事ではない。それは、人間の役割で、人間が自分に課せられた責任によって選ぶのである。それを神様が認定し、立ててくださるのである。

これは結婚と同じことである。神様は、わたしたちがやれ血統だの証明書だのと言って、犬猫の相手を見つけて来るように、わたしたちの相手を見つけ出してきてくっ付けたりはなさらない。人間は自分の責任で相手を捜し、結婚する。それを神様が認めて、神様のもとで結婚したものとしてくださる。献身の道の場合は、もちろんすでに述べたように、自分の判断だけではなく、教会全体の意見を聞くべきである。ただし神様が、疑う余地のないまでにはっきりとあなたの結婚相手を示して下さったなら、逆らってはいけない。神様はあなたの飼い主であり、買い主であられる。神様には、あなたの想いも、願いも、訴えも踏みにじって、あなたの大嫌いなおかちめんこちゃんと、あるいは、ぐちやっぺ君と結婚させる権威と権利がある。同じように、神様はあなたを無理やりに、あなたの一番嫌いなところに、一番嫌いな宣教師として、お送りになる権利も持っておられるのだ。

☆　　☆　　☆　　☆

ところで、伝道者とか牧師の仕事は、一般の信徒にはとても出来ない難しいものだろうか。わたしも、それらの働きが決して易しくはないことを認める。ただ聖書学校さえ出れば、誰に

でもできるというものではないし、「召された」といえば彼にでもできるというものでもない。しかし、だからと言って、「召されて」「聖書学校」を卒業していなければ出来ないというほど、特殊で困難な働きでもない。問題は、教団などの諮間機関の承認を受けて正式に「教職者」と認められればその働きが出来、そうでなければできないというような考え方だ。新約聖書に見る牧会の働きは「職」による働きではなく、あくまで賜物の機能による働きである。

聖書学校を出、教職者として認証は受けたが、実際の牧会には失敗して行き所がなく、自分の村に帰ってカラバオ（水牛）の世話をしているだけなのに、優雅に牧師と呼はれている牧師が牧師なのではなく・･･･ フィリピンには・・・・少なくても、わたしの働いている地域には、この手の牧師がまともな牧師の数ほどいる・・・・・たとえ、聖書学校は出ていなくても、神秘的な体験はなくても、魂を愛し、主を慕い、溢れる情熱で賜物を用いて福音を語り、その結果でき上がった会衆を養っているならば、その人は実質的に本物の牧師である。本来は、そのような人が、つまり、実践によって賜物と献身と忠実さが証明された者が、必要ならぱ、教職者として認定されるべきなのだ。そして、わたしの経験によれば、往々にしてそのような伝道者こそ、より晴やかな働きをしている。

新約聖書で牧会の働きをしていた者はみな素人であった。だから、牧会の働きは本来、素人で充分できるものであった。教会管理学も説教学も心理学もカウンセリングも組織神学も聖書神学も牧師の助けとなるためにあるのであって、それらを教室で学はなかった者を牧師にさせないためにあるのではない。一般教育の水準が高くなったから、牧師の教育水準を上げようという議論がある。どんなに考えたって非聖書的である。必要なのは教育水準ではなく、本当の意味の霊的水準である。

イエス様の時代だって、ガリラヤ人は粗野で無教育なことで知られていた。１２人の弟子の内１１人がこのガリラヤ出身で、残りの１人だけが教育水準の高かったユダヤ出身である。そして、彼が裏切り者になった。当時、ローマ帝国にはたくさんの宗教があり、たくさんの哲学があり、たくさんの学校があった。１２弟子はそのどれにもまったく無知であった。たしかに、パウロがいた。ル力がいた。アポロもいた。しかし彼らは、何万、何十万もいたクリスチャンの中の秀でた人たちであって、平均的な働き人ではなかった。 現代でも同じである。神学校がこの世の学校と競争して、やたらと背伸びをして、なにがなんでもこの学位をあの学位をと血眼になり、牧師たちはその学位を取らんがため、東奔西走する。本当にそれにふさわしい者がふさわしい学びをするのなら良いが、猫も杓子もなのが腹立たしい。

大体、神学の学位なんてものは、自分で作った勲章を自分の胸にくっ付けるようなものである。イディ・アミンだね。このウガンダの暴君は、胸に２９の勲章をぶら下げていたが、その内の２６個は自分で自分に与えた勲章である。 創価学会が彼らのポスト・グラジュエイト・スクールを建て、彼らの宗教の博士号を出したからと言って、わたしたちに何の関わりがあるか。まともな学校をまともに卒業していない者が、往々にして落ち込む穴ぽこに、わたしもしょっちゅう転げ落ちる。そして、愚にも付かないことを考える。自分が「できない」のは、学校を出ていないからだ。

何でわたしの回りには、博士だの修士だのという伝道者が、やたらに群れているんだろう。もちろん、まともで爽やか、見事な人たちもいるが、爽やかなのは弁舌だけでちっとも仕事の出来ない御仁も少なくない。こういう人たちは多分、やむにやまれぬ魂への情熱に燃やされて伝道者になったのではないのだろう。聖書学校だの神学校だのを卒業して実際伝道に出ても、まともな働きができなかったのだろう。だから、博士までなれたわけだ。 もしもまともな働きをして、魂が救われ会衆ができれば、いよいよ忙しくなり、情熱の温度は高くなり、彼らのためには死んでも良いと思うようになる。ちょっとやそっとで、彼らを残してのこのこ教室になんぞ入って行けない。もしかしたら、自分が牧会伝道の分野でまともな働きができないのは、学問が不足しているからだと誤解して、大学だの神学校だのに入り直したのやも知れぬ。不足しているのは、多くの場合、献身と犠牲と実際的能力であって学問ではない。とにかく、その誤解に基づいて勉強し、博士号を取る。

あんなものは、並みの頭に充分な時間と金があれば誰でも取れる。しかし、伝道はそうはいかない。だから、博士になっても伝道はできない。しかたないから、聖書学校や神学校で教える。惨めだね。教える方はまだしも、教えられる方は迷惑だ。こんな状況で訓練を受けた伝道者は、始めからよほどの能力を持ち合わせていなければ、良い働きが出来るわけがない。宣教師として失敗して帰国してから、宣教学で博士号を取って、神学校で教えている人物も数人知っている・・・・・おかしな話だ。

わたしの神学校時代のクラスメイトに、無暗に元気のいいペンテコステ系の伝道者がいた。何の間違いか、彼はわたしに特別の好感を持ったらしい。わたしもペンテコステ系の団体に属していたからかも知れない。レポート作成の時など、あれやこれやと聞きにきていた。どこかに日本人は頭が良いという神話があるらしい。ところが、彼のレポートときたら情け無い事この上なし。それをペンテコステの説教調で、正に威風堂々と発表するのだから、聞いているほうが恥ずかしく、第四脊椎骨の右横あたりが、もぞ痒くてしょうがなくなったことがいく度かあった。その彼がいまや博士となって、バイブル・カレッジの学長をやっている。人に取り入るのはうまかったし、なかなか押し出しも良かったから、日本と韓国の単立系のペンテコステ教会に渡りを付け、たっぷり献金をもらってカレッジを建てた。金のなる木を見つけたら、独立してボスになるのがこの国の慣わし。「鶏頭となるも龍尾になるな」なんて諺は知らぬだろうが、まさにそれがこの国の文化だ。 彼もそれに素直に従い、誰にも口を挟ませなくした上で、今は平穏無事、悠々自適である。

博士号のほうは、D．D．というやつ、名誉博士号に違いない。日本と韓国の教会からの献金を使って、怪しげなアメリカの学校から買い取ったのだろう。数十万も出せば、立派に博士号を買い取れる。わたしより数歳年上でたいした働きもないのに、まともな名誉博士号をもらえるわけがない。もし勉強して取った博士号なら、その努力に頭を下げる。さぞかしご苦労あそばしたことでしょう。 しかし、あの頭で取れる博士号ってのは、いったい全体どんな博士号だ。

大衆は大衆の力をもって大衆に当るべきだ。少数がエリートの力で大衆に当るのは間違っている。わたしは、どこから見ても並みの人間である。わたし位の人間は、どこにでも転がっている。教会の中にもうようよいる。わたしは、伝道者である。並みだから、並みの働きをしている。わたしが並み以上を目指したら悲劇であり、喜劇である。わたしにできる働きなら、多くの並みの人間にできる。一人の超人より、万人の凡人である。そしてこの凡人たちは、すぐさま職業伝道者になってはいけない。まず信徒として、与えられた賜物を用いて働くべきだ。そうでないと、教会はたちまち経済的に破産してしまう。初代の教会が、何十万もの信徒たちを上手に牧会できたのは、このような信徒牧師をたくさん持っていたからである。その中で、頭角を現してきた者が、さらに上に立つ指導者になっていったのが成り行きである。

わたしは凡人である。だから、宣教師と言ったって華々しい働きはできない。故郷に錦を飾るなんて芸当は夢のまた夢。現地の言葉さえ良くわからない。イロカノ語だと思って使ってみるとカンカナイ語で、カンカナイ語のつもりで話すとイバロイ語だったり、同じ発音で全く反対の意味になるタガログ語とパンガシナン語を取り違えたりで、てんで支離滅裂である。だから、何をするにも、何処に行くにも必ず通訳が必要である。現地人の助けと協力なしには何一つ出来ない、かわいそうな宣教師である。そんな宣教師だから、現地の人たちは怖がらずに、面白がって助けてくれる。わたしのすることは、すべて始めから、現地の人たちとの話し合いと協力を前提としている。すると嬉しいことに、やがて、現地の人たちがわたしと同じ位上手に仕事ができるようになる。間もなくわたしを追い越して行く。そして、これと同じことが現地人伝道者と信徒の間でも起こる。

わたしの協力伝道者の殆どは、いちどは働きに失敗して「おちこぼれ」になった者たちで、他の宣教師たちのように、将来を嘱望されるような人物を、金に物を言わせて集めたのではない。だから、彼らはわたしと同じ位、押しも押されもせぬ凡人である。凡人であるから、自分たちだけでは、あまりたいした働きができない。すべて、信徒たちの力をあてにしなければならない。だから、何から何まで信徒と一緒にやる。そして、当然ながら信徒たちの中には、この点では伝道者より優れている、あの面では牧師より良い仕事ができるという者が現れて来る。中には凡そすべての領域で、指導者である伝道者より可能性を秘めているという者も出て来る。

伝道者たちは、彼らの指導者であった・・・・・少なくても一時期は・・・・・・宣教師が、現地人伝道者に追い越されて行くのを楽しみにしていたように、信徒たちが自分を追い越して行くのを見て、大いに感謝する。信徒たちは自分たちが期待されている、信頼されている、そして喜ばれている、自分が役立っているということに大きな満足を味わう。

パラトック教会の例をもう少し見よう。典型的おちこぼれであった牧師は、自分が他人より優れているなんぞと思っていない。だから、自分より優れた説教者を信徒の中から見付け出すのに苦労しない。自分より上手に開拓伝道が出来るものを捜すのも簡単である。おしなべてこんな調子である。だから、日曜日の七つの礼拝会も、彼が出席できるのは精々二つだが、心配していない。そりゃあ、わたしから見れば、まったくもっておそまつな礼拝会であるが、牧師は自分でやるより良く出来ていると考えているらしい。それは、まず間違っていない。 そして、

わたしがおっとり刀で駆けつけて、日本式のかびの生えそうな礼拝会を強制するよりは、よほど良いにきまっている。

そんなわけで、この教会はその経済的、人材的、地理的なハンディキャップにもかかわらず、成長し続け、現在１０人位の信徒伝道者を持ち、他に１０人くらいが、やがて信徒伝道者になる可能性がある者として、訓練を受けている。中には、フル・タイムの信徒伝道者になった者も数人いる。 彼らは学問的水準こそ聖書学校を出たものより低いが、その熱心さと実際的働きの面では、大概ひけをとらないどころか、かえって勝っている。あいまいな「召し」の観念による献身ではなく、日常の奉仕の中で証明された賜物による献身だから、腰が座っている。 多くの者は聖書学校卒業生より年上であり、社会性をもち、常識を備えている。もちろん、彼らの中からより良い働きのため聖書学校などに行きたいという者が現れれば、実情に応じてその可能性を見付けることにしている。まじめな、目的にかなった学びを否定しているのではないのだから。

☆　　☆　　☆　　☆

しかし、このような信徒たちの働きを、神学的に正当と認めることができるだろうか。それこそ、大切な質問である。わたしの願いは、単に効果的な伝道とか、どうしたら教会がより早く成長するだろうかと、実利主義、功利主義的に論じることではなく、聖書的に、神学的に、教会とはどうあるべきかを捜し出すことなのだ。教会は営利団体や企業ではないのだ。 教会が真の教会であるために、人数の成長も経済の成長も、犠牲にしなければならないことがあるとしたら、わたしは喜んでそうする。

本当のところ、わたしは宣教や伝道、信徒訓練、教会成長、教会管理などに関する書籍を読みあさって来た。外国にいる都合上、日本語で書かれたものは比較的少ないが、２年にいちどの「帰国教会巡回」の折りには、たいていその種の物を手当り次第に読んでいる。 日本中を旅するのだから、時間はたっぷりある。そのため、最近は旅行中の個人伝道をあまりしなくなった。これはいけないことである。

数年前、知らない方から葉書を受け取った。それによると、２０年も昔、わたしは電車の中て彼に個人伝道をしたのだそうだ。それがひとつの契機となって、彼はその後献身し、今は札幌で牧会伝道をしているという。「近くにお越しの折りは、ぜひお立ち寄り下さい」と書かれているのに甘えて、次の教会巡回の途中、お訪ねした。札幌市の郊外に、なかなか見映えのする会堂をもつ教会の牧師であった。何とかいう聖書学校でギリシヤ語を教えているという。「うん、たいした出世をしたもんだ」 ２０年前の数十分の伝道は、一晩のおいしい御馳走ともてなしになって返って来た。

やはり日本の教会を巡回中、いつものような集会の後、わたしと同じ年頃のご婦人が話しか

けてきた。「あのう・・・失礼ですが、もしかして・・・」じっと、わたしの顔をみつめて言葉をお切りになる。「もしかして・・・・・・１５年ほど前、鹿児島から夜行列車にお乗りになりませんでしたか」「さあ・・・・あ、そうですね・・・・。その頃、わたしは沖縄におりましたから、たしかに一度だけですが、東京に出るとき鹿児島から夜行に乗りましたよ」。 「やっぱり、そうでしたのね。説教中ずっと、もしやと思っていたのですが、わたくしをご存知ではございませんか」 「はあ・・・・なに分、いろいろな人に会いますし、そんなに前のこととなりますと・・・・」「あらっ、がっかりだわ。でもそれが当然ですよね。先生は１５年前、鹿児島発の夜行に乗り合わせたわたくしに、聖書のお話しをして下さいましたのよ。それがきっかけで、今はクリスチャン家庭を築いて、２児の母です。今日は主人の郷に参りまして、近くにあったこの教会に出席させていただいたところでしたの。 本当に、偶然というか・・・・神様のお導きというべきか・・・」彼女の話しはまだまだ続いたが、わたしは、やっと１５年前のことを思い出していた。しかし、どうしても記憶が一致しない。「あの時の女の子は、もうちょっと色が黒くて、丸い鼻が丸い顔の上に乗っかっていた筈なのに」。 ついまじまじと、色白の、通った鼻筋を見つめてしまった。 ・・・・・夜行列車は脱線しなかったが、わたしは、また脱線している・・・・・

「袖振り合うも他生の縁」・・・・・これはいけないんでしたな。 夜汽車乗り合わせるも主のお導き・・・・・これなら文句はあるまい・・・・・「お導き」なんてわたしの言葉ではないが、わたしはいつも、自分の隣に来合わせた人を、「あるいは、神様がわたしの責任の下に置いてくださったのか知らん」と考えている。

話を元に戻して、とにかく、いろいろな本を読んで感じたことは、それらの多くは、実際的具体的「成功への手引き」ともいうべきもので、なかなか参考にはなるが、聖書的基盤が弱い。あるものは、かなり神学的に書かれているが、伝統的ではあっても、聖書的ではない。 伝道とか牧会という働きは、「成功するか」「効率的か」という前に、あるいは長老派的かバプテスト派的かと考えるさきに、聖書的かどうかが問われるべきだ。成功や効率、伝統などに捕らわれて、聖書が教えている基本を無視してはいけない。

では、信徒の働きについて、聖書はいかに教えているか。わたしが極めて基本的と受け止めている点について、説明したい。ただし、古くは万人祭司説、最近ではエペソ書４章１１～１２節のより正しい理解から、信徒の働きが強調されてきたのはご承知のことと思うので、その点についてはあまり取り扱わないことにする。わたしの言おうとしている点は、まだどなたの説でも、聞いたこと読んだことがないので、自分勝手な解釈かこじつけかもしれない。 そのあたりは、より神学の素養をお持ちの方に、判断してもらいたい。

Ｉコリントの１２章１３節に目を止めて欲しい。そこには、真実のクリスチャンはすべて、聖霊によって、キリストの体にバプタイズされたのだと、はっきりと記されている。ただ、日本語の聖書では、この点があいまいなために説明が必要だ。たぶん、日本語聖書の翻訳者たちは、自分たちの勝手な教会論を強化するために、あえて、間違った翻訳をしているのだろう。日本語では、教会員になるためにバプテスマ、すなわち洗礼という儀式を受けたと解釈できる

ようになっている。その洗礼が、聖霊によって承認を受けていると言うわけだ。

ところが、ギリシヤ語原典によると、「わたしたちはみな・・・・・・ひとつの御霊によってひとつのからだにバプタイズされ・・・・」となっている。ちなみに、手元にある５種類の英語の聖書は、みんなそのように訳されている。ひとつの体、つまり、キリストの体となるように御霊によるバプテスマというものを受けるのではなく、御霊によってキリストの体の中にバプタイズされるのだ。

まず、すべてのクリスチャンである。その中には、この手紙の受取人であった、コリントの多くのクリスチャンたちがそうであったように、道徳的にとても低くて、まるでお話にならない輩がたくさん含まれている。煙草ぐせが直っておらず、しょっちゅう飲み屋に顔をだし、かけ麻雀に熱中し、パチンコが止められず、すぐ腹を立て、他人の悪口を言い歩き、借りた金を返さない、ろくでもない連中も含まれている。口のきけない人、耳の聞こえない人、目の見えない人、歩くことも立つこともできない人も入っている。知能指数が低くて小学校にも満足に行けなかった人、歳を取ってすっかりぼけてしまった人。そんな人たちも含まれている。

すべてのクリスチャンであるから、５０年の年期が入ったものから、生まれて３日目の信徒も含まれている。聖書を４３回も読み通したというつわものから、まだミルクを飲んでいておむつの取れていない、成長不良の信徒も人っている。ひとかどの神学者から、聖書が６６巻から成り立っていることも知らない者も加えられている。

これら全員が、聖霊によってキリストの体にバプタイズされているのである。バプタイズしてくださったのは聖霊であって、牧師でも宣教師でも、役員会でも長老会でもない。教会はだれがバプタイズされるべきで、誰がされるべきでないか、口を挟む権利も余地も与えられていない。まったく聖霊の主権に属することだ。聖霊が、独断によって、バプタイズしてくださるのである。

バプタイズという言葉はパウロが敢えて選んだ言葉で、強い意味を持つ。それは、染め物をするとき、染料の入った水の中にしっかりと布を浸すといった場合に使うもので、単に、「付着させる」「取り付ける」「加える」「繋ぐ」「張り付ける」「結び合わせる」といったものではない。パウロはここでキリストにあるということが、・・・・・彼の得意の神学であった・・・・・どういうことか、クリスチャンはいかに神秘的に、キリストと一つとされているかを説明している。

その結合は、バプタイズという言葉でなくてはいけないような、深く、強くまた、接点がどこか見つけられないような親密なものである。この部分を書いたとき、パウロは、海難事故で一昼夜海の中をさまよった、自分の体験を思い出していたに違いない。水の中に落とされたとき、上も下も右も左も、周囲はすべて水。まったく、少しの隙間もなく、水。全身が水に濡れ、浸されている。耳の中にも鼻の中にも水が入り込んでくる。あわてて口を開くと口の中にも容赦なく流れ込んでくる。

パウロはここで、「御霊を飲む」という表現も用いているが、非常に意味深長である。御霊が満ち満ちている教会に、御霊によってどっぷりと浸けられ、御霊を飲む。これは、教会につながるということが、単なる儀式や組織への入会ではなく、また機械的な接合でもなく、有機的な結合だということを示している。そして、御霊が内側まで入り込んでくださり、すなわち内住してくださり、力になってくださる。その同じ御霊が、バプタイズされた人すべての中にも入ってくださり、同じ命で生かしてくださっている。

全ての信徒は、この体に、からだの一部分となるように、なるべく、ならんがために、バプタイズされたのである。そして、すべての部分はそれぞれの働き、機能を持っているのである。だから、全ての信徒は、バプタイズされたとき、すなわち本物の新生を経験した瞬間、機能すべきもの、働くべきものとして教会に与えられたのである。体にはつながっているが、何の機能も持たない「いぼ」になるように、バプタイズされたのではない。 決してそうではない。始めから機能するもの、機能できるものとして体の一部とされたのである。 確かにその機能はまだ小さく弱いかも知れない。しかし、より大きく、より強く機能する可能性を秘めたものとして、教会に加えられたのである。

あらゆる信徒が、なんらかの賜物を持っているということを否定する伝道者は、今日まずいないことだろう。しかし、すべての信徒が、実は賜物を持っているというだけではなく、賜物そのものであることに気付いているだろうか。多くの学者たちは使徒、預言者、伝道者、牧師、教師、あるいはその他の奉仕者たちが、賜物であると言っている。それは正しい聖書理解に違いない。とするなら、その様に目立つ働きをし、目立つ立場にいる者たちだけが、賜物なのではない。パウロは信徒の間にＡ級、Ｂ級と言う差別を持ち込みはしなかった。ただ、目立ちやすく、機能的に大きな働きをするものを、思いつくままに挙げたにすぎない。だから、どんなに小さく、目立たない機能を果たす者でも賜物である。

したがって、より優れた賜物を求める場合でも、今までのように個人主義的に「神様。わたしに、いやしの賜物を下さい。奇跡の賜物を下さい」と祈るだけではなく、教会論的に、共同体として、この教会にはこの様な人、この様な能力をもった男性、あのような性質を持っている女性が必要です。どうか、お与え下さいと祈ることが必要である。

わたしは、賜物が幾つあるかとか、「九つの賜物」を幾つに分類するかいうことに余り興味がない。タラントと賜物を分けることにも関心がない。生まれながらの能力、訓練によって得た能力、超自然的能力などと分けることにも熱心ではない。人間の能力、性質、所有、経験、体験など一切、即ち人間そのものを賜物と考えているからだ。

わたしたちは、キリストの血潮によって買い取られたものである。わたしたちの一切が買い取られたのである。百姓が水牛を買い取ると、その水牛のすべて、その力、その性質、その身体、その肉、その骨、その角全部を買い取ったのである。牝牛ならその子、そして乳も百姓のものである。糞まで百姓の物である。わたしたちは、神様に買い取られたのである。わたした

ちのすべてが、神様のものとなったのである。心だけではない。身体だけでもない。能力だけでもない。学問も、持ち物も、体験も経験も、性格も性質も、自分を形成しているものすべてが、神様のものとなったのである。生まれつきのものも、訓練によって得たものも、商売によって得たものもかわりなく、神様の所有物となったのである。そしてそのわたしたちが、改めて、キリストの体である教会に、賜物として与えられたのである。

すべてのクリスチャンが賜物をもっており、すべてのクリスチャンが賜物である。牧師も、伝道者も信徒もその点に於いてかわりない。しかし、どのクリスチャンも体の一部であって、ひとりで体全体にはなりえない。一人で教会を形成することはできない。かならず、たくさんの仲間、多くの部分を必要としている。牧師だろうが何だろうが、彼一人だけでは教会は存在し得ないのだ。教会が教会であるためには、たくさんの信徒がいて、各々がその賜物を存分に発揮していなければならない。

神様がわたしたちの教会に、目の見えない人を与えて下さったのは、目の見えない人にできる仕事があって、それは、牧師にも長老にも出来ないからだ。目の見えない人がいなくては、わたしたちの教会は充分な働きができないからだ。牧師の意見に反対ばかりしている人が与えられたのは、反対する人がいなければ、牧師の意見がいつもスーッと通ってしまい、教会の働きが浅はかになってしまうからだ。神様はすべての信徒を必要な賜物として教会に与えていて下さる。意見が合わない。性格が合わない。好みが合わないといって、簡単に追い出してはいけないし、飛び出てもいけない。神様は必要な賜物として与えて下さったのだから。

一つの教会、つまり地域教会と言われているものは、決して普遍的教会の一部分なのではない。つまり、あの教会は足の部分、この教会は手の部分などとは言えない。本来、あの教会は金持ちのため、この教会は貧しい者のため、向こうの教会は教育程度の高い者のため、こちらの教会は教育の無い者のため、というような事があってはならない。もちろん日本人専用に教会もアメリカ人専用教会もあってはならない、白人のためだけの教会も黒人のためだけの教会もいけない。

地域教会というものは、普遍的教会の一部分なのではなく、普遍的教会の地域的表現、地域的顕現である。即ち地域教会は、普遍的教会のある一部分を表現し、普遍的教会の働きの一部を受け持つと言ったものではない。地域教会は普遍的教会のすべての性質を持ち合わせ、すべての働きを任せられ、それらすべてを遣り遂げて行く、可能性を与えられているのである。だから、神様はわたしたちの教会に、ありとあらゆる種類の人間を与えてくださるわけだ。嫌いなタイプの人、けったくその悪い人、虫の好かない人、できれば顔も見たくない人まで、神様は与えて下さる。みんな、わたしたちの教会が普遍的教会の地域的具現として、正しく存在できるように、あるべき姿であるように、加えられたのである。

８７才のおばあちゃんがいる。 白米は一度も食べたことがないほど、貧しい娘時代を過ごしたあと、働き者の青年に見初められて結婚し、３人の男の子と２人の女の子を授かった。ところが、やっと掴んだ幸せも束の間、夫は仕事場の事故でいともあっけなく逝ってしまった。

死にもの狂いで働いて、なんとか子供たちが自活出来る頃になって、戦争。３人の男の子たちは次々と赤紙で連れて行かれたまま、二度と姿を見せてくれなかった。そして終戦。栄養失調の上に胸をわずらった長女には、満足な薬一つどころか、栄養のある食べ物一つさえ買い与えることも出来ず、胸に抱いたまま静かに冷たくなって行くのを見守る以外、どうすることもできなかった。最後に残った末っ子の娘だけが、「やっと、幸せな結婚をしてくれた」と喜んでいる矢先に、まだ乳離れしていない女の子を連れて離婚。水商売を始めてすっかりすさみ、いく度も男に捨てられてアルコール中毒。物心ついた孫娘はぐれて家に寄り付かなくなって、とうとう行方知れず。 いまはただ一人、老人ホームで神経痛に苦しみながら、じっと死を待っている。

こんなおばあちゃんに、福音を語ることのできるのは誰だろう。説教の上手な牧師か。博士号を持った神学校の先生か。聖書講義の上手な青年か。いいや。いつもは教会のすみっこで、静かに座っているおばあちゃんではないか。神学は知らない。話しも上手ではない。 歌も唄えない。楽器もできない。何にもできない。 しかし、戦争で子どもを失った悲しみを知っている、このおばあちゃんではないか。夫を失った悲嘆を、胸に秘めて一生懸命働いて来た、このおばあちゃんではないか。いまは、体も不自由で、他人の助けなくしては一日も生きて行けないが、救いを受けて永遠の命の希望を持ってしつかり生き抜いている、このおばあちゃんこそ、この教会があの８７才のおばあちゃんを、救いに導くことが出来るようにと、この教会に神様がお与え下さつた賜物ではないのか。このおばあちゃんの、長い人生の苦しみと悲しみの経験は、そのまま教会の賜物、宝物ではないのか。あのおばあちゃんの話をじっと聞き、肩を寄せあって真実の同情の涙を流すことができるこのおばあちゃんこそ、この教会が涙をお流しになったキリストの代理者として、この世に存在していることの証ではないのか。わたしたちの教会はこのような賜物を粗末にしていないか。忘れ去ってはいないか。見失ってしまってはいないか。

教会は、キリストがこの世に遣わされたように、遣わされたものである。（ヨハネ１７：１８、２０：２１） その目的とあり様は、キリストが遣わされた目的とあり様に一致する。キリストは何故わざわざこの地上に生まれる道を取られ、人々と共に住み、人々と同じように苦しみ、同じように悲しまなければならなかったのか。不要な洗礼までお受けになったのか。神様のみ心の奥まで伺い知ることはできない。しかし、キリストはそうすることによって、具体的に人々とのアイデンティティ(共通性)をお作りになり、真実 の、哀れみに満ちた大祭司になって下さったのだ。

福音は苦しみを通して完成された。そして、この福音はキリストの体である教会の苦しみを通して伝えられる。教会はキリストの救いだけではなく、キリストのために苦しむ苦しみをも賜っているのである。（ピリピ１：２９）。キリストが世の人たちと苦しみを共にして下さったように、教会もまた、世の人たちと苦しみを共にするのである。パウロは、教会のこの苦しみがまだ足りないから、その足りないところを、自分のからだをもって補っていると言って、苦しみに意義を見いだした。（コロサイ１：２４）

教会には苦しんでいる人がいる。悲しんでいる人もいる。教会がキリストの体として、キリ

ストの大使として、キリストの代理者として、世の人たちと苦しみを共にするためである。信徒の中の若い娘の失恋の悲しみも、青年の仕事の挫折も、子どもを失った親の痛みも、離婚の苦々しい思い出も、親に捨てられ子に忘れられた寂しさも、それが贖いによって主のものとされ、教会に与えられたとき、福音のために世の人々と苦しみを共に担う、教会の賜物となるのである。そして、教会はその痛みを通して、痛みによって完成された福音を、痛んでいる人たちに語るのだ。それこそ、教会がいまだに完成された御国、即ち、死も悲しみも、叫びも苦しみも無く、涙を拭き取っていただける国に入れてもらえず、この世に遣わされている理由である。今のこのとき、教会から苦しみがなくなっては、教会は、悲しみの人で病を知っていたキリストの大使、代理者ではあり得なくなるのだ。繁栄の福音も、積極思考もこの真理にまったく気づいていない。

だからすべての信徒が、小さい者も弱い者もみんな必要な、大切な部分、欠くべからざる賜物である。彼らは、みんな、必ず何かの役割を果すべく与えられたのであり、何かをすることができる。大切なのは、彼らを役に立たない者として見ないで、重要な役割を果すように、果たすことが出来る力を賦与されている者として見ることである。彼らはあくまでも、正しい意味で体の一部となるべくバプタイズされたのであって、「いぼ」になるようにバプタイズされたのではない。絶対にそうではない。彼らを「いぼ」のように取り扱ってはならない。「いぼ」のように体から栄養分だけを取って、体全体に対して何の役にも立たない者として、残して置いてはならない。

牧師、伝道者たちは、ともすればこの信徒の力を見損ない、まったく鼻にもかけない。せいぜいよほど立派な信徒数人に目を付け、しかもまず、訓練と称する失礼なことを始める。訓練が何故失礼か。それは、訓練が「信徒には出来ない」という前提から始まるからである。「信徒は出来る」という前提から始めると、最初に訓練なんぞを持ってこない。最初に、信徒に仕事をしてもらう。彼らには出来るのだ。だからやってもらう。それは、親が赤ん坊に歩行訓練なんぞしようと思わないのと同じである。正常な赤ん坊は、時がくれば黙っていても必ず立ち、やがて歩き出すことを知っているからだ。親は赤ん坊が歩くことを信じ期待し、励まし続ける。転んでも、おでこをぶっつけてもそこいらへんを擦りむいても、おたおたあわてたりしない。ずっと励まし続ける。赤ん坊は偉大な潜在能力を与えられて生まれて来たのだ。

現代のわたしたちの教会の問題は、潜在能力を持って生まれて来た新しい信徒が、見て、真似をすることができる、活発な信徒の模範がないことである。いくら潜在能力があっても、それを発見し、用いようとする動機がなければ、それは発揮できないままに終わってしまう。多くの場合、動機は物まねから始まる。みんなが楽器を奏で、歌を唄う環境で育つと、音楽の方面に大きな潜在能力を持っているものは、たちまちその能力を発揮して唄いだし、楽器を奏でるようになる。ところが楽器などまったくなく、歌を唄う人も周りにいない中で育つと、どんなにすばらしい音楽的潜在能力を持っていても、それは用いられないままになる。そして、用いられない状態が長引けば長引くほど、潜在能力は失われてしまう。イエス様の譬えでも、用いられなかったタラントは取り上げられてしまった。

しばらく前のこと、マサチューセッツ工科大学という超エリート校が、(ＭＩＴと呼ばれている）一つの研究結果を発表した。彼らの研究によると、マルハナバチという蜂、・・・・・・そうです。北海道などではシロツメクサ（白クローバー）にたくさん集まってくる、あの黒っぽくて丸い蜂です。クマバチ、クマンバチとも呼ばれ、リムスキー・コルサコフの「クマンバチの飛行」という曲でもなじみがありますね。・・・・・・このマルハナバチのあらゆる部分と機能を細密に調べた結果、航空力学的に飛ぶことができないという結論に至ったのだそうだ。そこで、アメリカの有名な新聞に一コマ漫画が掲載された。マルハナバチが仰向けにひっくり返って独り言を言っている。「だってＭＩＴが、俺は飛べないっていうから・・・・」

超エリート校の研究結果として、「飛べない」と断定されたマルハナバチは、いままで自由に飛んでいたのに飛べなくなった。何にもできないと思われ続け、何にもさせてもらえなかった信徒たちは、何にもできないと思い込み、何もできなくなった。

現在で開拓２年近くなる、わたしたちのサン・フェルナンドの働きは、家庭聖書研究会から始めた。４０ほどの聖書研究会で救われる者を起こし、救われた者は伝道者や信徒のリーダーにくっ付いて、家々を訪問し、証をし、み言葉を語り、さらに聖書研究会を開く働きに参加させられた。礼拝会が始まったのは８ヶ月以上もたってからである。最初の礼拝会には、すでにしっかりと救いの体験をした「信徒」だけが、２０数人出席した。信徒にとっては、このように活動するのが当り前のクリスチャン生活になったのである。現在５、６人がそれぞれ二つ三つの聖書研究会の責任を持っている。あるものは礼拝会の説教もする。先日会った時は、野外伝道会の説教を準備中とのことで、張り切っていた。 生まれたばかりの信徒たちは、潜在能力を用いて成長できる環境に置かれたのである。この教会は信徒が何でもすることが普通、つまり正常な状態であり、伝道者が何でもやってしまうのは異常な状態なのである。

現代の教会の欠点は、訓練会だの勉強会だのを、あまりにやり過ぎることである。いや、やろうとし過ぎて、結局やれずじまいに終わり、信徒は訓練不足で使い物にならないと、捨て置かれたままになっていることである。まず、実際に何かをしてもらうことだ。 何でもやって見るように励ますことだ。たくさんやるべきことを見せることだ。信徒はタラントを与えられている。タラントは用いられて増える。訓練会では増えないし、勉強会でも増えない。訓練会に出なければ出来ないという、間違った神話を打ち壊すことだ。実践こそ最善の訓練だ。実践を何回もくり返し、失敗と成功をたくさん体験することである。

かなり前のことだが、わたしたちが着任早々に開拓し、その後手放した教会の青年会に招かれた。個人伝道訓練会の講師である。合計２０時間も教えただろうか。 その後数年たってから、訓練会に出席していた何人かの青年たちに聞いてみた。「あれから個人伝道を実際にやって見た者は何人いるか」。 そして答えは、予期したとおり「一人もいない」であった。ところが、それから数日もしないうちに、その教会の牧師が他の教会の牧師に話しているのが聞こえた。「個人伝道の訓練会をするんなら、うちの教会には訓練を終了した有能なのが何人もいて、訓練会で教えることができるから、彼らを貸し出してもいいよ。」個人伝道の訓練会では、個人伝道訓練会で教えることができる者を作り出すが、個人伝道をする者は作り出さない。伝道に失敗し

て落胆した者が学校に行って学位を取り、聖書学校に戻って伝道を教えるようなものだ。

それからしばらくして、同じ教会の他の信徒たちを数人、週末ごとに４ヶ月に渡って借り出し、前述のサン・フェルナンドの聖書研究会を開く、開拓の働きに参加させた。礼拝と祈りをし、基本的な働きの説明をしただけで、訓練はしなかった。しかし、彼らは立派に伝道の働きをし、多くの家庭聖書研究会を開き、何人もの人間を救いに導いた。それから２年近くたった今も、彼らは「超怠け者」の牧師を横に、なかなか熱心に伝道に励んでいる。牧師や伝道者は、自分たちが教会のごく一部にすぎないことを、しっかりと自覚すべきである。たとえ、指導的立場にいて、より大きな賜物を持っていようとも、教会全体の賜物に比べるといかに小さなものであるかを、肝に命じるべきである。教会のほとんどすべての信徒は、ある条件に於いては、またある種の人たちに対しては、牧師より、伝道者よりずっと強力で、効果的に伝道ができるということを知るべきである。

また、バラトック教会の例を使おう。この教会に３０才前後のむさっくるしい男性の信徒がいた。髪はぱさぱさ、ひげは伸び放題、手はまっ黒、着ているものは汚れてテカテカ、歌を唄うとどういうわけか常に調子っぱずれ、しゃべると支離滅裂。小学校もろくに出ていないのではないかと思われる。ある日牧師が、「この男を信徒伝道者に仕立てたいが・・・・」と言う。わたしは言下に断定した。「ありや、だめだよ」。ところが牧師はわたしの言葉尻を捕らえ、「どんな信徒でも可能性を持っていると教えたのは誰か。あれには可能性がないのか。 あれは人間ではないのか」と詰め寄る。いささかもてあまして、面倒臭くなったわたしは、「じゃ、自分の責任で試してみなよ。後で泣きごとを言わんでくれよ」と、折れておいた。

それから３年、わたしは、あのとき折れておいて本当に良かったと思う。 あのむさっ苦しい信徒は、自分の出身地に戻り、自分たちの言葉で伝道し、彼よりももっとむさっ苦しい人たちを、多勢信仰に導いている。日曜礼拝会には２５～３０人、金曜礼拝会は別のところで１５人前後。１週間に９０人ほどの者が、彼の働きを通して福音を聞いている。彼によって救いに導かれた人たちは、わたしにはとても太刀打ち出来ない種類の人たちである。牧師にも無理である。あんまり、無教育で、粗野で、田舎者で、貧しく、わたしの神学的説教も、牧師の聖書的教えも、彼らには絵に描いた餅、猫に小判である。彼らの水準で福音を語ることができる者が必要だったのだ。もしも、あのむさっ苦しい信徒を役立たずとみなしていたら、数十人もの人たちを失っていたことになる。

さて、ここまで書いたところで、このむさっ苦しい信徒伝道者に呼ばれて、彼の信徒修養会に行ってきた。実際のところ修養会なんて仰々しいものではないが、それなりに立派な修養会である。波板トタンをばったべったと張り付けた、隙間だらけの物置にも足りない彼の家には、１２人の信徒たちがそれぞれ、２、３人の子供たちを連れて集まっていた。母親が赤子に乳房を含ませている姿は、たとえ、美人でなくても美しい・・・・。話によると、最近はちょっと停滞ぎみで、集会人数もだいぶ少なくなっているという。それでわたしに、助けを求めてきたらしい。

ところで、ここで意外な発見をした。集まった１２人は何と５つの異なった部族に属しているのである。そこに、かてて加えて日本人のわたしときている。通訳したむさっ苦しい君も大変だった。結局、普段は使わないイロ力ノ語に通訳することにあいなった。驚いたことに「ありゃ、だめだよ」の彼は、４つの部族語と英語がかなり話せた。部族の中には睨み合いをしているものもあるし、一番年上の出席者とおぼしき老婆は、わたしを見るなり、「日本人が嫌いだ」と吐き出捨てるように言った。ご主人と二人の息子を、目の前で日本兵に殺されたと言う。この辺は、敗走に敗走を続ける日本兵と現地人との間で、多くの悲劇が演じられた。それについては、日本語の本も何冊か出ている。なにはともあれ、つい最近までは３部族だけの出席だったのに、ちょっとした変化である。これが、最近の 「停滞気味」にどう関連しているか、興味ぶかい。ただこれは、うまくやると、大きな成長につながる可能性がある。

話を元の筋に戻そう。「老眼鏡を買わなくちゃ」と考えている牧師は、「おいぴー」とか 「うれぴー」なんぞと言っている女の子に、効果的な伝道はできない。だから神様はその教会に、同じ年頃の女の子たちを与えてくださった。 少々やかましく騒がしく面倒臭くても、そして頼りなさそうに見えても、彼女たちこそ、牧師には出来ない「ピー族」伝道の働きをしてくれる教会の宝である。

「・・・・ どこかに、ピアノが弾けて、歌がうたえて、聖書も教えることができる、献身的な女性がいないかなぁ・・・・」と、窓の外を眺めてため息をついている独身牧師には、暴走族の息子と登校拒否の娘を持った母親の相手になれない。そこで、いささかお喋りでおせっかいで押し付けがましく、恥知らずで涙もろい、扱いにくい「オバちゃん」信徒が何人もいるのである。彼女たちも、本来教会の宝、賜物である。

牧師一人ではとっても足りない、やって行けない。だからいろいろな人がいるのである。もしも、牧師一人でなにもかもやってしまうとどうなるか。その教会には、その牧師に我慢の出来る者しか来なくなる。ご詠歌調で唄う牧師がいつも司会をし、歌をリードしていたら、現代人の９５％は嫌になって来なくなる。講談調の説教ばかり聞かされると若い者は敬遠する。ヘビメタで唄えば、クラシックに陶酔している者が来なくなり、大学の講義のような説教では、平均的人間は疲れてしまう。

たとえ牧師がどんなに人間的幅のある人物でも、その牧師の色というものがある。育ち、故郷、教育、経済背景、政治傾向、管理上の癖、趣味、性格、好みがある。そしてそのような牧師に親しみを感じられない、別の種類の人間はこの教会には留まれない。ある者は、薄くなった髪の毛をぼさぼさにしている牧師には、我慢が出来ず、いつも櫛目の通ったおつむをしている牧師を捜して放浪する。かの者は、下っ腹の出始めた牧師に幻滅して、ウエスト７０の牧師を尋ねて旅に出る。膝の抜けたズボンの牧師に失望する者、靴下がいつもずり落ち加減の牧師に、愛想をつかす者がいるかと思うと、反対にそこが良いという者もいないでもない。牧師一人では、救いを必要としている多種多様の大衆に対応できない。だから、多種多様な人間を、神様は教会に賜物として加えて下さっているのだ。多種多様の信徒が、多種多様のまま、多種多様に用いられるべきだ。

たとえ、人口１０万人の町でも、牧師の人間性に満足出来る者の数は、大変少ない。とても１０分の１はあるまい。たとえば、もしもわたしが牧師になったとしたら、わたしに満足できる者は千人に一人もいないだろう。なんとか我慢できる者だって数百人に一人あれば、それで良しとしなければならない。わたしの妻だって、「なんとか我慢」の部類である。だから、人口の３６％は・・・・・勿論、子供は入っていな心だろうが・・・・・クリスチャンになっても良いと考えていたとしても、教会は日曜日以外は開いていないから、その内の１０分の９は福音を聞けない。さらに、教会は会堂似外では福音を語っていないから、残った１０分の１の、１０分の９は福音を聞けない。そして、やっと、日曜日に教会堂に来て、牧師の名説教を聞くことができた、１０分の１の１０分の１の１０分の９以上の人たちは、牧師にイメージを壊され、教会に残らない。これだけで、人口１０万の町で、教会に留まって信徒生活を送れる者の数は、わずか１００人、いや３６人になった。その中に子どもが３０％くらいると見ると、大人でこの教会に留まり続ける可能性のある者は２４，５人となる。 しかし実際は、とてもそれほどの人数がいるとは思えない。わたしの計算はとても甘く非現実的である。このていどの町で信徒数２５人に達するには、うまく行って５年、並みで１０年。ひょっとすると２０年もかかるかもしれない。

そこで、何としても、信徒に働いてもらわねばならない。たんに、掃除だとか、トラクト配りだとか、印刷だとか、あるいは、伝道委員会だとか、役員会といった働きではなく、本物の伝道の働き、牧会の働きをやってもらわなければならない。彼らに、自分で開拓伝道を始めてもらい、自分で会衆を建ててもらい、自分で世話をしてもらい、もっともっとたくさんの場所で、もっともっといろいろな時に、もっともっと違った人たちを対象に、働いてもらわねばならない。一教会、一教会堂、一牧師、一礼拝会というかび臭い伝統を捨てなければならない。一つの教会は、場合によっては教会堂を５つも持っていても良いし、まったく持っていなくても良い。ただたくさんの異なった会衆から、構成されるべきである。

新約聖書に出て来る教会はみんなそのようにしていた。現代の教会の出席人数の数え方にならうと、おそらく数万人に達していながら、会堂を持てなかったエルサレムの教会は、一般の家々を集会に用いていたが、少なくても１００を越す会衆から構成されていただろう。エペソの教会もロ一マの教会も、かなり多くの会衆によってできていた。したがって、とうぜん何人もの牧師たちがいた。彼らはふつう長老とか監督とか呼ばれていたのである。そんなわけで、礼拝会もたくさんあったし、多分、各々に最も都合の良い時に集まっていた。すると、ある会衆はより教育程度の高い者が中心になり、他の会衆は肉体労働者が多くなってくる。 こちらの集まりは、詩吟でもうなるような調子の、おじいちゃんたち、あちらのグループは、ズダダダダドンドドンとドラムをぶっ叩くお兄さんと、チュルチュルチュ一ンチュンとエレキをひっかくおネェさんたち、そして、むこうは字引と首ったけで原典聖書に取り組む眼鏡のおじさんたちと、自然にそれぞれの色が出てくる。こういう人たち全員が、一つの教会に属しているのである。だから、この教会は違いの壁を乗り超え、ピーター・ワグナーの均一性の神話を打ち破る。

また、バラトック教会の話をしよう。この教会にはちょっと数えただけで、１０の異なった部族に属する人たちがいる。中には、とても部族意識が強く、互いに排他的な者も多い。言葉も習慣も教育も経済状態も社会的地位もずいぶん違う。普通なら、一つの教会がこれほど雑多な種類の人々を含むのは、おおよそ不可能である。そして、教会はいつまでも小さいままでいなければならない。なにがバラトック教会を可能にさせたのか。異なった種類のクリスチャンたちを、賜物として感謝して受け入れ、自由に賜物を用いて働いてもらった結果である。始めの内こそ、救われた新鮮な興奮だけで、たいしたことは出来なかったが、いつも、牧師にくっ付いて歩き、もの真似をし、段々自分たちでも出来るようになって行った。すると、次に救われた者もその真似を始めた。そして、やがて単なる真似以上になって行った。それだけのことである。それぞれの信徒が自分の特徴を生かし、自分に出来ることを始めるようになり、それぞれにふさわしい人間が救われるようになった。当初は、とても一つの教会としてまとめられないように思えたが、それぞれが信仰の成長をするにつれ、違いを超えてまとまるようになって行った。ただそれだけのことである。１年に何回かは、全部の会衆が一ヶ所に集まり、お祭り騒ぎの感謝親睦礼拝会がおこなわれる。 豚と鶏がたくさん屠られ、ときには犬も加えられ、ご馳走が山と出される。

信徒に働いてもらう。ただし、信徒の働きは決して牧師のお手伝いではない。はじめから、信徒の働きである。それは教会の働きだから、信徒の働きである。「信徒の動員」という言葉がある。言いたいことは分かるが、間違っている。信徒は動員されてはならないものだ。動員するということは、本来動いていない、働いていない、参与していない。だから、動員しなければならないということだ。信徒を動員しなければならない状態にしたのは、そうしているのは誰か。信徒とは、もともと始めから動き回るもの、活動して留まることを知らぬもの、活動の役割と責任と能力があるものとして、教会にバプタイズされたのである。

バプタイズして下さったのは聖霊であり、神様の主権に属する行為である。聖霊は、牧師に一言の相談も断りもなしに、「勝手に」、ご自身の深いみ旨によって、とても牧師が考える教会の水準に届かない者、役員会の面々が恥ずかしく思うような者を、こともあろうに、あなたの教会にバプタイズしてくださった。有り難迷惑か。牧師はそんな信徒を無視したい。役員会は、ひそかに彼らがいなくなることを願っている。

それでも真面目な牧師は、こんなどうしようもない信徒でも何とか訓練して、使い物に成るように仕立て上げようと努力する。だが、自由に活動してもらう前に「訓練」すると、どうしても、牧師とか教会の伝統とかいう決まりきった枠の中に信徒たちを押し込め、神様が始めからその信徒のために目論んでおられた働きを、出来なくしてしまいがちである。神様は千種万別の賜物を用意しておられるのに、教会はそれを陳腐な一握りの働きの枠に押し込めようとして、次々と賜物を殺してしまっている。

牧師、伝道者がしなければならないのは、信徒たちが持っていない賜物を、訓練によって与えることではない。すなわち、現代の教会のシステムと運営、あるいは牧師の牧会観には都合が良いが、神は与えようとなさらなかった賜物を、訓練によって無理やりに押し付けることで

はない。まず信徒たちに、自由にできる事を見つけ出して、自由にやってもらうことによって、彼らの賜物が何であるかを発見し、その、「彼らの賜物」に磨きをかけることである。エペソ書４：１２で、伝道者、牧師などの働きは、聖徒たちを「整える」こととされているが、この、「ととのえ」と訳されているギリシヤ語には、備える、装備する、授けるなどの意味はない。もともと、外科医が骨折を治したりする場合に用いられた言葉だ。キリストがガリラヤ湖畔で漁師たちをお招きになったとき、猟師たちは破れた網を修理していたが、その「修理する」という言葉と同じである。日本語では「繕う」となっている。英語のある訳では、牧師、伝道者の働きが「装備」という意味に訳されているが、これはまずい。彼らの働きは、すでにあるものをより良くするために、「ととのえ」「修理し」「繕い」「準備する」 ことであって、ないものを備え、装備し、授けることではない。何を持っているか、まず見つけ出さなければ、ととのえ、準備し、繕うことはできない。だから、新しい、役に立ちそうにもない信徒でも、神様に賜物を与えられている者、賜物そのものと信頼して、まず、なにはともあれ仕事をしてもらうことである。

個人的には、この個所には「調整する」という訳が最も相応しい気がする。ただ、なんとなく機械的なことばで、生きたキリストの体にはちょっと馴染まないが、意味の上ではぴったりする。牧師、伝道者たちの役割は、体のすべての部分を一つひとつ調整して、体全体として最高のコンディションで奉仕が出来るようにすることである。

大切なのは信頼である。信頼されている者は 幸福である。そして信頼に答えようと努力する。どうしても信頼できなければ、その人ではなく、その人をバプタイズして下さった聖霊を信頼したら良い。牧師は、信徒が信頼に足りない、必ず失敗し、間違いをしでかすものであると知っていながら、信頼すべきである。信徒を完全に信頼してはならない。彼らは牧師であるあなたや宣教師であるわたしと同じくらい、まったく信頼に足らない人間である。そこをあえて信頼するのである。

この大切な人間関係の模範を示されたのはキリストである。キリストは、人間というものが、おしなべて信頼できないことを知っておられたし、弟子たちがやがて裏切ることも知っておられた。知っておられた上で信頼なさったのだ。キリストは、あなたもわたしも信頼に足りない者であることを、百も承知の上で信頼し、伝道者、牧師、宣教師として立てて下さっているのだ。信頼に足りない人間の集まりである教会を信頼し、こともあろうに、ご自分の命に代えて成し遂げられた贖いのみ業を、この教会に託されたのだ。まだどうしても信徒を信頼出来ないならば、その信徒の内に住んでおいでになる聖霊を信頼するが良い。

フィリピンの牧師たちは説教がうまい。しかし、わたしはあまり上手に説教した牧師には小言を言う。「駄目だよ。あんなに旨い説教をしたら。見ろよ。みんな感激してしまって、すっかり満足してるじゃないか。本当に良い説教というものは、ひとを感激させたり、満足させたりするものではなく、『あれくらいなら、ワシにもできそうだ』『うちの牧師にまかせておいちゃいかんから、ひとつ僕が頑張って・・・・』『よし、俺も説教してみよう』と思うように、彼らに動機を起こさせる説教だ。あんたの説教を聞いた者は、『あんな、上手な説教は、とても我々

のような並みの人間にはできっこない。説教は牧師に任せよう』『あんなに素晴らしい説教でも、あんまり救われる人が起きないんだから、わたしなんか説教したってしょうがない』と感じてるよ」。 どんなに下手な説教でも、その説教がもう一人の説教者を起こせば、大説教だ。うまい説教とは、うまさを感じさせず、説教自体も説教者も忘れられてしまっても、説教の内容が心に残り、人を捕らえ、動かし、作り変えて行くような説教である。最近の説教は説教そのものより説教者を感じさせてしまうのがもてはやされている。

牧師の仕事は、自分で仕事をすることではなく、信徒を仕事のできる者に育てあげることである。何でも上手にできて、信徒に仕事をさせられない牧師は、牧師ではなく雑務係りだ。宣教師としてのわたしの願いは、自分で大きな仕事を成し遂げて、立派な宣教師として人々の記憶に残ることではない。忘れられても良いし、無能な宣教師として記憶に留められてもいい。ただ、わたしより良い働き人を起こすことだ。わたしを乗り越えて行く宣教師を起こすことである。

☆　　☆　　☆　　☆

いつでも伝道するようになったら、教会は成長する。ことさら、牧師が勉強して学位を取り、水準を上げるなどという努力とはあまり関わりなく、教会は成長する。

わたしは釣りが好きである。宣教師には休養が必要であるだの、いつも張り詰めていて、精神的に解放される時がなければ、途中で挫折してしまうだのという、有り難い先輩宣教師諸氏の忠告を素直に聞いて、ときたま竿を持ち出す。まだ、ある先輩たちのように、日曜日の朝の礼拝会の時間まで、ゴルフに出掛けるほど休養の必要を感じていないが、１年３６５日休みなく働き続けておられる、多くの日本の牧師に比べると、優雅な生活である。それでも「怠け者」の多い、現地の伝道者たちに言わせれば、わたしは働き過ぎだそうで、わたしが遊びに行くとかえって喜ぶ。こちらの国では、毎年バケーションを取る牧師がかなりいる。１ヶ月も取るのがいて、帰って見ると、教会が潰れていたり、いつの間にか自分は解任されて、知らない新しい牧師がちゃんと働いていたりする。そんな悲喜劇が、性懲りもなくくり返されている。

ほとんどの場合は、良い釣り場がないこともあって、「きす」を釣りに行くくらいだが、調子が良ければ形の良い奴を４０～５０匹は釣って帰る。妻は魚を捌くのは嫌いだから、わが家のグウタラ雄猫を喜ばせることになるのが普通である。東京育ちの妻は、魚というものは切り身て泳いでいるとでも思っていたらしい。北九州市に少しの間滞在した時、「ここは魚が新鮮でうまいところだよ」と言ったら、その晩のために「さんま」を買ってきた。７月のことである。我が愛妻と同じく、魚について知らない方のために説明すると、秋刀魚は寒流の魚で、おいしいのは北海道から三陸。房総半島くらいまでならナントカ食べられる。北九州の近く、玄界灘で取れる秋刀魚は猫も食わない。しかも、秋刀魚は「秋」という字が入るように、秋から初冬の魚である。７月の秋刀魚では、塩秋刀魚の冷凍ものだ。わざわざ北九州で食うものではない。

釣りをしていると、必ず近所の子どもたちが寄って来て、一緒に釣り出す。日本製の竿とスピニング・リールが珍しく、うらやましくてしょうがない。なにしろ、節くれねじ曲がった土地の竹が、彼らの知っている唯一の竿である。わたしは、ジエット天秤を取り付けて、１００メートル以上も飛ばして見せる。そして、唖然としている子供たちにリールを巻かせてやる。

子供たちはこんなに凄い道具を持っていて、たかがきす釣りに夢中になっている日本人が、不思議でならない。なにしろきすって奴は、ここいらでは一番安い魚である。こんな事をくり返している内に、この辺の人たちに重荷を感じ、とうとう開拓伝道をやってしまった。今も働きが継続されている。

わたしの言いたいことはそんなことではなく、要するに自分は釣りがうまいと思い込んでいるということである。 少なくても近所の子供たちよりは、「必ず」たくさん釣る。ところが、近所のこどもたちは毎日釣っている。わたしは毎日でもやりたいが、そこまで怠け者になっては、「フィリピンの未開地で大変な苦労をして、主のために働いておられる」と信じて献金して下さっている、日本のクリスチャンたちに顔向け出来ないから、ほどほどにしている。だから、結局より多くの魚を釣り上げているのは、日本製の進んだ道具を持って、わざわざ古本屋に出かけて行って見つけ出したマニア本を読んでは、釣りの上達に情熱を傾けてきた釣り上手の宣教師ではなく、少なくても一日に一回くらいは、いやでも排便のために海に出てこなければならないほど、海の近くに住んでいて、毎日釣りに精を出している海岸ぷちの子どもたちである。

どんなに説教上手で、伝道名人でも、一週間に一回くらいの「釣り」では、釣り上げられる魚の数は知れている。もう少し釣りの回数を増やす事である。「下手な鉄砲も数撃ちゃ当る」って、言い草もありましたね。いつでも伝道しよう。

きす釣りの秘訣は、きすのいるところに行くことである。きすなんて奴を釣るにはたいした技術はいらない。よほどコンディションが悪くない限り、やっこさんたちがいる所に餌を落として誘ってやると、すぐ食いついて来る。ところがきすという魚は大きな群れは作らない。だから、数多く釣るためには常に移動し続け、数匹でランデブーしている所に早くぶつかることである。一匹釣れるとたいてい同じ所で数匹続けて釣れるのである。

きす釣りで、のんびり腰を下ろしているのは、日本の教会式釣り方である。日本の教会は教会堂という場所に腰を下ろしたまま、魚が向こうからやって来るのを待っている。この方法では大漁は期待できない。ましてや、きす釣りになのに、磯できすが食いつくのを待っていたのでは、海岸で猿が溺れるのを待っているのとかわらない。魚が来るのを待つだけではいけない。魚のいるところへ出ていこう。どこでも伝道しよう。

それにしても、現地の子供たちは毎日飽きずに釣っている。他にやることがないわけでもない。彼らの釣りはわたしのような趣味、道楽の釣りではなく、実益を兼ねた釣りである。親や年上の兄たちは、たいがい沖に出て大きな魚を捕らえるが、これは大切な売り物で、滅多に自

分たちの口には入らない。じぶんたち漁師家族は、小さな子供が海岸で釣り上げた小さな魚を食べる。だから、子供たちの釣りは遊びではない。かと言って仕事でもない。来る日も来る日もこんな小魚を、「仕事」で釣っていたのではいくら子どもでも惨めになる。 だからと言って、「遊び」だけで毎日こんなことをくり返していたのでは、とうの昔に阿呆くさくなっている。遊びでもない仕事でもないからいつまでも続いている。子供たちみんながやっている。要するに生活の一部なのだ。それだけに、当然、結構たくさんの魚が釣られている。

教会も、やれ伝道会だ、やれトラクト配布だ、さあ日曜学校だ、それ説教だなんぞという「仕事」の伝道ばかりやっているから、効果が上がらず、惨めになる。がぜん参加者も少なくなる。もっと教会全体が、つまり信徒一人ひとりが日常生活の中で、仕事ではない伝道をすべきであり、出来るようにされるべきである。ごく自然なおしゃべりとして福音を語るようになればいい。すると必然的に、より多くの信徒が伝道に加わることになり、より多くの人が福音を聞くことになり、より多くの人が救われることになる。だれでも伝道できるようにしよう。だれでも出来るようにするというのは、「だれでも」を訓練して「だれでも」でなくして、つまり、立派に変えることによって、出来るようにするということではなく、だれでもが、だれでものまま、そのままの状態でも伝道できるように、教会を変えるということである。 だれでも伝道できるようにしよう。

「なんでも」の伝道

さて、教会がいつでも、どこでも、だれでも、の伝道をし始めたら必ずもっと成長するだろうか。そんなことは、保証できない。わたしはあらゆる場合に必ずこうなると言おうとしているのではない。わたしが言おうとしているのは常識の問題、確率の問題、算数の問題である。一週間に一回よりは二回にした方が確立は高い。一ヶ所よりは三ヶ所の方が接点は多くなる。一人より五人で釣った方が、合計するとより多く釣れるという当り前の話で、それ以上ではない。

これは、小学校１年生にはとてもよく分かってもらえるが、神学、聖書学を積まれた「牧師先生」には、まず、滅多に分ってもらえない。その先生たちに訓練された 「しっかりした信徒」の方々にも、分かって貰おうと期待してはいけないことは分り切っているが、それでも、わたしは書き続けている。どっちみち、これは欲求不満のはけ口なのだ。それで、誤ってこれを読み始めてしまった人こそ、いい迷惑である。しかし、せっかくここまで、付き合って下さったのですから、ついでに、もうすこしお願い致します。犬も歩けば棒に当る。何かいいことがあるかも知れませんよ。

いつでも、どこでも、だれでもだけでも、教会はかなり変化する。けれども、もう一つ加えたい。わたしは、なんとなく蹴躓きそうになる３拍子の音楽より、安定生のある４拍子の方が好きだから、ここでも、いつでも、どこでも、だれでもの三つにもう一つ加えて、４拍子にし

たい。

それは、「なんでも」である。伝道のためには何でもする。当り前のことで、なんにも声を荒立て、大上段にふりかぶるようなものではない。ところが、実際にこれを真面目に考えると、とんでもないことになる。現在の教会はどのような方法で伝道しているか。まず９５％は説教によってである。映画伝道だの音楽伝道というのは、わたしがここで言う伝道とは少々違う。わたしがここで言う伝道とは、福音の中身をはっきり伝達することを含んでいる。映画も音楽もエンターテイメントであるからほとんど伝道ではない。聞いて欲しい「魅力のない」説教を聞いてもらうための、人集め手段である。釣り針が中に隠された餌である。下手な釣り人の撒餌である。アンコウの提灯である。

教会は、会堂に人を集めなければ説教を聞いてもらえないために、なんとしてでも人を集めようとし、いろいろなエンターテイメントを考え出す。そして人を招く以上、招くに恥ずかしくない歓迎、歓待をしなければならない。それは、劇場や、料亭や、ダンスホールや、パーティや、娯楽施設がする以上のものでなくてはいけない。いやはや、その苦労たるは涙ぐましく、かかる金もばかにならない。これもそれも、みんな説教を聞いて貰いたいからである。

教会は、説教以外の方法で福音をコミュニケートしようとしていない。百年一日の如く説教をくり返している。説教という方法はそれほど大切で、キリスト教とは切っても切れない関係にあるのか。福音というものは、説教によって伝えられなければ、福音ではなくなるのか。いったい牧師、伝道者たちの中に、説教の伝達手段としての効果、ということを考えたことのある人はどのくらいいるだろう。どれほど真剣に考察したことがあるだろうか。

教育学なんて難しい学問を修めるまでもなく、日曜学校での教え方のさわりを嘗ただけでも、「お話法」というのが、いかに効果の少ないものであるかが、はっきり述べられている。「講義」という教授法は最も安易ではあるが、伝達効果が低く、多用してはならないことくらいは、学校の先生ならだれでも知っている。

それでも、「講義」というのは、「説教」に比べればまだ良い。講義は、大体同じ興味と同じ目的、同じレベルの理解力を持った者が、講義ノートを追い、帳面に書き取りながら進める。たいていの場合は質問のやりとりも許されている。講義者は伝達したいことの的を絞り、レベルを定め、質疑応答などによって確かな手応えを感じながら、仕事を進めることができる。簡単な仕事だ。

ところが説教はどうだ。説教者というのは「物凄い」能力の持ち主である。聴衆の中には３才の子供もいる。８３才のお年寄りもいる。創世記とソウセージを間違う人から、生きたコンコルダンスなんて便利な信徒までいる。こちらには牧師が一言説教を始めると、それだけて説教内容のすべてが分かってしまう、年期の入った者、もうこの世に思い残すことはなく、ただただひたすら、「み国に召される日」を待ち焦がれている「聖徒」がいれば、向こうには、罪意識にさいなまれながら、未信者の青年と付き合って、婚前交渉をせまられて悩んでいる姉妹。

単身赴任の孤独さに悪戦苦闘している中年の兄弟もいる。 これら全員をひっくるめて、一週間に一つの説教で見事にまとめて面倒を見てしまうのである。腹痛も頭痛もマラリヤもアメーバ性赤痢も、みんなまとめて歯磨粉で治療してしまったという、大日本帝国陸軍軍医殿も顔負けだ。ところが、歯磨粉で本当に病気が治ったという。そういえば、牧師の顔さえ見れば慰められて、悩みも無くなるという誠に有り難い信徒もいないわけでもないわけで・・・・・・・。

わたしの先輩が話してくれた。礼拝の後、初めて出席した中年の女性がやって来て、「先生。今日は本当に素晴らしいお説教を、有り難うございます」と挨拶をした。説教中、彼女が感銘し切ったように、じっと聞き入っているのに気が付いていた牧師は、よせばいいのに、つい持ち前の熱心さで尋ねてしまった。「どこがよかったですか」「ええ。 先生は始めから終わりまでずっとニコニコとしておいででしたので、もう、胸のもやもやがすっかり晴れた心地です」。この牧師は、なぜかいつも「ニコニコ」しかできず、あるときは「にやけている」と言われ、別のときには、「真面目に他人の話を聞いていない」と言われ、悩んでいたのだ。「にこにこ」が役立って良かったが、このとき彼は、罪と裁きについて説教したのである。

教会には、悩みを解決してもらうために来る信徒たちがいて、彼らは、ちゃんと悩みを解決して貰う心備えをして来るから、牧師の説教内容にはまったくかかわりなく、ちゃんと悩みを解決して貰って帰る。

もしも、講義という伝達方法はあまり効果がないと言うなら、説教はもっと効果が少ない。そこで説教者は何とかして聴衆の関心を引こう、印象づけようと、涙ぐましい努力をくり返す。落語調、漫談調、講談調、浪曲調、剣劇調、新派調、新国劇調、歌舞伎調そして宝塚調と試して見る。それがだめなら、選挙演説調、幇間調、魚市場調、バナナの叩き売り調。

日本語では、「説教」と「伝道」がはっきり区別されていて混乱はないが、英語ではどちらも「プリーチ」という言葉で表現されることが多く、英語に慣れない人には面倒臭い。聖書で言う「み言葉を宣べ伝える」という行為は、絶対に「説教する」という行為と同じではない。プリーチなる英語の深い意味は知らないが、普通は何となく、「語りっ放し」という感じがする。「宣べ伝える」という日本語には、・・・・二つの異なった意味の動詞をつなぎ合わせて、一つの動詞として使うという日本語の特徴がうまく出て、「語りっ放し」ではなく「伝達」するという行為が含まれている。どちらが原語に近い訳かというと、多分英語で、日本語には「読み込み」がある。しかし、もしキリストが日本語で語ったならば、福音を「語れ」「述べよ」「宣言せよ」とは言わず、「語り伝えよ」「宣べ伝えよ」とおっしゃったのではないかと、勝手に想像している。

日本の方々の間でもなかなか人気のある、ジョン・ストットによれば、伝道とは福音を「宣言する」行為そのものであり、それ以上ではないそうだから、それが「伝えられた」かどうか、つまり、コミュニケートされているかどうかには、あまり気を使わなくても良くなる。聞く者が理解していようがいまいが、受け入れようが拒もうが、語りたいことを語ればそれで伝道したということになる。これは、伝統的「説教」にはうってつけの神学である。聖書で教えてい

る伝道とは、単に福音を語るという行為だけではない。ストットの意見は、聖書の中に数多くある伝道に関わりのある言葉の中から、たった二つだけ、つまり 「福音」と「宣言」と訳される言葉だけを取り上げ、そこから、伝道とは福音を宣言することであると定義する乱暴なものであって、学者としては行ってはならないことを行っている。

伝道とはまず福音をコミュニケートすることである。 聞いている者がしっかりと理解し、その上で、それを受け入れるか拒絶するか判断すべきである。伝道とは、飢饉に苦しんでいる人達に、栄養食を配るようなものである。ただ飢えている人たちに、栄養食を投げ与えればよいというものではない。彼らがきちっと間違いなく受け取ることができるように、一つひとつ手から手へ渡していくべきである。それだけではなく、栄養食がどんなに良いものか教え、食べ方を示し、食べ過ぎないように注意し、食べるのを助けて上げなければならない。救援隊が不注意に粉ミルクを配ったために、何も知らない母親たちが無暗に赤ん坊に与えてしまい、随分多くの無駄な死者を出してしまったという悲劇があった。福音は理解できるように、そして、受け入れられるように語らねばならない。断っておくが、わたしは福音そのものが持っている「躓かせる」性質を取り除けと言っているのではない。福音に躓く機会を与えよと言っているのである。

人々は日曜日だけ、教会堂だけ、牧師だけという伝道に躓いてしまって、福音を聞く機会がない。だから、福音に躓くことはできない。日曜日に躓かなかった人は教会堂に躓き、教会堂に躓かなかったは牧師に躓き、牧師にも躓かなかった人も、ここに来て、説教に躓いてしまって、福音に躓く機会がなくなるのである。せめて、福音そのものに躓かせるような伝道をすべきである。

プロテスタント教会の多くは、説教をとてもとても「物凄く」大切なものとしている。たいていの教会は会堂前方の中心に講壇を備えつける。これは儀式中心のカトリック教会が、聖餐台を中心に持ってくるのに対して､神様の言葉の象徴である講壇を真ん中に持ってくることで、聖書中心主義のプロテスタントの、面目を示しているのである。

当時の腐敗したカトリック教会に対して、神様の言葉、聖書をもって立ち上がったプロテスタントの先覚者たちが、説教を大切にしたのは当然であり、歴史的必然性がある。彼らは聖書をもって戦い、聖書を持って信徒を養った。ところが、その肝心の聖書はとても少なかった。この頃印刷機が発明され、最初に聖書が印刷されたのは事実であるが、とても一般大衆が手にすることができるほどではなかった。文字どおり聖書は講壇に「鎖で繋がれていた」のである。その上、読み書きできる者がとても少なかった。このような状態にあって、一般大衆が聖書に接することが出来たのは、休日であった日曜日に教会堂に出かけて行き､「聖職者」によって説き明かされる「聖書」の言葉に、耳を傾けることによってだけであった。

従って、この様な伝統の中では、当然、より忠実な神の言葉の解釈に立つ、講解説教が力説されてきた。ところがこの講解説教という奴が曲者で、ちょっとでも油断すると、最も難解で味気無く、忠実な信徒には眠り薬の代わりになり、初心者には、スカンクの屁の如くとても近

付けない代物になる。

わたしは説教の大切さを信じていた。特に講解説教の上位性を疑っていなかった。だから、初期の説教はもっぱら講解説教であった。説教学的に見ると当時のわたしの説教は、現在のものよりずっと立派である。なぜなら、わたしはこのところ２０年ほど、説教を真面目に作ったことがないからだ。妻は、わたしが説教を捻り出そうと、机に向かっているところを見たことがない。わたしは、説教不振に陥り、次いで、説教不信に陥ったからである。もちろん、現在わたしは５０ほどの開拓、準開拓の責任を持っているために、しょっちゅう「説教」に呼ばれる。周囲の教会からも招かれる。しかし、わたしはできる限り説教をしないことにしている。かわりに、わたしはお喋りをする。信徒たちと会話をする。当然、人数が少ないないほうが楽しい。たとえ、５００人いても、やっぱり基本的には、一人の人に話す気持ちで話している。だからついつい聞いている者は質問をし、わたしはそれに答える。わたしも質問する。答えが返ってくる。

民家や野外で集会をする場合が多いので、講壇はない。わたしと聞いている人の間には余計な隔てがないのである。わたしは、主題、内容、構成、レトリックなどに重点を置いて、聞く者を忘れる傾向にある説教より、聞いている人に注意を向け、彼らに分かるように、彼らの必要に答えることができるように、彼らのレベルと生活と文化に順応させた話をするように、つまり、福音を「伝達」出来るように心がける。初めての場所、初めての教会に呼ばれたような場合は、数時間早めに出かけ、車で町中を回って見る。その後、車を降りて自分の足であちこちを見て回る。たいていは市場に入って見る。そして町の様子、人々の様子を知る。できれば何人かの人たちと立ち話をする。それから教会堂に行き、信徒たちとお喋りをする。そして、牧師や奥さんと話し合う。集会が始まり、歌があり、証があり、祈りの要請がある。みんな、わたしの話の主題と内容と傾向とレベルを決めるのに、大切な情報である。わたしの場合、話し始めてから話の主題などすべてが決まることが多い。

わたしは、他の牧師、伝道者に、同じようにせよなどと言うつもりはない。ただ、これが説教不信に陥ったわたしの伝道方法、福音のコミュニケーションの方法である。いまのところ、案外うまく行っている。英語で説教学のことを「ホムレティクス」というが、これはもともと「ホミリー」というギリシヤ語からきたもので、その意味は 「会話」ということだそうだ。

宗教改革時代に「説教」がいかに大切であったかは明白である。しかし、現在はそれから５世紀近くもたっている。状況は変わった。昔はだれも持っていなかった聖書も、今は誰でも持っている。ちょっとした信徒なら５冊くらい持っている。日本などではほとんどの者が自分で聖書を読める。ほんのちょっぴり工夫するだけで、信徒は聖書を読み勉強する機会を、たくさん持つことができる。教会がそのような機会を積極的に作り出せば、講解説教なんて必要がなくなる。信徒たちが他に聖書を読み学ぶ機会があれば、礼拝会の説教はすべからく題目説教でよい。短いのがよい。長くて１５分。しち面倒臭い原語だの釈義だのを忘れて、力強い励まし、血の通った慰め、明確な幻の提示、激しい悔い改めの勧めであるべきだ。すると、時間が余る。その分、もっと礼拝の賛美、祈り、交わりの時間を長くできる。

わたしは説教をするのも嫌いだが、説教を聞くのはもっと嫌いな、不埒な人間である。よっぽどダイナミックな説教だったり、落語か漫才のような説教だったりしたら話は別だが、たいていは眠くなる。わたしは、活発な性格では無いが、説教の間の退屈さはたまらない。初めて教会に行ったときは、アメリカの婦人宣教師が「上げられたの蛇の・・・」と、説教していた。たっぷり１時間以上、ほころびた畳の上のペチヤンコの座布団の上で、わたしは教会なんぞに顔を出したことを後悔し続けた。ふと見ると、座布団の四隅の小さな房のようなとじ糸に、幾つも固い結び目がついている。隣の座布団も同じである。説教にすっかり退屈し切った女性たちの手が、思わず知らずの内に成し遂げた仕業に違いない。わたしが救われたのは説教を通してではない。

「まともな男が１時間も、他人の話をじっとかしこまって聞いていられるかってんだよ」。なんぞと言いながら、奥さんと子供を車で教会に送り迎えする間、自分はパチンコに行っているご主人も珍しくない。いつぞやなんぞは、自分は教会の前に駐車させた車の中で、タバコを１１本半もふかしながら、じっと奥さんが教会堂から出て来るのを待ち続けているという、誠に驚くべき愛妻家、忠実な「ご囚人」にお目にかかった。 話して見てさらに驚き、呆れ、感心し、感嘆し、感動した。もう少しで感涙しそうになった。毎週、もう一年以上、同じことをくり返しているのだそうだ。「中に入って休まれたほうが楽ではないですか」と尋ねると、「いやぁー。説教が苦手でしてね」と来て、話がはずんだ。 結局、それから奥さんが出てくるまで、おおよそ３０分も、キリストについて、信仰のあり方について話し合ったのである。彼も筋金入りの説教嫌いだ。しかしキリストが嫌いなのではない。

わたしたちの教会の多くは、女性の数が圧倒的に多くて困っている。正しくは女性が多くて困っているのではない。男性が少なくで、自分は生涯独身で過ごすのが 「み心」なのだと、無理やりに信じさせられている女性が多くて、困っているのである。少なくても、その理由の一端は「ひたすら説教主義」の、教会の形態にある。

私は心理学者ではないので、確信を持って言えることではないが、女性の方が男性よりも宗教的であるとは思っていない。ただ、女性と男性では宗教意識の深さとでも言うべきものが違うように考える。人間の生活一切に関わる意識の中で、女性の場合、宗教意識はかなり表層に近いところにあり、男性の場合はかなり深いところにある。あるいは、男性の場合は、宗教的感覚が様々な日常の生活に関わる事柄に、覆い隠されているとでも言ったほうがよいかも知れない。女性の場合、宗教感覚はかなりむき出しになっている。したがって、たいていの宗教団体は男性信徒より女性信徒を多く抱えている。とくに大概のキリスト教会は、個人生活の奥深くまで到達する、生活感のある、日常の問題の中での伝道ができていない。恐ろしく実生活から遊離した学問的伝道であったり、毎日の暮らしから遊離した、礼拝会という作り上げられた特殊な宗教的雰囲気の中での伝道だったりする。

「説教」と言う方法は、この傾向に拍車をかける。説教は大部分の人たちにとって、世知辛い浮き世の現実とは関係がない、「我慢すべき宗教儀式」の一つに過ぎない。坊さんのあげる「お

経」はどんなに深遠な教えだとしても、現代人に取っては「我慢すべき宗教義務」であるのとたいした変わりはない。このような伝道法では、男性の宗教意識に到達できない。上っ面を引っ掻くだけである。

わたしたち牧師伝道者が、命の次に大事にしている説教というものは、いったいどこから出てきたものだろうか。たしかに聖書の中にも、それらしいものがあることはある。会堂で行われた聖書の解き明しなどは、その良い例であろう。しかしキリストの説教も弟子たちの説教も、どこか現代の説教とは違っている。それらは現代の説教のように、何時間もかけて、説教学的に準備したものではなく、その場その場の状況に応じて即興的に語られたものである。つまり、そこには語った対象の多少にかかわらず、「会話」の要素があった。「説教」のような一方通行の語りっ放しではなく、両方通行の受け答え、やりとりがあったのである。当時の説教はまさしく「ホミリー」、会話の延長であったのだ。

説教が、現代のように、聞いてくれる大衆がいるということを前提とした、雄弁術と化したのは、どうも、キリスト教がローマの国教となり、日曜日が休日と定められ、国家の威厳を笠に着た大会堂が建てられ、人々が真実のクリスチャンであるかどうかに関わりなく、単にそうすることが様々な意味で有利な為に、教会堂に大挙して集まって来た時に始まるようである。つまり本来の意味の伝道と礼拝が、犠牲にされてしまったところから発生した、悪しき伝統である。

大会堂から離れた、家の教会を夢見ながら果たせなかったルターは、あるいはもっと「会話」的な説教を考えていたかもしれない。ルター、カルビン、ツィングリなどの宗教改革の巨人たちが、幾つかの点で真実に聖書的になり得なかったのに対し、あらゆる点で徹底的に聖書的であろうとしたのは、アナバプテストの人たちであった。少々軌道を外した少数の者があったが、彼らこそキリスト教の歴史の中で、徹頭徹尾聖書的であろうとした数少ない人たちである。徹頭徹尾聖書的であることを嫌う多くの伝統的教会、あるいは伝統の神学を持つ人々は、彼らを「ラディカル」「極端主義者」として葬り去ろうとするが、真に聖書的であろうとする人はだれでも、彼らを模範とすべきである。現代のわたしたちの教会で当然のように信じ受け入れられている、明確な改心による救い、明確な救いを体験した者だけによって構成される教会、信教と国家の分離などは、改心に続く「浸礼」と共に、この人たちが残してくれた大切な遺産である。そして彼らの間では「会話」的説教が多く用いられた。

実のところ、彼らこそいつでも、どこでも、だれでも、なんでもをある程度実践した人たちである。ところが、彼らは聖書的であったが故に、キリスト教の歴史の中で最も激しい迫害を経験した。しかも迫害のほとんどは、カトリック、ルター派、カルビン派、ツイングリ派、そして、アングリカン等の、キリスト教会のものであった。彼らが迫害を逃れてアメリカに渡ってからは、どういうわけか小さな共同体主義に陥って、宣教の面ではあまり取り上げるべきことがないのは残念であるが、最近に至って、彼らの中に、彼ら本来の性質を取り戻そうという動きがある。わたしは、個人的に大いに期待している。また、彼らの中には日本で働いている団体も幾つかあるが、北海道東部で苦労を重ねている、小さな群れに興味が引かれる。

こんなことを言っているわたしも、アナバプテストが通った迫害のミ二現代版、現代魔女狩りを「ある程度」予想している。それでも言わなければならない。教会、キリストの体である教会には、ラディカルな部分も絶対に必要である。動脈硬化に陥らないために暴れ回る。それがわたしの役割である。

わたしの言うことはラディカルである。それは現代の教会にたいしてラディカルなのであって、聖書に照らし合わせると、ことごとく保守的である。聖書について保守的であろうとすると、現代の教会に対してラディカルにならざるを得ないのである。わたしはこの小文でわたしが言おうとしていることを、たとえば、礼拝出席5千人ほどでもたもたしている、わたしの属している団体が、真剣に受け止め実践するなら、１０年後には２万人くらいにはなることを少しも疑っていない。その後の１０年で５万人ほどにはなるであろう。

わたしは決して雲をつかむような話をしているのではない。何の具体的方策も持たず、１千万救霊と騒いでいる、福音派の「はったり屋」さんたちとは趣が違うのだ。かと言って、韓国のペンテコステ派の先生がおっしやる、「日本人１千万救霊」ほどの超人性もない。

ところで、「イエスの御霊教団」という団体の急激な成長について、ご存知だろうか。大多数の教会はこの団体とは何の関わりを持ちたがらないし、この団体もまた他の教会と交渉を持ちたいと思ってはいないように見えるが、わたしは、個人的にここ１５年ほどずっと注目し続けている。この教会が「異端」であるかどうかという細かい議論は、いずれの機会に譲るが、この程度の「異端性」を持ったペンテコステ派や、カリスマ派の教会は世界各地にある。

ずっと日本を離れ、いずれはもっと真面目に調査したいと思っていながら、まだ果たせずにいる状態なので、絶対の確信をもって言えることではないが、この団体には、方法論として学ぶべき点がある。手元にある資料によるとこの団体は１９４１年に創立されている。創立者の村井監督は、かつてはわたしの属する団体の、創成期に活躍なさった方たちと、協力して働いていた。しかし、死者のために洗礼を授けるとか、異言を伴う聖霊のバプテスマを受けなければ救われないとか、あるいは、三位一体についての考えがはっきりしないとかいう問題があって、袂を分かったらしい。だから、わたしたちの団体の方々は相手にしない。と言うか、「触らぬ神に祟りなし」の態度を取っている。キリスト教界に認められたいと必死のわたしたちの団体が、この様な 「うさん臭い」団体と付き合っては、良いことがないからだ・・・ ・・ とわたしは勝手に解釈している。しかしね。伝統的、正統的キリスト教会と自他共に認めている教会だって、随分陳腐な神学、聖書神学が発達していなかった頃の誤った神学を、伝統として後生大事に・・・失礼・・・・抱え込んでいますよね。イエスの御霊教団のはなはだおかしな神学にしても、カトリックのマリヤの神学とか行いの神学とか、祭司の神学に比べたら、まったく小さな問題だ。前述したストットさんなど、現在の世界の福音派の代表的神学者らしいけれど、一所懸命カトリックと手を繋ぐ努力をしているではありませんか。もう繋いだんでしたっけ? プロテスタント神学の中核を担うと、自他共に認める人たちの、ウエストミンスター信仰告白を聖書以上に大切にする態度だって、充分に「反聖書的」ですよね。

そこで・・・・話を半分元に戻して・・・・・イエスの御霊教団は、１９６５年にはすでに２８，０００人の会員を有し、プロテスタントでは3番目に大きな団体となっている。１９７６年には会員８５，６６９人で、日本キリスト教団に次ぐ、第2位。 １９８６年には３７６，６１８人で、日本キリスト教団のおおよそ2倍近い会員を有するまで成長し、いまにもカトリック教会を追い抜く勢いだが、たぶん、この文を書いている現在１９８８年末には、すでに追い越しているかもしれない。(ただし、イエスの御霊教団の会員というのが、わたしたちの信徒の数え方とはずいぶん違うために、この数字を鵜呑みにすることはできない。彼らは死者のための洗礼なるものを実行し、それをも会員人数に加えているらしい。だから、この数は半分以下、あるいは5分の1くらい、もしかすると、１０分の1に見積もるべきかもしれない)

わたしたちは、しばしば、お隣の韓国の世界一大きな教会の話をする。何の因果か・・・・またいけない言葉・・・・・・その教会がわたしたちと同じ交わりに属しているため、なんとなく、誇りをもって話す。ただ、その教会が１９８６年の段階で６０万人だとかの会員を持っていたとしても、イエスの御霊教団の成長に比べると、(たとえ彼らの実数が発表の１０分の1の４万人弱としてみても・・・・）少々、色あせて来る。韓国では昔からキリスト教が強い。ことにここ２０年ほどの間に、国民の１０％前後だったクリスチャン人口が２５%を越え、３０％に近付こうとしている。その様なキリスト教界全体の急激な成長という環境の中での６０万人と、人口比１％前後の日本、ご存知の日本での３万人以上である。

宣教学的にとても面白いのは、イエスの御霊教団が人材経済の両面で、外国の援助をほとんど、多分まったく受けずに来た純粋に近い土着教会、「日本人による日本人のための日本人の教会」であるということである。土着教会に一般的に見られる弱点、シンクレティズムの傾向がここにもあるが、その強みは充分に発揮されている。シンクレティズムの傾向、ここでは死者に洗礼を授けることが、日本の精神風土とも合致して、伝道に有利に働いていることは想像に難くないが、彼らの成長の本当のというか、より大きな秘訣は他にある。それが、今わたしが言おうとしている、いつでも、どこでも、だれでも、なんでもの伝道である。

彼らは、わたしが主強しているほどには徹底はしていなかったが、この、いつでも、どこでも、だれでも、なんでもの、「でも伝道」をかなり忠実に実践して来た人たちである。滅多に教会堂らしき物を持たず、大概の活動は 「家」で間に合わせ、聖書学校の代わりにわずか3ヶ月の訓糠で用を足し (現在もそうなのか、最近の事は知らないが、かつてはそうであった)、ヤレ、大伝道会だ、クルセードだと喧しく騒ぎ立てず、静かに注目を避け、「立派に」やっている。同じ頃に伝道を開始したわたしたちの団体は、アメリカ、イギリス、カナダ、オーストラリアからの多くの宣教師と多大の資金援助を受け、3年制の聖書学校も設立し (現在は4年)、教会堂も建て、チラシを配り、プラカードをおっ立て、ラッパを吹き鳴らし、大鼓をぶっ叩き、ラジオに乗りだしテレビに進入し、華々しく賑やかに伝道をしてきた。わたしの先輩には博士だって何人もいる。そして全信徒数1万人に少し足らず、活会員はそのうちの6割あれば御の字。

ところが上には上がいる。いつでも、どこでも、だれでも、なんでもをもっと徹底させて（わ

たしが主張するほどではないが）もっと急激に成長している団体は、ご存知工ホバの証人である。彼らはイエスの御霊教団とは対照的に、徹頭徹尾１２８％バター臭い輸入品の神学と実践で、あそこまでやっている。文化人類学だの社会学だのを学んで、日本人の精神風土と信仰などという、しち面倒臭くもややっこしいことを考えながら伝道することも、大いに大切だ。その辺は宣教師としてのわたしの領分だ。しかし、教会のあり方のほうがもっともっと大切なのが、この例で良くわかる。ただし、彼らのは伝道というより、洗脳であって、わたしが今言おうとしている伝道と、単純に並べることはできない。ただ、わたしの言いたいことは、日本の伝道は可能だ、しかも、大いに可能だということだ。ところが今の教会のあり方では、絶対に、もうひとつ大きくおまけに**絶対に**、不可能だということだ。

さて、脱線に脱線をくり返し、すっかり話が見えなくなった。元に戻ろう。「説教」の話であった。とにかく福音の伝達手段、コミュニヶーションの方法としての説教は、恐ろしく非効果的である。

バラトック教会では、しばらくの間、ふつうの教会のような集会と、説教による伝道も試みていた。そこで明確になったことは、説教によって救われ育てられた信徒の信仰の成長は、家庭などで持たれた、話し合いを中心にした小さな集会て救われ、育てられた者の信仰の成長に比べると、とても遅いということである。実は 「説教こそ唯一」の教育を受け、説教の力を盲信していた牧師たちが「回心」したのは、この事実をまのあたりにしたからである。

わたしたちの教会には栄養失調、成長不良、万年赤ん坊の信徒がたくさんいる。１０年２０年３０年の信徒なのに、何にも分かっていない。３ヶ月のエホバの証人にやりこめられ、２ヶ月の統一教会の「食口」に遅れを取るなんてのは、毎度の事である。なぜか？ なぜか？ なぜか？　牧師が説教ばかりしているからである。聖書を自分で読む事を教えていないからである。自分で理解する努力を教えていないからである。みんなが一緒に集まって聖書を読み、祈りの内に話し合って、意見を交換するところに、聖霊が働いてくださることを知らないからである。あてずっぽうな説教では、信徒の必要と水準に合わせることは不可能である。「今朝祈っている時に聖霊に示された説教」なんて代物も、信徒一人一人の理解に応じることはできないし、今日明日にもこの世を去ろうという老信徒と、２才の子どもを真ん中に座らせて、幸せ一杯の若い夫婦の必要に、いっぺんに答えることも不可能である。

牧師の説教には「生活」がない。一方的 「思い込み」による押し付けである。こんな 「説教」で信徒がまともに成長するのを期待するより、清涼飲料水で赤ん坊が育つのを夢見るほうがまともである。主題もない。組立てもない。筋道もない。脱線続きの支離滅裂。龍頭蛇尾のごっちや混ぜでも、聖書を中心とした即興的な話し合いには生活があり、神学がある。なによりも聖書を読み、理解しようという心を起こし、それについて語ろうとする信徒を起こす。　説教は間違って調合した食科を、スプーンで与えるようなものである。話し合いは自分で食べ物を調理し、自分で食べることを教えることである。

信徒とは、訓練会だとかセミナーなんぞで育つのではなく、もの真似によって育つものであ

る。それは小さな子どもと同じである。ふつうの赤ん坊であれば、１才にもなれば立って歩こうとする。ところが、周囲に立って歩いている人がいなければ、なかなか立とうとしないそうである。模範がない。つまり、真似をすべき手本がないからである。 信徒たちは充分に伝道し、教会を建て、牧会する能力を持っている。ただ現在のわたしたちの教会には、信徒が自然に真似をできる手本が無いのである。動機付けが無いのである。ほとんどの教会では説教を牧師の専門の役割としているし、信徒に説教させてくれる教会にしても、説教は難しくて、並みの信徒においそれとできるようなものではないことになっている。誰にでも真似ができるといった安っぽいものではないのである。

現代の教会は、赤ん坊は立っては危ない、歩いては危険だ、走っては怪我をする、転んでは大変、おでこをぶっつけては一大事と思い込み、赤ん坊を縛り付けて何もさせないのに似ている。そして５、６才になり、充分に成長したと見て取ってから、立つ訓練と歩く教育をする。 しかも、まず立つことについての講義、歩くことについての平衡感覚と身体各部の構造などと、人体学的に教えることから始める。手遅れである。

そして教会は説教以外の伝道を知らない。だから、ちょっとでも伝道の機会があれば、牧師がお出ましになり、説教をしなければならない。牧師がいなければ伝道ができない。牧師がいなければ何にもできない。牧師がいなければ夜も日も明けない。やれ牧師、それ牧師である。そんなふうに信徒を育てておいて、牧師はというと、「うちの信徒は、何から何まで一切面倒を見てやらなければ、何にもできないから・・・・」なんぞとのたまい、いそいそと、うれしそうに動き回る。自分の子供を、一人で入社試験も受けに行けない腑抜けに育てておいて、「わたしがいなければ、何にもできないんだから」と、幸せそうに面接室までご同伴遊ばす、教育ママと五十歩百歩である。それで、散々忙しくかけずり回って「ああーあ、疲れた」となり、自分の本来の仕事をすっかりうっちゃってしまう。牧師の本来の仕事は説教ではない。教会全体を奉仕の働きができるように、調整することである。説教なんて働きは、牧師よりもっと上手にできる信徒を見つけて、任せれば良い。カウンセリングも任せたらよい。 訪問も任せるに越したことはない。教会が体であるという言い方を真似ると、牧師の働きは神経系統の働きに似ている。頭の命令を体全体に伝え、体全体の様子を把握して痛んでいる所を感じ、病んでいる部分を知り、一つひとつが調和して機能するように働くのである。

☆　　☆　　☆　　☆

さてさて、へらず口、憎まれ口を叩くのにもいささか疲れ、顎があがり気味になって来たところに、また、クーデター騒ぎとあいなった。こうひっきりなしにくり返されたのでは、こっちだって慣れっこになって、ちっとも興奮できない。車で聞くラジオの実況放送では、タタタタタタ、タタタタタタッ、という機銃の音、ズズズズという重火器の音、そして、ときたま至近矩離に着弾したバリバリンという音と、逃げ惑うレポーターの悲鳴が聞こえて来たが、帰宅して観るテレビには、テニスの試合と歌謡番粗が流れている。まだマルコス政権の統制は、

なんとか続いているらしい。１９８６年１２月３日、クー第４日目である。

教団理事長から電話がかかってきた。「え？！　日本から？」　電話は最近設置されたのだが、同じ市内にかけてもなかなか通じなくて、「電話は出んわ」などと駄洒落を飛ばしていた。そこに、こともあろうに雲上人の教団理事長から国際電話がかかってきた。「外務省が、フィリピンにいる日本人は、クーデターに巻き込まれないように、ホテル日航に集まるようにという通達を出したけれど、だいじょうぶ？」心配そうな理事長の声。

冗談じゃない。ここは田舎。クーなんぞどこ吹く風。第一、ここからホテル日航に行くには少なくても８時間はかけて、戦車が走り回り、機銃が乱射されているフィリピン軍司令部のまん前を通らなければならない。「ご心配ありがとうございます。こちらは平穏無事ですから、ご心配なく・・・・」何度も頭を下げて受話器をおろす。そして考えた。なんで、電話で頭をさげなきゃならないんだ・・・・・。まだわたしは立派な日本人だ。

クーデターは横において・・・・本題にもどろう。わたしは、わたしの主張している事を取り入れれば、日本の教会は「物凄い」成長をすると言ったが、ここでも自分は理論的に安全圏にいる。大体、今の日本には立派な牧師伝道者がたくさんおられるから、わたしのような名も無く貧しく薄汚い伝道者の言うことをまともに聞いて、それを実践してみようなどという奇特で、風流で、軽率な教会はまず存在しないのである。 誰もこれを試してみるものがない。だから、わたしの言っていることが間違っているという、実際的証明は不可能ある。これに対して、たいした具体的な案も示さず、祈りだとか、きよめだとか、はったりで1千万人救霊を言っている人たちは、・・・・・・何年後のことかは知らないが・・・ ・自分たちの間違いを認めることになる。・・・・と思うのは間違い。なかなかどうして、この方たちも相当しぶとい。そう簡単に自分の間違いを認めはしない。いつぞやどこかで開催された福音派の世界的会議で、この同じ人たちが千九百ウン十年までに、日本の福音派から「スン百人」だったかの海外宣教師を送り出すと宣言し、誓約書みたいなものまで発表していながら、それがまったくの夢物語に終わっても知らん顔で、というよりむしろ大きな顔をしておられるのだから、たとえ、1千万人救霊がはたせなくても「蛙の面に何とか」だ。わたしもその面の皮にあやかっている。それが信仰というものらしいから。

わたしのようなろくでもなしの言うことに、「まともにお怒りになった方」は、腹立ち紛れで良いから、わたしの言う「でも伝道」を試してご覧になるが良い。うまく行かなかったら、あなたの責任。うまく行って、３年間に４５人の活会員が１５０人になったら・・・・・こちらのほうが、確率が高そうだ・・・・わたしの自慢の種。第一の話からして、現在の教会のあり方で、４５人もの活会員を持つ教会の牧師なんて、それは、もう本当に大変な能力と、物凄い努力との結果ですよ。それだけの能力に努力を加えたら、１５０人は軽い、わたしのような者が現在の教会のあり方で牧会していたら、どう転んだところで２５人。中央都市でですよ。地方都市なら１５人が精一杯。

現在の日本には、クリスチャンになっても良いと思っている人がたくさんいる。ＮＨＫの調

査では国民の３６％。ある有名なイギリスの調査機関によると、日本のクリスチャン人口は、国民の４０％だそうだ。驚いてはいけない。もしも、ドイツ国民の殆どがクリスチャンだと言うなら、それと同じ標準で日本人の４０％はクリスチャンだということだ。ところが、本物のクリスチャンは０．３％もいないだろう。

教会が日曜日以外には福音を語っていないため、９０％を失い、教会堂以外では福音を語っていないため、更に９０％を失い、牧師しか福音を語っていないため、更に更に９０％を失い、そして、説教と言う方法でしか福音を語っていないため、その上更に９０％を失っている。結局、教会はこれだけで、９９．９９％を失っている。１万分の１しか獲得できないのだ。しかも、これはとても甘い計算である。救われる可能性のある人は、アブラハムが数え切れなかった夜空の星の数ほどいる。しかし、現在の教会の形態と伝道で救われる者は、まさに暁天の星より少なくなる。

「伝道を成功させる絶対必要条件」

ここでちょっと受け売りをしたい。フィリピンに「地方改革運動」という民衆運動があって、なかなか良い働きをしている。この運動の指導者の一人であるお医者さんが、長年の体験を通して、地方運動を成功させるための絶対必要条件として、四つのことを挙げておられた。

1. 経済的であること。すなわち金がかからないこと。
2. 容易であること。すなわち誰にでもできること。
3. 適応性に優れていること。すなわちどんな条件下でもやれること。
4. 増殖性に優れていること。（再生産性といったほうが良いかもしれない）すなわち次から次へと増えていくこと。

これはなかなかどうして立派な考えである。多分このお医者さんは謙遜して「地方運動」と言ったのだろう。これは民衆運動として、都会にもそのまま通じるものである。

※※※※　経済的であること　※※※※

この四つの点から現在のわたしたちの伝道を見ると、残念ながらわたしたちの伝道は絶対に成功しない。 まず、わたしたちの伝道は恐怖を感じるくらい金がかかる。教会堂と土地、牧師伝道者の給料、聖書学校の運営と学生のサポート、そして通常の教会運営。それに加えて、わたしのような宣教師が、頼まれもしないのに押しかけて来て、献金を巻き上げて行く。かと思うと、繁栄の福音に都合良くかぶれてしまった牧師は、何でも一流の物でなくては我慢ができなくなって、ますます費用がかさむ。忠実な信徒は泣く子と牧師には勝てない。クリスチャンになるということは、おっかない神様の名のもとに、遮二無二金を脅し取られ、だまし取られ、なだめ取られ、すかし取られることである。

あるレポートによると、一人のクリスチャンの献金額は、新興宗教の信徒の一家族の献金総額の１００倍ほどになるという。それでも、わが同労者たちは金が無いことにいつも頭を痛めている。痛んだ頭で考えるから、金さえあれば伝道できる、伝道できないのは金が無いせいだと思い込む。ところがどうだ、新約聖書には伝道に関して金の問題は一切出てこない。少なくても聖書を読むかぎり、伝道と金は全く関わりがないのである。金が無かったから伝道ができなかったという話も、金が有ったから伝道ができたという報告も出てこない。教会堂建設にウン千万円ささげたという英雄も出てこない。

現代の伝道は経費を軽くしない限り、絶対に成功しない。経費の最もかかるのが牧師伝道者の給料と会堂である。そして伝道者の育成である。これを何とかしなければならない。わたしの提唱する「でも伝道」は、これをかなりの割合で解決する。

※※※※　容易であること　※※※※

次に容易であることだが、現代の伝道はことさらに専門化され、高水準を求められるようになっている。牧師伝道者になるためには、たいてい、大学卒業後少なくても３年くらいの聖書と神学の訓糠を要求される。大学を出なかった牧師は、いつまでも、自分の伝道に力がないのは教育が無い為だと思い続けることになる。牧師は心理学を修め、カウンセリングにたけ、旧約神学、新約神学に通じ、政治経済にも深い洞察を持ち、ギリシヤ語で夢を見、ヘブル語で寝言を言うくらいにならなければやっていけない。それに加えてクリソストムの向こうを張るくらいの、雄弁術を身に付けていなければおさまらない。とても、そんじょそこらの 「平信徒」なんぞにできっこない。「お召し」がなければ勤まりませんよ。

会堂建築の難しさ、牧会の難しさ、伝道の難しさ。やってみたことのない人にはわかりませんよね。わたしもその難しさに閉口し、落胆し、失望した。そしてその難しさを、訓練なんぞで乗り越えようなどと言う、健気な気持ちにもなれなかったために、なんとかして難しいものを易しくしようと考えたわけだ。だから、「でも伝道」は易しいということを前提としている。

もう一度断っておきたいのだが、わたしは高度な教育と訓練を受けた牧師伝道者、あるいは神学者は不必要だと言っているのではない。猫も杓子もそうなる必要はないと言っているだけである。ごくごく当り前の人間で、はっきりした神体験を持つものなら、５人１０人に伝道し、そのグループの面倒をみることができる。そしてその上にもう少しだけ訓練を受けた者がいて、折々の指導をすれば良い。それから、何十人あるはい何百人ものそういう人たちの上に、しっかりした訓禰を受けた伝道者が一人いればそれで良い。博士なんぞ１万人に１人いればそれで良い。

現在の日本の伝道は確かに難しい。しかし イエスの御霊教団の例でも明確なように、日本の伝道自体、伝道そのものがそこまで難しいのではない。本来易しいものを、わたしたちが勝手に難しくして、難しい難しいと悩んでいるのである。自分たちで伝道者の水準なる巨大な幽霊

を作り上げ、それを恐れている。自分たちで教会堂の必要性なる、有りもしない化け物を作り上げておいて、おののいている。日曜日だけなんぞと言う規定を作り上げ、それに縛られている。 説教という象牙の塔を築きあげ、誰も登れなくしている。自分で自分の首を絞めている。自分の作った落とし穴に落ち込んでいる。

何とか言う横綱が引退して、プロレスラーになった。燃える四十男だそうだ。ところで、彼が本場アメリカでやった試合の、ビデオを見て思った。この、かつての人気横綱は、レスラーとしてはまだまだ青く、相撲の型、相撲の動き、相撲の技、相撲のルールに縛られて、殴っても蹴っても、引っ掻いても噛み付いても、椅子で叩きつけても良いプロレスには、とてもついて行けないでいる。彼はまだ、相撲という自分のルールに拘束されているのだ。勝敗は目に見えている。プロレスはスポーツとしてはまったくの八百長で、始めから仕組まれたシナリオに従って、お客さんに最も喜んでもらえるように、大いに見せ場を作ってある。言うならば、現代アメリカのショー・ビジネス、エンターテイメントの最たる物で、そのような目で見るとなかなか実に面白い。 だから、必ずしも強い者が勝つわけではないが、やはり、基本的に強さによってランクがあるようで、わが横網殿はまだまだランク入りは果たせない。わたしたちの教会は、自分たちがせっせと作り上げたルール、制約、技に閉じこもる相撲取りで、自由奔放、無法地帯のプロレスのこの世界にはとうてい対抗できない。その点、「でも伝道」はこの世の無法のルールに従って、噛みつきもすれば引っ掻きもする。

※※※※　適応性に優れていること　※※※※

そのつぎは適応性だ。現在のわたしたちの教会は、個人主義者の集合にすぎない欧米の教会の真似である。本来、教会は普遍的であり、全世界的なものだ。教会が日本という土壌で自分を表現するときは、日本的な表現をする。わたしたちはそれを妨げ続けて来た。わたしたちは教会そのものを建てる代わりに、教会のアメリカにおける表現を、もっと悪く言うと、多くの場合、アメリカの教会の誤った外形を輸入して、無理やりに日本の教会にしようと試みて来た。

本来全世界的である福音は、もっぱら西欧的生活と哲学で解釈され、発展させられたので、日本人に理解され、受け入れられるように、日本人に食べられるように料理されてはいない。わたしたちが宣べ伝えている福音は、ギリシヤ的論理という鍋の中で、合理主義、理性主義という調味料で、欧米人の舌に合うように調理された福音のおこぼれである。わたしたちの伝家の宝刀の説教は、４世紀以上も前の骨董品、日曜学校は２世紀以上もたった年代物。太鼓をぶっ叩く伝道には１世紀前のかびが生えている。教会堂を建てて、人が集まることを前提とした伝道と教会形成となると、もう１６世紀も前のミイラに等しい。いいかげんにして欲しい。

日本から送ってもらったテープが、今、「埴生の宿は・・・・・」と歌っている。妻に聞いてみた。「おい。『ハニユウ』ってなんだ」 「さあ、何でしょう。食べたことないわ、そんな物」

４０才以下の方でこれを知っている人はたいしたものだ。わたしは４０才以上だからたいしたことはない。あなたは？ わずか数１０年前までは多くの人が知っていた、日本中どこにでも

あったものである。それをもう、殆どの人が知らないのだ。ましてや何世紀もむかしの大昔、しかも外国のものを持ち込んで、わたしたちは何をしようとしているのでしょう？

日本の道路事情と家庭事情に合わないアメリカの車は、徹底的に売れない。日本人の生活と考え方に合わないアメリカ型福音も、絶対に売れ残る。でも、「でも伝道」は適応性に富んでいる。

※※※※　増殖性に優れていること　※※※※

最後は増殖性、再生産性である。伝道が伝道を生み出しているか。教会が教会を生み出しているか。伝道者が伝道者を生み出しているか。牧師が牧師を生み出しているかである。まことに残念ながら、わたしたちの伝道の現状は「否」である。なぜか？

伝道が伝道を生み出す前に大きな障害がある。教会が教会を生み出す前に大きな障害がある。伝道者が伝道者を生み出す前に大きな障害がある。牧師が牧師を生み出す前に大きな障害がある。その**大きな障害**とは何か。聖書学校である。神学校である。特別な教育を受けた者でなければ、伝道の働き、牧会の働きはできないという信仰である。だから、教会はすぐ教会を生み出すことができない。牧師は牧師を生み出す事ができない。何年間も待たねばならない。何百万円も費やさなければならない。都会の学校に送り出すと、若い者は帰って来ない。家族持ちのしっかりした者は送り出せない。「運良く」帰って来ても、都会志向の頭になっていて地方では役に立たない。しかも、みんな学問コンプレックスに陥っていて、確信をもって福音を語ることができない。たま〜に、確信をもって福音を語るものがあるかと思うと、かつてのわたしがそうであったように、世の中の事が何も分かっていないまま、なんでもすべて分り切ったと思い違いして、みょうちきりんな、はなもちならない自信で、生意気な説教をしでかす。

学問が無ければ伝道できない。牧会できないと誰が言い出したのだろう。聖書ではないことは確かである。聖書学校も神学校もあって良い。いや必要だ。しかし、そのような所に行かずとも、もっと簡単に牧師伝道者となることができ、牧師伝道者で居続けることができるようにすべきである。

元来、弟子を造る任務は教会に与えられたものである。教会が弟子を造るべきである。教会が伝道者、牧師を輩出すべきである。聖書学校も神学校も教会ではない。教会がこの大切な任務を再認識して、これに取り組むと、かつてのわたしのような口端の黄色い、尻の青い伝道者ではなく、社会の荒波にもまれ、人生という学校で鍛えられ、家庭という訓練場で叩き上げられた伝道者がたくさん生まれてくる。もっともっと地域の実情と人々の必要を理解し、それらにより効果的に対応できる牧師が多く出現してくる。もっと「生活」のある説教ができる、本物の説教家が現れてくる。そして、それらの中から本当に賜物を持っていることが、実践によって証明された者で、さらに進んだ学びをしたほう良いと判断された者だけが、聖書学校でも神学校でも行くが良い。結局のところ、そのほうがより多くの学生を得ることができる。そのような学生が、現在のような形での学生より、あらゆる面で優れていることは容易に期侍でき

る。

だいたい、学校というところは学生を造り学者を養成するが、弟子は造らない。弟子というものは徒弟制度でできるものであって、学問の学びではなく、実践と実生活、人間そのものの学びである。それは紙と鉛筆による学びではなく、良き師を見てその真似をする学びである。弟子は神学という学問はしなくても、師の生き方から神学的な生き方を学ぶ。 最善最大の教師であられたキリストは、学校を建てず、教室を造らず、紙を用いず、教科書を開かなかった。現在のわたしたちの学校にはそのような意味で、本当の師たるに足りる教師が、はたしてどれだけいるか。確かに、人格も働きも立派な教師はたくさんいる。しかし、学校という所は、そのような教師の人格も働きも隠してしまう機能を持っている。

学生の見る教師は教師であって同労者ではない。試験官であり、管理者であり、監督であり、自分と同じ目的、同じ目標のために、共に汗を流し、手を汚し、苦労をする同労者ではない。 教師の目的は教えること、学生の目的は学ぶことである。両者は異なった目的をもって同じ場所にいるのである。しかし、徒弟制度の師弟はそうではない。 確かに彼らも教えるものと教えを受けるものである。しかし彼らには共通の目標、共同の目的がある。その目的に向かって共に苦しむのである。そのプロセス、その過程が弟子造りなのである。弟子は苦しむ師を見て学ぶ。忍耐、献身、愛、寛容、そして働きを学ぶ。少なくても、キリストの弟子造りはそのようなものであった。

このような弟子の訓練は地域教会でなければできない。ところが、牧師たちがみんな学校で訓練を受けてきたため、学校でなければ訓練ができないと思い込んでいる。人間はまず、もの真似で学ぶからである。だが、ひとつ、ためしにやってみるが良い。自分の教会で開拓伝道、あるいは第二礼拝会を作り、その責任を持つ信徒たちを育てるのである。牧師が涙を流し祈り、うめき、苦しみ、額に汗を流し、手をまっ黒にして働くところに、信徒もおらせるのである。失敗に落ち込み、失望に突き飛はされ、落胆に沈むところを信徒に見て貰うのだ。そして、それでもまだ諦めない粘り、まだ手を引かない一徹さ、まだ中止しない情熱に触れてもらうのだ。人々に笑われ、あざけられ、さげすまれ、だまされ、何度も何度も挫折しそうになりながら、それでも、許し、愛し、理解しようと努め、じっと忍耐をもって働く牧師の本当の姿を分かってもらうのだ。講壇から説教しているいつわりの姿、役者、パーフォーマーの姿ではなく、本当の姿を分かってもらうのだ。信徒は手をこまねいておれなくなる。一緒に働き始める。一緒に苦労をし始める。そこに弟子造りがある。

それからもう一つ開拓をはじめ、もう一ヶ所礼拝所を開き・・・・・遠くの信徒の家で充分。３、４人いれば申し分なし。・・・・その責任を持てる信徒を育てる。信徒を育ててから開拓を始めようとするのは間違いである。信徒は開拓と共に育つ。

現在のわたしたちの教会の状態は、働きが少ない。だから働く信徒が少ない。したがって救われる者が少ない。その結果働きが少ない。そして、働く信徒が少ない。したがって救われる者が少ないと延々と続いている。そこで、少々無理をしても働きを多くしよう。働く信徒が生

まれてくる。救われる者が増えてくる。働きが多くなる。 働く信徒が加わってくる。「でも伝道」は再生産性に優れている。

ここでわたしは、若い伝道者たちがパウロのように手に職を持つ、「テント作りの伝道者」になることを勧めたい。日本の教会が、いわゆる「フルタイム伝道者」の悪しき「神話」から脱脱却することを願っている。わたしたちの間では、伝道者が生活の糧のために働くことが、不信仰の罪のように言われている。ところがこれは、パウロの例でも他の新約の働き人たちの例でもはっきりしているように、聖書的には何の根拠もないものである。 教会の歴史を紐解いても、「聖職者」が職業を持つというのは当然の事として、長い間受け入れられて来た。だから、「聖職者」に相応しくない職業は何かという、議論と指導がとき折くり返され、長い間任地を離れなければならないような職業、道徳的に問題のある職業などが、好ましくないとして槍玉に上がったりしている。「聖職者」が職業を持つべきではないという議論は、あるいはどこかであったかもしれないが、たいした注意を引かないで来た。

これが現在のわたしたちの「フルタイム」の意識に変わったのは、ここ２世紀位のことではないだろうか。しかも、これは伝統的「キリスト教国」では余り見られないので、どうやら、「宣教地」特有のコンプレックス、おかしな考え方らしい。明確な調査をした上でのことではないので、確信を持って言えることではないが、多くの人たちはこれを金持ちの宣教師たちのせいにしている。わたしもそうではないかと思う。つまり、進んだ文化と強い経済力を背景に、強烈な優越感と共にやって来た宣教師たちは、すぐに、現地人を金で雇って仕事をさせた。当然である。そして、ちょっと意気込みのある新しい改宗者を見つけると、ただちに金で雇ってヘルパーにし、通訳者にし、訓練して伝道者にしたてた。金で雇った宣教師は、もちろん「フルタイム」を要求した。雇われた者が真面目に、勤勉に、いつまでも忠実に働くために、宣教師たちは上手に聖書を用いた。そして、「フルタイム」が、あたかも聖書的であるかのように見せるのに成功した。やれ信仰だ、やれ忍耐だ、やれ献身だと脅し、天からのマナだ、エリヤの烏だ、ピリピ４の１９だと洗脳した。カルビン主義の「召し」の神学も、かなり大きな役割を演じたに違いない。

「フルタイム」には「フルタイム」の良さがある。それは認めよう。とくに現代のわたしたちの教会のあり方、伝道の方法には、「フルタイム」を前提としたところがかなりあるために、何が何でも「フルタイム」でなければならないと思い込みがちである。ただ、いま問題とされているのは、そのような教会のあり方、伝道の方法である。それが変えられれば、これも変わる。

考えても見て欲しい。一人の「フルタイム」の伝道者を支えるには、一体どれだけの費用がかかるのか。その伝道者を育てるのに、どれだけの費用と歳月がかかるのか。みんな、大きくもない、それぞれ自分たちのことでほとんど目一杯の、諸教会の犠牲によるのである。豊かでもない信徒たちの血と汗によるのである。こんなことでは、とうてい、あの新約聖書に見られるような、バイタリティに溢れた伝道は不可能である。

もしも、誰かが職業を持ちながら開拓を始めたらどうなるか。ただしそれには、二つのこと

が前提となる。まず、「テント作りの伝道」が罪であるという、脅迫観念からはっきり脱出すること。この脅迫観念を持っていては、始めから敗北である。未信者との結婚は罪だと脅され、洗脳されているのに、ついつい未信者が好きになり、罪意識にさいなまれながら付き合いを続けていると、結局、敗北して教会を離れ、信仰を放棄せざるを得なくなる、わたしたちの教会の、多くのうら若い女性信徒の二の舞になる。非聖書的な、宣教師の都合や牧会上の都合で植え付けられた脅迫観念に、さっさと、あっさりと、気前よく、さようならをすべきである。若い女性信徒でも、あまり忠実でなく、未信者の男性と平気で付き合い平然と結婚した者が、結婚後も「臆面もなく」教会に出席し続け、そのうちに相手を救いに導いたりする。

次に、現代の教会の型、伝道法に捕らわれないことである。現代の教会の型、伝道法をそのまま継承しながら「テント作りの伝道者」になると、必ず失敗する。プロレスラーが相撲のルールで、土俵の上で試合をしてもまず勝ち目はない。だから、自分ひとりで仕事をしてはならない。信徒もいないのに看板を上げて礼拝会を開き、人が間違って飛び込んで来るのを、祈りながら待ってはならない。 説教なんて物を準備してはならない。

以上の二つの点を確かめてから、「テント作りの伝道」をするとどうなるか。 いろいろな可能性が出て来る。ただ、一つだけ強く勧めたい。それは、訪問伝道でも、職場伝道でも、家庭聖書研究会でも、とにかくやって、数人の信徒らしき物ができたら、彼らを自分と同じ「テント作りの伝道者」にしたてあげることである。仕事の合間に一緒に伝道に連れだし、休日には一緒に訪問伝道に出かける、夕方には聖書研究会に引き回す。ごく普通の人間が普通のままで伝道できる事を教える。「テント作りのあなた」の伝道者としての姿は、「フルタイム」の説教者の姿とは違って、みんなに、すぐに真似のできるものである。 赤ん坊は真似によって育つ。信徒も真似によって成長する。

だから、あなたの開拓ではまだ礼拝会も開いていないのに、信徒たちがあなたにくっ付いて歩き、伝道の苦しみと、喜びを味わうことになる。いや、信徒のほうがここぞと思うところ、これぞと思う人間のところに、あなたを引き連れて行くことになる。そういう信徒を何人も作りあげることである。信徒もいないのに高い金を出して、一等地に広い部屋を借りることなんぞ馬鹿げている。信徒が１０人にでもなったら、その内の１人の家でも使って、公同の礼拝会をはじめたら良い。日曜日でも良いし、水曜日でもかまわない。なんなら、一週間に２回、２ヶ所でやっても悪くない。こういう伝道をすると信徒の成長は速い。しばらくすると、自分たちで伝道に出歩き、自分たちで集会を開きだす。「フルタイム」伝道者になるのは、それからずっと後の事で充分である。

普遍的教会の不変性

さてさて、「でも伝道」の宣伝効果はいかに？ 「嗚呼、はらからよ。捕らぬ狸の皮算用と嘲るなかれ。絵に描いた餅と罵るなかれ」と、このあたり明治調で行きたいね。

ところで、「賢明な読者諸君はすでにお気付きのことと思うが」とやると２５年前の白土三平調になるが、とにかく、お気付きのことと思うが・・・・・。 もしもこの「でも伝道」を真面目にやろうとすると、今まで持っていた一般的教会観では立ち打ちできなくなる。欧米から輸入された現在の教会の形態に固執していたのでは、追いつかなくなる。そこで、教会とは何かという問いが出てくる。

教会とは何かとなると・・・・ゾーッとして気が遠くなる思いである。はらわたが全部裏返しになるんじゃないかと、心配になるようなひどい道を７時間も８時間もドライブして、やっと、どんづまりまで辿り着いたと一息ついたら、先達さんに「これから、６時間歩いてあの山を越えます」と言われた時の、あの気持ちだ。指差すかなたを眺めると、山は遥かに白雲にかすみ、道は馬も通れない。何で好き好んて宣教師になんぞなったのか、ついつい愚痴が出てしまう。しかし、立派に尊敬されている宣教師だ。愚痴は奥歯で噛み殺し、にっこり笑って「よーし、行こう」と先に立つ。

わたしの宣教地を見物においでになった方がたは、「いつもこんな所に来てるんですか。凄いなぁ。感激だなぁ。忍耐ですねぇ。献身ですねぇ。愛ですねぇ」と口をそろえておっしゃるが、「てゃんでぇ、こちとら、やけくそでぇい」負けず嫌いの一徹が、言い出した事とて後には引けず、いまだにずるずるこんな所に来つづけているだけだ。

そんなわけで、「教会とは」となると、そんな風にゾーッとするのである。わたしにはそんな深遠な神学に挑戦する勇気がない。「今にみていろ、僕だって」と力んでみても、まあ、６０年もすりゃ何とかなるかも知れないが、それじや緊急の役には立たない。そこで苦肉の策。「どんな教会を建てるべきか」という話にしたい。

真面目に勉強した伝道者ならば、伝道の目的が教会建設にあることくらい知っている。だから伝道者たちは、何が何でも、遮二無二、競走馬のように一心不乱に、教会を建てようと頑張る。「不肖わたくし」もそうであった。石にしがみついても教会を建て、一旗上げようと・・・いや、その頃はもう少し純真に、神様の栄光の為に教会を建てようと奮戦した。

東京の、人口過密の下町で、少なくても６０人の礼拝出席者、毎月２０万円の収入、そして数年後には教会堂と、地面から６３センチも足が浮き上がっているような「ビジョン」を持って働いた。ある時突然目がかすんで、医者に聞くと急性栄養失調と笑われるまで働いた。２年後に沖縄のど田舎に飛ばされて、あまりの条件の違いに唖然とし、愕然となった。それでも教会を建てようと必死で踏ん張った。夢中で頑張り続けているとき、ふと、何となくアホ臭くなって、魚釣りに行って見た。「自給伝道」であると理屈を付けた。「何で自給自給と騒ぎ立てなきゃなんないのか」と考えるうちに、自分は教会というものについて、何にも分っていないことに気がついた。６０人の信徒ができて、日曜礼拝会をとどこうりなく開くことができ、牧師の生活と教会の運営に困らないだけの献金があり、あわよくば早い時期に会堂が建てば、それで教会なのか。

わたしは釣り道具の始末もしないで、聖書に飛び着いた。そうして、聖書の教える教会を学びとろうと、夜に日を継いで奮闘した。

何と言うことか。わたしは教会とは何かを知らないまま、教会を建てようとしていたのである。わたしの尊敬する聖書学校の先生たちは、教会とは何かを教えないまま、教会を建てよとわたしたちを放り出したのである。これを珍事と言わずに何と言う。いや、もしかして、他の学生はみんなそんなことは常識として、とうの昔に知っていたのかもしれない。だがまてよ。わたしだって自分が一番できの悪い、最低の学生であったとは思っていない。ただ、平均よりはかなり低かっただけである。とするならば、やっぱり、教会とは何かを知らぬ間に、教会建設のために送り出された者が、わたしの他にもいると考えて間違いない。わたしたちは標的のはっきりしないボクシングをしていたのである。今からでも遅くはない。標的をはっきりさせよう。

わたしたちが建てるのは教会であって、教会堂ではない。 教会堂建築の相談は設計士と土建屋に持ち込めば良い。教会を建てる相談は聖書に持ち込むべきだ。わたしたちの建てる教会は、聖書の中に啓示されている神様のみ心としての教会である。それは聖書のなかに記録されている地域教会、例えばエペソ教会だのコリント教会だのの形を、そのまま現代に持ち込めば良いというものでもない。聖書時代の教会は、神様のみむねの中にある本来の教会の姿が、その時代と場所、つまり、特定の文化の中に適応して現れてきたものであって、本来の姿そのものではないからである。わたしたちの務めは、教会についての直接の教えと、聖書時代の教会の様態から、神様のみ心としての教会を学び取り、それを現在の日本に建てることである。

ちょっとお願いしたいのだが、「教会を建てるのはキリストの働きであって、わたしたちの働きではない」という、至極もっともな議論は、この際、横に置いて欲しい。論点が違っているからだ。

わたしたちの働きは、福音宣教を通して、普遍的教会がある特定の地域に自己表現しようとするのを、お手伝いすることである。普遍的教会はそれが普遍的であるがゆえに、ある特定の地域教会の形態を他の地域に持ち込もうとはしない。各々の地域にその存在する文化の中で最もふさわしい形で自己表現をする。わたしたちは普遍的教会が、自由に、何にも妨げられることなく、自己を表現できるようにすべきである。教会は、アメリカではアメリカにふさわしく自己を表現しようとし、日本では日本にふさわしく自己を顕現しようとする。それを、先入観をもって性急にアメリ力の教会のあり方を輸入したり、日本の教会の形態を輸出しようとしたりしてはならない。その様な態度がいたるところで、普遍的教会の真の自己表現を妨げ、結果として地域教会の成長を妨害し続けている。

従って教会の外側の様態とか、形態というものは千差万別であってあたりまえである。しかし、その中身は普遍的であって、全世界、全時代を通じて不変のものである。ではその普遍の教会の不変性とは何か。

「同じ信仰による共同体」

それはまず、教会とは人々であるということである。一人の人ではない。人々である。しかもこの人々は、単に偶然にそこに集まった、「烏合の衆」としての人々ではなく、一つの特殊な共通性を持つ人々である。この共通性は人種とか国家とか文化とか思想とか、あるいは裕福だとか貧しいとか、教育があるとか無いとか、さらにはこれが好きだあれが嫌いだという共通性ではなく、一つの信仰という特殊な共通性である。それは、万物の創造者である生ける神を信じ、その独り子であるキリストを救い主として受け入れ、罪を悔い改め、人生の主として信頼して従い、毎日神の霊、キリストの霊、すなわち聖霊に支配されながら生きているという、一つの共通の信仰である。教会は、この一つの共通の信仰以外の共通性を、旗印にしてはならない。

ピーター・ワグナーは教会を社会学的に観察し、すべての成長している教会は、その教会を一致させている何らかの共通性、キリストを信じる信仰以外の何らかの共通性を持っていることを発見し、教会が成長するためにはそのような共通性を持たなければならないと論じている。彼の教会観察と分析は正しいだろう。また現在の一般的教会観、現在の地域教会についての考え方からすると、そのプラグマティックな主張も、効率論として正しいだろう。地域教会というものが、単に普遍的教会の一部分に過ぎないとするなら、キリストを信じる信仰以外の共通性を持てというのも、受け入れられる。しかし、地域教会は、普遍的教会の一部なのではなく、普遍的教会そのものであり、普遍的教会の地域的顕現である。彼の主張は、神学的にまったく誤っている。

教会を教会たらしめているものは、キリストを信じる信仰の一致である。ワグナーが地域教会の共通性としてあげたものは、むしろ、その共通性を持っていない人を疎外する要因である。疎外する要因を、教会一致のために持ちこんではならない。つまり、音楽愛好者の教会、文学愛好者の教会、料理愛好者の教会、自民党支持者の教会、社会党支持者の教会など、キリストを信じる信仰以外を共通因子とする教会は、たとえどのようなものでも作ってはならないのだ。ワグナーの言うところは、あらゆる差異を超えすべての壁を打ち破って、異なる人々を一つにする教会の性質に真っ向から対立する。キリストを信じる信仰以外を、地域教会の共通因子にしてはならない。ワグナーはプラグマティズムを聖書の上に置いてしまった。プラグマティズムであろうとなんであろうと、この世の哲学を聖書の上におき続けると、どんどん聖書から離れていくことになる。

また人々が、キリストを信じる一つの共通の信仰を持って集まってさえいるならば、それですべてがよいと言うわけではない。このひとつの共通の信仰を持った人々が、一人ひとり勝手気ままに独自に生きていても、それは教会を形成しない。教会とは、この人々が一つの共通の信仰のゆえ建て上げる共同体であって、単なる集まりではない。ただし、教会がすでに一度建

て上げられてしまっている今、個々の人々が集まって、再び教会を建てる必要はない。現在のわたしたちにとって、教会とは個々の信徒が集まって作り上げる共同体ではない。そうではなくて、個々の信徒は信仰を持った瞬間、この教会という共同体の中に生まれたのである。

このあたりは、個人主義が徹底していて、共同体と言うものがあまり力を発揮しない、近代の欧米に生きる人々にはなかなか理解できない。彼らに取って、信仰とはあくまでも個人的な次元に属するもので、個人的信仰によって、個人的に救われ、個人的に神と交わりをもち、個人的に天国に入るものである。教会はその個人的信仰を持った個人個人が、好みによって、任意に、自由に、誰にも強制も束縛もされずに、参加したい時に参加し、嫌になった時は、電話一本かけることもなく、あっさりと止めることができるものである。

つまり、彼らの信仰にとっての教会とは、有っても無くても本質的にたいした問題ではない、刺身の褄のような存在である。彼らにとって最も大切なのは個人である。個人の確立である。だから、「神と自分の間になにものをも差し挟んではならない」という言葉が、しょっちゅう飛び出す。そしていつの間にか、知らず知らずの内に個人主義思想にかぶれた、つまり、伝統的日本人であることを放棄して、半分欧米人になってしまった日本の牧師たちも、それをそのまま受け売りする。 聖書は何と言っているか。教会こそキリストの花嫁で、キリストが愛し、その為に命をお捨てになったものである。わたしたち一人ひとりの大切さは教会の大切さに負うものである。

大切なのは共同体としての教会であり、個人ではない。個人の大切さは共同体の一員として大切なのであって、共同体を離れてはその大切さは大いに失われる。こう言うとまるで全体主義であり、「お国のために」すべてを犠牲にさせられた経験を持つ人は、背筋に寒い物を感じ、若い入たちは、まるで突然ジャングルから生還してきた、生き残り日本兵が、「陛下に申し分けない」と言うのを聞く思いがするかもしれない。しかし、教会とはそのようなものであり、その構成員が全体のために喜んで、進んで、命を捨てることができるものである。強制的に戦争にかりたてられるのとは違う。あくまでも進んでである。それがパウロの言う教会であった。危うくなったらそっと身を隠し、いつの間にやら消えてなくなる、個人主義者の集まりが教会なのではない。

わたしたちは、この世に生まれて来た時、社会的真空状態の中に生まれて来たのではない。家族という血族共同体、村とか町とか町内会などと呼ばれる地域共同体、さらには国家と言われる大きな共同体の中に生まれて来たのである。それは否応なしに、わたしたちの選択とはまったく関わりなしに、生まれたのであり、産まれたのであり、生まれさせられたのであり、産み落とされたのである。そして、否応なしに生まれ落ちた共同体の中で育ちはぐくまれ、その共同体から多くの物を受け、その共同体に貢献する。わたしたちが寄り集まって共同体を作ったのではなく、共同体がそこにあったのであり、」その中に私たちは生まれたのである。

同じように、わたしたちが第二の誕生をしたとき、わたしたちは教会という共同体の中に生まれたのである。クリスチャンたちが寄り集まって教会を作るのではない。キリストが目論ま

れたのは共同体としての教会であって、個人的信仰によって救われた者がてんでばらばらに生き、好きなときにくっ付き、好きなときに離れる「クリスチャン・クラブ」ではない。

わたしの家には、今まで何人かのお手伝いさんが来た。「宣教師がお手伝いさんを！」などと目くじらを立てるなかれ。この国ではいくらかでも余裕のある者が、貧しい人を助ける為にお手伝いさんとして引き取るのは、社会通念になっていて、そうしないのが悪い事なのだ。だからわが家でも、必要でもないお手伝いさんを持つことになった。「貧乏人の子沢山」の諺にたがうことなく、ほとんどが１０人以上の兄弟姉妹を持っている。ときどき、彼女たちは給料の前借りをする。・・・・・わが家なんぞはちゃんと給料を、しかもかなり良い額を出すから、ときには、現地人の雇い主のもとにいるお手伝いさんとの間に、ギャップが生じて困ることもある。なにしろ、給料もないまま、ただ、働いて食べさせてもらうだけというお手伝いさんも多いのだ。いわゆる、「くちべらし」である・・・・・。

前借りをするときは大てい、親兄弟が病気だとか怪我をしたとか、「聞くも涙、語るも涙」の物語である。そうして前借りした金を全部、親や兄弟に渡してしまって、あとは一体どうやって生きていくのか、恥ずかしながら、１６年以上もこの国に住んでいながらわからない。兄弟の中で年上の者は、たいがい高校 （日本の中学に相当）にも行かずに働いて、年下の兄弟姉妹たちの面倒を見、高校まで、ある時には大学までの世話をする。彼らがそのような環境に、不平や不満を漏らしているのを聞いたことがない。まるで当然のこととして、黙々として犠牲になる。病身の親を抱え、兄弟たちの世話をするために身売りをすることも、少しも珍しくない。彼女たちは自分が地獄に行っても、親兄弟の世話をするだろう。国際問題としてしばしば話題になる「ジャパユキさん」など、個人主義のこんこんちきの、アメリカ人女性宣教師たちに比べると「天使」である。・・・・・ちょっと言い過ぎかな・・・・・ そして、世話になった年下の兄弟姉妹たちは、兄や姉より良い生活ができるようになり、こんどは彼らが親と兄姉の世話をする。

この国に無い物はたくさんあるが、今まで見たことがなく、今後も絶対に見ることがないだろうと思うものに、老人ホーム、昔、養老院と言ったものがある。マニラに一つあるらしいと聞いたことがあるが、疑わしい。社会福祉が遅れていると言えば、言えない事もない。だが、この国の年寄りたちは、たとえ飢え死にしても、養老院に入るよりは、子供たちといることを望むだろう。子供たちは、自分たちが食べられなくなっても、親を養うだろう。彼らに取って親の恩は、文字通り海よりも深く、山よりも高い。

わたしの家で働いていたお手伝いさんは、クリスチャンになってまだ間もなく、聖書のことなど何にも知らなかった。だが、持てる物すべてを、病弱な両親に与えてしまう彼女の生き方は、ギリシヤ語を駆使して堂々と愛の説教をしでかす、そんじょそこらの宣教師には、絶対真似ができない。彼女は愛なんて言葉も使わない。

親は子供が１８才になったら扶養義務を持たない国アメリカ、子供も親の扶養義務を持たない個人主義のこの国で育った者には、共同体というものの意味がわからない。・・・・・実は驚

くべきことに、これが分かりかけているアメリカ人たちがかなりいるのである。ところが、アメリカ一辺倒の日本の教会には、これが分からない者が多いのだ。そう言うわたしも、共同体意識の少ない北海道の開墾村で、ちりぢりに破壊された家庭環境の中に育ち、徹底的な個人主義、独立独歩を旨として生き抜いて来た。そのため、本当の意味で、実感としての共同体社会が分からない。だからアメリカ型個人主義の福音を受け入れることができ、クリスリャンになることができたのである。

これは、自分が外国に出て見て、２０ヶ国以上の様々な文化背景を持った人たちと親しく付き合い、日本という国を、外側から客観的に見つめることができるようになり、日本と、日本人である自分が少しずつ分かってきて、初めて言えるようになったことである。 今になって、北海道から上京して、日本中から集まってきた聖書学校の学生たちと寝起きを共にしたとき、どうして、彼らの物の考え方と自分のそれが、あれほどまでも隔たっていたのかということが分かりかけて来た。他の学生たちは、わたしよりずっと伝統的な 「日本人」だったのだ。

パウロは共同社会に生まれるというこの真理を、聖霊によってキリストの体にバプタイズされるという、特殊な表現で強調していることは、既に述べた。彼が教会をキリストの体として説明するのを読むと、それは正に「運命共同体」とも言うべきものである。

個々の信徒は教会の中で生き、活動する。彼らは教会の一員として、キリストの愛の対象なのである。教会を離れた、教会につながっていないクリスチャンというのは、本来あり得ない。ところが現実には、そのような放浪クリスチャンがあきれるほど多い。とくにアメリカあたりでは、牧師が興味を持っているのは出席者の数と献金額であって、出席している人間そのものではないという。これでは劇場の支配人と同じである。だから華々しいことをして人集めをする。信徒は毎週、新聞で面白そうなプログラムを組んでいる教会を探して出席する。彼らは共同体の一員としては、ほとんど何の役割も果たしていない。あちらでは、最近は会員制度をとらない、純然たる「集会主義」の「教会」が増えているそうだ。

クリスチャン生活での霊的事実は、実生活の中で現実化されて行かなければならない。つまり、きよめられたという霊的事実は、きよい生活となって現実化されなければならない。罪の縄目から解放されたという霊的事実は、罪に負けないという生活になって現実化されなければならない。それが、御霊によって生きている者は、御霊によって歩むということである。同じように、キリストの体という共同体の中に生まれたものは、実生活の中で、その霊的事実を実現化しなければならない。そして、それは地域教会に連なり、そのなかで生き、活動するという方法似外にないのである。

普遍的教会は地域教会という表現以外では自己を表現しない。クリスチャンは地域教会にしっかりと連なるという方法以外で、正しい意味で普遍的教会の一員として生き、活動することはできない。そういう面からすると、パラチャーチなんぞというものの存在は、いささか問題がある。特にパラチャーチには属しているが、どの地域教会にも属していないという人たちには、大きな問題がある。

ここフィリピンの山岳都市バギオに引っ越してきた、わたしたちの神学校の教師は、みな宣教師である。学校はアッセンブリーズ・オブ・ゴッドのアジアと太平洋地域の働きのために建てられ、世界中から生徒たちが集まっている。教師たちも国際的で、みな博士号だとか修士号だとかを持つ立派な人たちである。当然、毎日神学校教育に携わって忙しく活動している。そして、彼らの多くがわたしたちの教会の礼拝会に出席しだした。ところが、わたしは彼らを歓迎せず、神学校側に厳しい申し入れをした。「もしも、神学校の教師がわたしたちの教会に出席したいのならば、責任ある信徒として、教会の一員としての自覚を持って出席してほしい。現在のように、好きなときに来て、好きな奉仕をさせろという態度では来ないでほしい。もちろん、他の信徒と同じように、献金もきちっとしてほしい。責任ある信徒を育てようとしている、わたしたちの働きの妨げにならないでほしい。」幸い校長はわたしの申し入れを理解してくださったが、教師の多くは、「われわれは月曜から土曜まで、主のために働いている、日曜日の礼拝は自由にしたい」と主張したという。そこで、わたしは彼らに尋ねた。「あなた方はどこの教会の信徒なのか。神学校は学校であって教会ではない。うちの教会の信徒たちも、月曜から土曜日まで働いて、日曜日には忠実に教会で奉仕をしている。」

結局、このことが契機になって、彼らは自分たちが自由に礼拝会に出席することができる、小さな教会を建てることになった。要するに、教会観の違いである。自分たちは博士だから、修士だから、地域教会に行けば必ず歓迎される。いつでも奉仕の場が与えられ尊敬されると考えるのは間違いである。神学校は教会ではない。教師たちもきちっとした教会生活をするのが当然である。きちっとできない、「悪い模範になる人たち」はお断りである。ただし多くのパラチャーチは、今までの地域教会が果たすべき役割を果たして来なかったことから発生した必要悪、あるいは、パラチャーチ自体、変形した不完全な地域教会とも考えられる。パラチャーチより非教会的地域教会はいくらでもある。

とにかく、正しいクリスチャンのあり方は、自分が普遍的教会の一員であるという霊的事実を、実生活で、地域教会の会員として現実化することである。・・・・・何か、やたらに神学っぽくなってきましたね。やっぱり、内にあるものがついつい溢れ出てしまうんですよね。なにしろ、底が浅いものですから。

マニラで牧会の真似事をしていたとき、ひとりの日本人の主婦が出席していた。子供もなく比較的裕福に生活していた美人の彼女は、身の回りに何だかんだと、光り物をジャラジャラくっつけるのが好きだった。信仰が成長するにつれ、そのジャラジャラが少なくなった。彼女が帰国してから、いくどか一家でお宅を訪ね、ペチャクチャ喋る機会があった。あるとき彼女が言った。「わたしって、昔からアクセサリーが好きだったのよね。でも最近はだいぶ変わって、昔のようではなくなったのよ。ところが、やっぱりどこかに何か一つだけ付けて置きたいの。誰にも見えないところに、ちょっと豪華なのを・・・・。隠しておきたいの。でも本当のところ、ちょっと何かした拍子に、さりげなくそれが見えなくちゃ駄目なのよね。アッハハッハ・・・・」その彼女も数年前、若くして癌で亡くなった。立派に戦い抜いて、家族たちを信仰に導いて、逝ったという。いまごろ、あちらで何かをきらつかせながら、「アッハッハ」と笑っているか。

まあ、そんなことで神学的になったが、どうせたいした事はない。底が浅い奴がひけらかすのを我慢してほしい。そうしておおらかに笑って欲しい。アッハッハ・・・・

クリスチャンたちが地域教会の中で、普遍的教会の一員であるという霊的事実を現実とするということは、一体どういうことか。それは、神様が教会にこうあれと目論んでくださった、目的に沿うことである。神様の教会に対する目的はなにか。それは救済論的であり、宣教論的であり、キリスト論的であり、終末論的であり、神の国に関わることである・・・・・・なんぞと並べると、何かますます神学的に聞こえるが、言っていることはさっぱりわからない。

あえて、分かってもらおうと努力して書くと、いよいよこんがらかり、大混乱を来すこと必至であるから、筆者、読者お互いの幸福のため、そういうことは止めにしておこう。

神様の教会に対するみ心は、教会が福音の伝達者になることであり、キリストの大使として、この世でキリストを代理し、キリストが成し遂げられた贖いの働きを、すべての部族に適応して行くことであり、神の国建設に尽くすことである。教会は神の贖いのみ業の一端を担い、神の国健設、万物の回復の働きの一端を担うべく、キリストによって建てられたのである。つまり、教会は神のミッションの働きのために、創造されたのである。教会はミッションを持っている、教会にはミッションがあるという言い方も間違ってはいないが、教会はミッションのために存在するといったほうが、より正しい。

「神のミッションのために存在する教会」

教会は神のミッションのために存在する。それが普遍的教会の不変性の中で取り上げたい第二の点である。教会とは個人的に救われて個人的に天国に入るように定められた者が、この世に滞在する間「天国行き切符を持った者の『待合室交友会』」として参加するものではない。神の贖いの歴史、世界の回復の歴史の中で重要な役割を果たすべく、その目的のために、神ご自身の働きを遂行するもの、神のエイジェントとして立てられたのである。

これが教会の存在理由、存在目的である。たとえどんなに大勢集まっていても、どんなに献金額が多くても、どんなに豪華な会堂を持っていても、どんなに見事な聖歌隊が天使の歌声を欺くように唄っていても、もしも、教会がミッション、すなわち神の福音の宣教をないがしろにしているならば、真実の教会のあるべき姿を失っている。１６世紀のあるカトリックの神学者が、プロテスタントにはミッションがない故に、真実の教会ではないとプロテスタントを責めたが、それは誠に的を射ていた。当時のプロテスタント教会は、アナ・バアテスト以外、ミッションに対してまったく興味を示さなかった。だから、徳川幕府はプロテスタント国のオランダを、西欧キリスト教諸国の中で唯一、鎖国の対象から外したのである。

従って、普遍的教会の具体的顕現であるすべての地域教会は、ミッション、福音宣教を自己の存在理由、存在目的とはっきり認識して、それにふさわしい生き方をすべきであり、すべてのクリスチャンが、自分がこの世から召されて、キリストの体である教会にバプタイズされたのは、ミッションのためなのだと自覚して、それに従った生き方をすべきである。普遍的教会の一員であるという霊的事実は、地域教会の宣教の活動に参与するという事によって、具体的に表現されなければならない。

旧約時代にあっては、神は一つの民族を通して全世界を祝福しようと計画し、イスラエルをお選びになり、まず、彼らを祝福なさった。しかし、イスラエルは神のみむねを悟らず、選ばれたという事実におごり高ぶり、祝福をただいたずらに享受し、全世界の祝福の器となる目的、ミッションを台無しにしてしまった。そのために、神はイスラエルを切り捨て、新約時代に至ってイスラエルに代わる新しい神の民を起こし、その民を通して全世界を祝福しようとなさっている。その新しい神の民こそ教会である。だが、もし神がオリーブの木の枝を惜しまずに、切り捨てておしまいになったとするなら、その元木に継がれた野生のオリーブの枝を惜しむようなことはなさらない。（ロマ１１：１２）教会がミッションを軽んじると、神は教会を切り捨てておしまいになる。

ところで、最近このミッションについての理解が、何か怪しくなってきている。社会派といわれる教会の中では、もうずっと前から怪しかったのだが、福音派と言われる教会の中でも、近頃この怪しい考えが相当巾をきかせている。いわゆる「解放の福音」に同情を示した、「ラディカル」といわれるグループにかなり影響されて、１９７３年のロザーン会議で採択された誓約は、その怪しげな傾向をはっきりさせた。これがまた、日本などでも随分影響力を持って、福音派教会の目を社会活動に向けさせて来た。ただ、今年マニラで開催された第２回会議では、このあたりがだいぶ問題になったと聞くが、詳しい報告にはまだ触れていないので、言及は避ける。１９７３年の誓約作成の時点で大きな力を発揮したのは、前述のストットさんだが、彼の意見によれば、教会のミッション、すなわち目的、この世に遣わされた理由は二つある。

第一は伝道で、第二は社会活動である。伝道は社会活動に優先するが、この二つは一つの車軸の両端にある二つの車輪のようなものであって、どちらを欠いても用をなさないという。従って、社会活動に具体的に参加していない教会は、本来の教会のあるべき姿を失っていることになる。そして、その社会活動とは、貧しい者を助け、抑圧されている者を解放し、人間の本源的尊厳を回復することだそうだ。具体的には貧しい国々の飢えている人たちに食べ物を送り、抑圧者を糾弾し、あらゆる悪と戦うことなのだそうだ。

こうなると、わたしなんぞすっかり興ざめしてしまう。わたしが働いている「破産国」フィリピンの山奥に、忘れられたように生きている貧しい人々の教会が、信徒たちも貧しく、牧師はしばしば食べられない日を過ごさなければならない教会が、どうして社会活動に参加しなければならないのか、どうして貧しい者に与えなければならないのか。こんな理屈は富める国の大きな教会の寝言である。日本の教会がこれを真似るなら、富める国の貧しい教会の背伸びである。抑圧者の糾弾だとか悪との戦いとなると、弱虫のわたしは背筋がゾクゾクしてくる。 誰

が誰を抑圧者と定め、だれが何を悪と断定するのか。社会主義的クリスチャンは自由主義を糾弾し、自由主義的クリスチャンは共産主義を悪魔と罵る。教会が社会構造とか政治の善悪を決め付けることほど、恐ろしいことはない。そんな十字軍には参加したくない。この国で何回もくり返されているクーデター騒ぎの、どちらを善とし、どちらを悪とするのか。わたしは裁判官になりたくない。政治の世界のでき事に、西欧的宗教の絶対善と絶対悪の観念なんぞが顔を出してはいけないのだ。

しかも、ストットによると、伝道というのは前述したように、福音を宣言するだけだから、信徒を整えるとか教会を建てるという働きは伝道ではなく、かと言って社会活動でもなく、ミッションに含まれなくなってしまう。教会が教会を建てることを軽んじ、社会活動に熱中するとどうなるか。そんなことは論じるまでもない。歴史が証明している。社会派と言われる恐ろしく論の立つ教会の、世界的衰退を見るが良い。

ストットが、社会活動を伝道の手段にしたり、伝道の一部に組み入れたりすることに反対しているのは良いが、社会派に対する歩み寄りを見せているのは、受け入れられない。もっともこれは、福音派の教会が、社会派とのかかわりを避ける意味で、社会活動にはあえて目を閉じて来てしまったという事に対する罪意識、劣等感の表れであり、気持ちは理解出来ないものではない。ここで問題なのは、教会は自分のミッションが何なのか、社会活動との関係の上で把握していないことである。だから、社会派の教会は社会活動にのめりこみ、教会としてのバイタリティを殆ど失い、福音派の教会は伝統的に社会問題に無関心になり、今は、反動としてそれに没頭する危険が出てきたのである。

では教会のミッションとは何か。社会活動とどの様に関係しているのか。この点を考えてみよう。わたしの言うことはまったくのオリジナルであって、いまだにこれと同じ意見には出会ったことがないので、すべての人の批判の対象である。議論の叩き台になれば良いと思っている。そしてこれは、普遍的教会の不変性の大切な第３点に進む。

「キリストの代理者として派遣された教会」

教会はこの世から召され、神の国に属するものとされたのであるが、召されただけに留まらず、キリストの大使、代理者としてこの世に再び送り返されたものである。これが普遍的教会の不変性の大切な第３点である。教会はキリストを代理するもので、当然キリストの働きを代理し、キリストの性質を帯びるものである。その意味で、キリストは教会を「わたし」と呼ぶことを恥となさらず、パウロは教会を「キリスト」と呼ぶのを躊躇しなかった。

キリストの言葉によると、教会はキリストが父によってこの世に遣わされたように、キリストによってこの世に遣わされたものである。キリストが遣わされたようにとは、どのようになのか。それは、遣わされた目的と遣わされたあり様、性質を示している。ここが肝心である。

キリストがこの世においでになった目的と、この世においでになった性質、あり様、生き様を分けて考えることである。勿論この二つは深く絡みあって、完全に分けられるものではないが、はっきりと区別ができる。

キリストがこの世においでになった目的は、あくまでも贖罪論的であった。人々の救いのためであり、解放のためであり、回復のためであり、神の義の遂行のためであり、神の国の建設のためであり、その他まだいろいろ言えるだろうが、とにかくそれらすべては、贖罪の業との関わりの中で言えることであって、贖罪なくしては、それらは無に帰する。従って教会のミッションは贖罪論的目的でなければならない。贖罪と関わりの無い救い、人間性の回復、神の義の遂行、神の国の建設は、神のみ心にかなわないし教会に与えられた使命、ミッションではない。

そういうわけで、教会のミッションは、まず、キリストを通して成し遂げられた、神の贖罪の業を告げ知らせ、それに対する人間の反応を引き起こすことでなければならない。そして、それに対して正しい反応をした人々を、自らの交わりの中に迎え入れ、自らの一員として行くことである。つまり、伝道こそミッションであり、その他にミッションはあり得ない。キリストが、贖罪に関わりのないミッションを持っておられなかったのと同じである。

では、社会活動はどうなるのか。神の公義はどうなったのか。教会は神の業をするものではないか。世の中には悪が満ち溢れているではないか。重要点は、キリストが贖罪を離れた神の公義を遂行する目的を持って、この世においでになったのではないということだ。もしも、キリストがそのような目的を持っていたとするなら、キリストは目的を達成できなかった失敗者である。また、神の公義は神に属するもので、教会はそれをこの世に向かって遂行する命令も権力も、神から受けていないということだ。

復讐は神に属する。目には目をという公義の遂行は、教会には属さない。(「目には目を」とは、復讐をすることだという巷の理解とは異なり、公義を行うと言う意味）ましてやこの世のことについて、誰を義とし誰を罪とし、何を善とし何を悪とするかという判断能力を、教会は与えられていない。歴史の中で、教会はしばしば神の名をもって裁判官の役割を買って出て、手痛い失敗をくり返してきていることに学ぼうではないか。義はキリストの性質であるから教会の性質でもある。しかし教会の義は、キリストの義を目指して完成途上の義、すなわち不完全な義であって、神の公義ではない。社会悪、政治悪を計る物差しにはなり得ないものだ。

それでは、キリストの愛の行いはどうなるのか。貧しい者に対する哀れみはどうなるのか。キリストは、飢えた人々にパンと魚を食べさせたではないか。「自分を愛するように、隣人を愛せよ」という、第二の戒めはどうなるのかと、矢継ぎ早に質問が飛び出して来そうである。

なるほどキリストは確かに、貧しい者、弱い者、病んでいる者、虐げられている者を哀れみ、彼らのために何かをなさった。しかし肝心なのは、はたしてキリストはそれらをこの世に来た目的として、贖罪と関わりのない、別の目的としてなさったかどうかである。確かに、それら

が神の国到来の証拠となったことは事実である。が、神の国自体、贖罪と関わり無く取り扱われるものではない。聖書を読む限り、キリストがそのような業を実践なさったのは、あくまでも偶発的であって、そのために敢えてわざわざ、あらかじめ計画を立てた上で実行なさったものではない。目的とするならば、それはあらかじめ計画されていたものでなければならない。

キリストの社会活動と言われる愛の行いは、キリストがこの世においでになった目的ではなく、キリストの性質から必然的に出て来る、キリストの生き方、生き様である。神が愛であるから当然キリストも愛である。愛は惨めな状態、悲惨なあり様に出会うと哀れみという情を起こし、行いを誘発する。キリストの代理者である教会も、当然、キリストと同じ性質を持って、この世の悲惨に反応する。しかし、それは愛という性質の自然な発露であって、教会の目的ではない。キリストがこの世においでになった目的は、そのような一般愛の遂行ではなく、あくまでも贖いの愛、贖罪愛の遂行のためである。教会がキリストの大使としてこの世に遣わされたのも、一般愛の実践のためではなく、贖罪愛の実践のためである。

このことはキリストご自身の言葉によって、この上なく明白である。キリストは５つのパンと２匹の魚をもって５千人の腹を満足させた。これは大変な奇跡で四福音書がそろって記録している。そして、社会派の教会または社会活動を重視する人たちは、必ずと言って良いほどこの箇所を自分たちの論拠として引用する。奇跡を見た人々は何としてもキリストを王としようとした。ところがその大きな奇跡のすぐ後、キリストは興奮の極に達していた弟子たちの熱い頭に、冷水をぶっかけるような事をおっしゃった。「なくなる食物のためではなく、いつまでも保ち 、永遠のいのちに至る食物のために働きなさい。それこそ、人の子があなたがたに与えるものです」。（ヨハネ 6：27）

キリストは、たった今ご自分がなさった大奇跡の重要性を、それを見て大騒ぎしている弟子たちの前で、はっきりと否定なさったのである。大奇跡であることは大奇跡であった。ただし、なくなってしまう、滅びてしまうこの世の食物のために弟子たちが働くことを、疑う余地がまったくない明確な言葉で禁止し、永遠のいのちに至る食物、すなわち、贖罪愛に関わる働きに専心することを、厳しくお命じになったのである。そして、永遠のいのちに至る食物を与えること、すなわち贖罪にかかわる働きこそご自分の目的であることを、改めて確認させたのである。だから、キリストご自身の目的であったそれこそが、キリストのみ体であり代理である教会の目的である。

わたしたち現在の教会が、「自分を愛するように隣人を愛せよ」という古い戒めをとても大切にして、しばしば説教もし、アフリカにそしてアジアに食料を送り、救援物資も届ける。ところが、「キリストが愛してくださったように、互いに愛し合う」という、新しい戒めがまったく忘れ去られているのは腑に落ちない。キリストは古い教えを廃棄なさったのではないが、キリストを主と仰ぐ新しい共同体の中では、新しい戒めが先行すべきであることを教えられたのである。一般愛は贖罪愛に席を譲り、普遍的人類愛は、贖罪愛を経験した者たちの共同体の中での相互愛に、順位を譲るのである。

現代の教会がこの相互愛を、ものの見事に忘却の彼方に押しやっていながら、世の歓心を買おうとして人類愛をひけらかすのは罪である。それはヒューマニズム信仰という現代教に対する歩み寄りであり、シンクレティズムである。 わたしたちの教会にも貧しい者、病んでいる者、助けを必要としている者がたくんいるではないか。 教会は彼らのために何かをしているか。ときたま、そんなこともして見ると言ったものではなく、教会の通常の大切な働きとして、しっかりと自分たちの活動計画に組み込んでいる教会はどれだけあるか。わたしがこう言ったところ、フィリピンの牧師が答えた。「フィリピンの教会は貧しいからそんなことはできないよ」日本人の牧師が注釈をした。「いまの日本には助けを必要としている人なんかいないよ」。どちらも嘘である。

隣人愛、普遍的人類愛はその範囲の広さにおいて相互愛に勝る。それはまず、イスラエルに与えられ、それから全人類という広い範囲に適応されるものであり、教会に限定して特別に与えられたものではない。つまり、教会の目的、ミッションにはなり得ない。一方相互愛は、明らかに贖罪愛を経験した者の共同体、教会に対して特別に与えられたもので、贖罪愛を経験した者だけに可能な戒めなのである。贖罪愛を経験することによって新たな命、新たな可能性を持った者同士だけが、相互愛を期待できるのである。しかし、相互愛がたとえ特別に教会だけに与えられたものだとしても、それは教会のミッションではない。教会の働きの一つである。この点については後述したい。

そういうわけで、教会のミッション、存在目的、存在理由は伝道である。徹底的に贖罪にかかわる働きである。それは教会の創立者であり、頭であり、中にお住みになるお方であり、世にお遣わしになったお方であるキリストが、この世においでになったとき持っていたミッションと本質的に同じものである。教会はキリストの代理なのである。現在のキリストは、かつてガリラヤの湖畔を歩まれ、病をいやし、痛める者をお助けになったようには、東京の繁華街の路地裏を、あるいは津軽郡蟹田村の畦道をお歩きになって、病める者に手を置き、痛める者に声をおかけにはならない。しかし、キリストは今も本質的に同じ働きを、ご自分の体である教会を通して続けておいでになる。

一人の信徒が貧しい者を哀れみ、助けの手を延べたとするなら、それは単に一人の信徒の働きではなく教会の働きであり、今も生きておいでになるキリストの働きである。名もない信徒の一人が病院を訪ね、身も心も病んでいる人に声をかけ、手を置いて祈ったとするならば、それはキリストがそうなさったのである。 牧師も伝道者も身向きもしない田舎の山道で、年老いた農夫が一人の貧しい信徒に出会い、世間話をするうちに福音を聞いたとするならば、この年老いた農夫はキリストに出会ったのである。 飲み屋街の袋小路で、世を恨んで酒に酔いつぶれていた窓際のサラリーマンが、夜明けの薄もやのなかで聞いた福音は、キリストが新聞配達の姿でお語りになったものだ。

現代の教会はこのことをしっかりと認識しなくてはいけない。現代のクリスチャン一人ひとりは、そのことをはっきりと自覚しなければならない。普遍的教会の不変の性質の一つは、教会がキリストの大使、代理者だということである。

「教会の四つの基本的働き」

次に挙げたい普遍的教会の不変性は、四つの基本的働きである。目的、つまりミッションとしての働き、伝道については今述べたところであるが、教会にはその他にもいろいろな働きがある。教会の様々な働きを聖書的に整理し、まとめて見ると、どうやら四つの基本的働きに落ち着く。ある人は三つと言い、他の人は五つと言うが、わたしは四つにまとめるのが最も良いと考えている。私は４拍子の方が好きなのだ。」その四つとは「礼拝」と「教え」と「交わり」と「伝道」である。この四つは互いに独立分離したものではなく、かえって互いに密接にからまり、重なっているものであるが、便宜上分けて考えるのが分かりやすい。

教会の働きはすべて、この四つに何らかのかかわりを持つ。これにかかわりを持たない働きは、本来、教会の働きではない。また、教会がこの四つの内一つでもないがしろにしているならば、その教会は正しい意味での教会の姿を失っている。教会はどのような外形、形態、様式、組織そして活動方式を選んでもかまわない。ただ、その地域の文化、政治、社会形態など、環境に最も適したものを選ぶべきである。しかし、もし地域教会がこの四つの内一つでも欠くならば、それは、普遍的教会の健全な地域的顕現ではない。すなわちこの四つの働きこそ、教会を教会たらしめているものである。この四つは英語でそれぞれ「worship」「instruction」「fellowship」「evangelism」と言うが、頭文字をつづりあわせ、「wife」すなわち妻と覚えておくと便利である。

この中で 「伝道」だけが教会のミッションである。この世に遣わされた目的である。他の三つの働きは、教会がこの世に遣わされる必然性を持たないからである。つまり、礼拝ならば、あの世・・・・何となくおかしいですね。「彼の世」が良いかな。あるいは 「彼の代」でも通じるね。 「彼岸」となると、たとえこの言葉の陰にはキリスト教の影響があったとしてもいけませんか・・・・・とにかく、伝道以外の三つの働きは、教会がこの世に遣わされず、そのまま、神の国に留まっていてもできることである。実際その方がより良くできることである。

この世の礼拝はしばしばこの世の雑念に妨げられる。神様をたたえる祈りをしているつもりが、いつの間にか、今晩のおかずの里芋の煮っころがしを考えていたりする。この世の雑音にも閉口させられる。自分の声の悪さがみんなの邪魔にならないかと、心配で満足に賛美も唄えない。ああ！！　その日が来たら！　わたしはマリオ・ランサより張りがあって、アルトール・エイゼンより深みがあって、ヘルマン・プライより滑らかで、そうだナット・キング・コールより甘い、そして、マリアン・アンダーソン並みに５オクターブも出る声をおねだりして、力いっぱいアメイズィング・グレイスを唄おう。誰にも文句は言わせないぞ。東海林太郎のように唄おうか、プレスリーのように唄おうか。サンディ・パティも悪くないね。でも、やっぱりパバロッティがいいかな・・・・・。

「教え」も彼の世ではもう頭を絞り痛めて勉強する必要がなくなる。旧約神学だ新約神学だ、組織神学だ現代神学だ、釈義だ解釈だ，哲学だ心理学だ、ヘブル語だギリシヤ語だと悩まなくても良くなるんだ。万歳！！ わたしたちの姿がキリストに似たものになるのだから、信仰生活の細々とした「あれをせよ、これをせよ」もなくなり、「あれをしてはいけない、これをしてもいけない」もなくなる。彼の世では、たぶん真理を学ぶ必要はなくなるだろう。わたしたちはそれを学ぶ代わりに、理解するだろう。もう、鏡を通して見るようにではなく・・・・・大昔の鏡ですぞ‥ ・・はっきり見るようになるのである。

「交わり」だってそうだ。みんながキリストに似る者になって、意地悪も欲張りも、おこりん坊もけちん坊も、嫉妬も自慢も、噂さ話も他人の足の引っ張り合いも、みんななくなるのだ。「今日はあの兄弟が行くから、僕は礼拝会に行かない」だとか、「あの姉妹が参加するならわたしは抜けるわ」なんてことがなくなる。みんなが愛と喜びに満ちて交わるのだ。彼の世では。

ところが 「伝道」はどうだ。彼の国に入って大いに興奮して、喜びを伝えたいと思う。感激を伝えたいと思う。伝道したいと思う。自分の親も兄弟も姉妹も親戚も同僚も友達も近所の人たちもみんなみんな、ここに連れて来たいと思う。そして、すきとおったガラスのような純金の大通りに飛び出して、通りかかる人に伝道する。ところが来る人来る人、すべてが救われている。伝道にはならない。もう一度、彼の世から見た彼の世の、この世に戻ってくることができればと、心から願うことがないとは言えない。

だから、伝道こそ教会がこの世に遣わされた理由なのである。しかし、教会がこの世にいる間にも、礼拝が捧げられなければならない。礼拝のない教会は教会ではない。神の民は神を礼拝する民だ。礼拝、すなわち神様をたたえ、その栄光を崇めることこそ、教会の究極の目的である。教会は神様の栄光のために存在する。人間の本元的目的は神を礼拝することである。 贖いによる救いも、神の国もすべて神の栄光を究極目的としている。 伝道とは神様の栄光に関わることで、人間の救いだとか、人間性の回復だとか、人間の解放で終わる事ではない。神様の栄光を除いた救い、回復、解放、一致、平和、繁栄はバベルであって、神様の敵である。伝道は教会が今のこの世に遣わされた目的。礼拝は教会をはじめ、すべての被造物の究極的目的である。

※※※　礼拝　※※※※

はたして、わたしたちの教会には本当の礼拝があるだろうか。礼拝会があることは礼拝があることの保証にならない。わたしたちの教会の礼拝会では、人々はほんとうに礼拝しているだろうか。プログラムは礼拝にふさわしく組まれているだろうか。説教は常に礼拝に適した内容を保っているだろうか。唄われる歌は礼拝の意味を持っているだろうか。祈りは礼拝の祈りになっているだろうか。単なる儀式になっていないだろうか。単なる教育に終わっていないだろうか。単なる社交に陥っていないだろうか。単なるエンターテイメントに成り下がっていないだろうか。間違いなく神が崇められ、栄光が現されているだろうか。

また、礼拝会だけが礼拝ではない。 礼拝会の礼拝は教会全体の中で、たとえそれが大切な意味を持っているとしても、小さな一部に過ぎない。教会の礼拝は１日２４時間。毎日まいにちの礼拝である。信徒一人ひとりの生活自体が、神を崇め、栄光を現す生活をしているかどうかである。言うならば、献身の生活ができているかどうかだ。

ちなみに、新約聖書に記されている初代教会の活動を見る限り、現代のような礼拝を目的としたクリスチャンたちの集まりというのは例がない。礼拝会こそ教会の中心的活動であるという、現代教会の伝統的理解には、少なくても、初代教会の同意は得られないようである。初代教会の集まりは、教えと交わりが中心であった。そして当然、そこには賛美もあった。

賛美は車を運転しながらでもできる。賛美歌を唄うなら、わたしの場合は誰も聞いていないときが一番良い。お祈りも一人のときがいい。礼拝はいつだってどこだってできる。教会が礼拝をするのに礼拝会は不必要である。礼拝会に集まるのは、礼拝をするためではない。みんなで一緒に、「公同の礼拝をするために」集まるのである。

礼拝会は、教会が一つであるということの、具体的な表現の一つである。そこでわたしたちは、互いに同じ血潮によってきよめられ、同じ命によって生かされている、一つの体に連なる者とされている事実を確認し、一つの体として礼拝するのである。そのような確認、信徒一人ひとりの自覚のない礼拝会は砂糖の入らない汁粉、あんこのないぼたもち、てんぷらの入らない天丼、唐がらしの入らないキムチである。

だから、たとえばわたしが聖餐式の務めをするときには、わざわざ大きな煎餅みたいなパンを作り、丸のまま用いる。一つを強調するためである。（Ｉコリント１０：１６～１７） さらに、一つという自覚をはっきりさせて礼拝会を進められるように、聖餐式を礼拝会の最初に持ってきたりすることもある。礼拝会では単に神を礼拝するだけではなく、信徒たちが互いの顔を確かめ合い、無事を喜び合い、祝福を分け合い、重荷を負い合い、幻を語り合い、一つであることの幸いを満喫するのである。

その意味で、わたしは日本の教会のシーンと静まり返った、礼拝会の前が嫌いである。「御聖堂に入ったら、誰とも無駄話はしないで、挨拶もしなくていいから、まず、お祈りして、神様に御挨拶しなさい」なんぞという指導には、うんざりしている。 礼拝会に来て神に挨拶する必要はない。神への挨拶は目を覚まして最初に済ませている。礼拝会に来る前からずっと神に語りかけている。礼拝会に来たら、会う人みんなに挨拶をするのだ。 一週間に受けた恵みを分け合うのだ。重荷を負い合うために、安否を問い合うのだ。そして、手を取り合って喜び、一つ心、同じ思いになって、祈り合うのだ。礼拝会前は大いに騒がしいのがよろしい。 間違ってもらっては困る。　礼拝会の前にテレビ・ドラマの話をしろといっているのでも、ピアノの練習をしろといっているのでもない。 ギター一の調律をしろというのでもない。ましてや、今はやりのドラムをぶっ叩けと言っているのではない。 礼拝会前に、ＰＡシステムをピーキー一言わせるなんぞ、もってのほかである。

礼拝会前の静けさは、何となく、大樹にかこまれた社や祠、神社といった神道の建物の持つ静寂さ、あるいは幽玄さをほうふつとさせる。「なにものが、おわしますかは知らねども」という、極めて日本人的な美的感覚が呼び起こされる。もちろん、これはわたしだけの勝手な感じ方だとは思うのだが、もしも礼拝会前の静けさが、「ここに神おわしたもう」という感覚から来るとするなら、それは、ここには神様がおいでになる（他にはいない）という異教的な要素であって、クリスチャンの礼拝にはふさわしくない。とはいえ公同の礼拝をするという特別の場に、(機会であって場所ではない) 神が特別な形でその臨在を現してくださるということのゆえに、礼拝する者も特別の態度をもって臨むというのは、良いことに違いない。

韓国人のクリスチャンは立派である。わが家を訪ねて来た韓国人クリスチャンは一人の例外もなく、まず、何はさて置き頭を垂れ、手を合わせて、静かにものの１分間もお祈りをする。それから、私に挨拶をする。今恥苦笑・・・・・あまり良くない言葉を打ったら、クリスチャンにあるまじきとばかり、ワープロがこんな漢字にしてくれた。それで、ここまで着き合ってくれたワープロに敬意を表し、そのままにして置く・・・・・それで、今恥苦笑（コンチクショウ）と思うのだが、こんなことで気分を害するのも大人気ないと無視している。でもこんな習慣、案外日本でも受け入れられるかもね。神第一の生活って、こんな事ではないんだけど。他人の家を訪ねたら、まず、そこの家の人にきちっと挨拶をする。これが正ししクリスチャンの態度ですよ。

クリスチャンの奥さんを持つある未信者が、半ばやけ気味、なかば諦め気味に、冗談めかして話してくれた。「うちの家内は、クリスチャンになる前はそりゃあ素直で、可愛かったんですがね。何か小さなプレゼントを買ってやっても、とっても喜んでくれたものですよ。ところが最近は、何を買っても、何をしてやっても、私に礼を言う前に「神様有難うございます」ですよ。面白くないじゃないですか。可愛げがないじゃないですか」　・・・・・さぞかし面白くないことでございましょう。ご同情申しあげます。

とにかく、礼拝会というのは個人の礼拝ではない。個人個人が勝手に礼拝するのが礼拝会ではない。家では宿六がごろごろしていて、お祈りの場所が無いからとか、腕白共が邪魔で、静まって礼拝できないからとか言うのは、礼拝会に来る正しい動機ではない。共同体として公同の礼拝をするのが目的である。

従ってこのような礼拝会に、未信者の参加が歓迎されている事が、わたしには我慢がならない。未信者は礼拝会の障害物である。彼らは共同体に属さないからだ。彼らがいるとお祈りも満足にできない。涙を流して賛美もできない。聖餐式ではパンと葡萄酒を与えないで、差別をしなければならない。(わたしは差別しないことにしているが) 説教は浅くなる。 真の指導も奨励も叱責もできない。そのような礼拝会では信徒の成長は期待できない。してはいけない。

かつては、わたしも礼拝会で伝道説教のできる、「応用の利く」牧師であることを誇りとし、礼拝会でも救われる者が起こることを自慢にしていた。しかし今は、礼拝会に未信者を連れて

来てはいけないと指導している。未信者を連れて来た信徒を叱ることもある。信徒の役割は、未信者を礼拝会に連れて来る事ではなく、彼らに福音を語り、救いに導くことである。救われたら、当然の事として礼拝に出席するのを勧める。その結果、礼拝会の礼拝としての質が著しく向上し、信徒が成長しだした。当然である。わたしたちの礼拝会は、「公同の」「礼拝」であり、公同でないもの、礼拝でないものを避けるべきである。

わたしは職業柄、随分いろいろな教会を見て回っている。異なった国の異なった団体の異なった伝統による、あるいは伝統を持たないことを伝統としている教会の、異なった礼拝会に顔を出すことは、・・・・・教会論的に一般の信徒たちには勧められないが・・・・・とても愉快な経験になる。改革派の流れを汲む教会の、何でも神学的に理屈付けなければ気のすまない・・・・わたしもその傾向があるのだが・・・・・くそ真面目な礼拝会のプログラム。 彼らは、聖霊とは礼拝会の前の準備段階にお働きになるもので、礼拝会の最中には決してお働きにならないものと、信じているみたいだ。一方、神学なんてものにてんで興味を示さない、「超ペンテコステ」やカリスマティックの教会の、「行き当りばったり出たとこ勝負」の、プログラムを持たないというプログラム。 彼らは、聖霊とは礼拝会の最中だけにお働きになるもので、準備段階にはお働きにならないと信じているらしい。

３００年前のイギリスの、「今様」の旋律から出てきた賛美歌を荘厳と言い、あたかも唯一の公認クリスヤン音楽のごとく大切にし続ける礼拝会。本物のクリスチャン経験をしていない人間が、生身のクリスチャンの感動とか、経験とかいうものとは一切かかわりなく、コンピューータではじき出したデータにのっとって、最も大衆に受入れられるフレーズだけを繋ぎ合わせた捏造音楽を、大音響で響かせる礼拝会。隅から隅まで商業ベースの「クリスチャン・ミュージック」を、何の聖書的、神学的、道徳的考察も持たぬまま、ドラムとエレキ・ギターとシンセサイザーでかき鳴らす礼拝会。ラタンの輪に鉄片を取りつけた「タンバリン」と、太い竹を切り取って穴を開けただけのバスフルートで、伝統的民俗音楽を受け継ぐ小部族教会の礼拝会。太さと長さで音程を取った何百本もの竹筒を、軽妙に打ち叩きながら見事に演奏する礼拝会。かと思うと、器楽の入った音楽は、すべて「異火」を捧げる罪であると、頑なにアカペラを通す礼拝会。竹パイプで作ったパイプオルガンで、１６世紀の聖歌を奏でる礼拝会。

教会の礼拝会にはいろいろな形式があってよい。うるさくては礼拝ができないという人は静かな礼拝会を始めれば良い。うるさくなくては礼拝ができないという人は・・・・・日本人にはあまりこの手の人はいないだろうが・・・・・うるさい礼拝会を開いたら良い。一つの教会がいくつもの礼拝会を開けば良いわけだ。手を上げたほうが良く礼拝ができると思う人は、ためらわず上げるのが良い。手を上げるのは聖書的にあまり根拠がなく、厳かであるべき礼拝にふさわしくないと判断する人は、良心に従って手を上げなければ良い。この人たちが互いの立場を受け入れられずにいる間は、一緒の礼拝をせずにすむように、二つの礼拝会を開くのが良い。しかし、二つの教会は作るべきではない。彼らは手を上げるべきか否かなどということが、いかに枝葉の問題であるかを理解して、互いを同じ体の異なった肢体として、受け入れ合うことができるまで、同じ教会の中で成長すべきである。立ち上がって礼拝するする礼拝会も開き、ひれ伏して礼拝する礼拝会も開こう。

わたしたちが６年前に開拓したバギオ教会は、日曜日の朝、三つの礼拝会を開いている。タガログ語とイロカノ語と英語の三つだが、言葉の違い以外にも、それぞれの礼拝会の雰囲気、歌の種類、歌い方など、プログラム全体をあえて異なったものにしている。異なった人たちの必要に応じるためである。人口２０万のバギオでは常時２０くらいの言葉が使われているが、タガログ語が理解できないものが３０％前後、英語が理解できないものが同じく３０％前後、イロ力ノ語が理解できないものが１０％弱。タガログ語の礼拝会は、小ぢんまりした集まりで３０人少々。イロ力ノ語の礼拝会は、フィリピンの伝統に沿った比較的落ち着いた集まりで、１００人前後。英語の礼拝会は大学生が多いこともあって、ドンチャカ、ズンチャカ、ビビビビビーンと騒がしいことこの上ないが、現在３００人少々。騒がしい礼拝会が一番効果的に見えるから、みんな騒がしいのにしようと言うのは分かっていない人の意見。騒がしい礼拝会では絶対に礼拝できない人というものが、わずかながらにいるのですよ。このフィリピンでも。その人たちのために、静かな小さな礼拝会が必要なのです。できれば、もう少し礼拝会の数を増やしたいと考えている。

それにしても、最近、多くの教会の礼拝会に、気に入らないことがある。唄われる歌が、やたらに感情に訴えるものになっていることだ。歌詞もそうだ。旋律もそうだ。リズムもそうだ。楽器も、音響も、ことごとくそのようになっている。現代の商業音楽の傾向がそうだから、そして現代人の生活感覚がそうなっているため、ある程度はやむを得ないとしても、本来、礼拝会の音楽は、世の中に迎合するものであってはならないはずである。伝道会などで福音伝達の手段として用いる音楽は、コミュニケーションが大切なのだから、当然、現代の世の中の音楽に類似しているものが求められるが、礼拝音楽は礼拝を目的とし、わたしたちの神体験の深さ、広さ、厚さから出て来るものである。すなわち、わたしたちの信仰の表現であって、コミュニケーションはない。しいて言えば、神とのコミュニケーション関わるものだ。

ところが、現在のわたしたちの教会の礼拝会は伝道会も兼ねているため、音楽は真実の礼拝のためと言うより、人集めの手段である。だから、エンターテイメントに徹したアメリ力型音楽になって来る。 特に、これは伝道的教会と言われる教会に多く見られる問題である。 従ってこれらの教会の礼拝会には礼拝が欠けていることが多い。あるのは、真の神が人間の感情、気分、思い入れにかかわりなく崇められる礼拝ではなく、人が感情的な歌の数々によってすっかり興奮し、陶酔し、自己満足してしまう、「宗教的実存主義」とでも言うべきものである。わたしたちの教会の最大関心事は神の栄光がどれほど現されるかではなく、わたしたちがどれほど「宗教的いい気分」に浸れるかである。こんなわたしたちの教会には真実の礼拝があるだろうか。宗教的恍惚体験を重んじる傾向にある、ペンテコステ系の教会やカリスマティック系の教会の礼拝には、この宗教的実存主義の悪癖が強く、危険な状態にすらなっている場合もある。特に、宣教を強調するペンテコステ教会に比べ、信仰のリニューアル、刷新としての聖霊体験を強調するカリスマティック教会にその危険性が強い。そのような傾向を助長するために作られた感情的音楽を、最近は、聖霊の体験を持たない伝統的教会がかなり輸入している。おかしなことである。

※※※※　　教え　　※※※※

次に教えはどうなっているか。わたしたちの教会は、教会全体として、共同体として、その知識の上で成長しているだろうか。信徒一人ひとりはしっかりと聖書を学び、教理を理解し、社会でどう生きるか知っているだろうか。未信者を正しく信仰に導くことができるだろうか。わたしたちの教会の信徒たちが、一般的に言って恐ろしく未熟児であり欠食児童・・・・これはもう死語ですか・・・・であることはすでに述べた。牧師たちは信徒が成長するように本当に努力しているだろうか。一週間に一度のめくら撃ちの説教で、充分な教育ができているなんぞとのたまう御牧師先生様は、「おいで遊ばし賜わない」だろうが、実際問題として、一週間に一度の的外れな説教で、「恵まれ」させられてしまっている信徒たちが、大多数ではなかろうか。なにしろ、礼拝会で恵まれないのは信徒の心がけがよろしく無いからであって、決して、決して、牧師のちんぷんかんぷんな説教のせいではないのですから。「どんな説教でもしっかりと心を研ぎ済まして聞くと、必ず、あなたのための神様のメッセージが含まれているのです」と、わたしは叱られたことがあった。ついついあくびを漏らしてしまった礼拝会の後だった。その後、心して、心を研ぎ澄ます思いで説教を聴くようにした。その結果学んだことは、うちの牧師は恐ろしくひどい日本語を使うという、愚にも付かない事実であった。

それにしても日本語という奴は物凄く難しい。日本語を始め、幾つもの言葉を何の苦もなく使いこなすある外国人によると、日本語がことさら難しいというのは、日本人の神話だそうだが、神話だろうが何だろうが難しい。英語なんぞは意外に易しい。その易しい奴で四苦八苦している手前は何だとなるが、それは私の頭脳のなせる業で、いや、日本の英語教育の不手際で、しいては文部省の責任であって、英語のせいではない。英語は文を構成し易い。だから、英語の説教はあまりうまくなくても、一つひとつの文は比較的しっかりしている。ところが、日本語ときたらどうだ。 かなり説教上手が揃っていると言われている（？）、わたしたちの団体の牧師たちの中でも、きちっとした文で説教しているのは、わたしの知る限り２人半しかいない。

日本語の難しさは、英語に通訳しなければならないとき、嫌と言うほど思い知らされる。主語がない。過去か現在か不明である。単数か複数かわからない。表現が曖昧で、意味が幾重にでも取れる。だから、日本人牧師の日本語のまずさは余り責めてはいけない。こう言うわたしの日本語の醜悪さは、豚がその鼻を隠せないのと同じくらいはっきりしているのだから、藪蛇になっては情けない。

とにかく、このまずい日本語を振り回しての、説教だけの教育というのは、現在のわたしたちの教会の脆弱さの、主な原因の一つであることは疑いの余地がない。しかも、わたしたちの説教は、無暗にキリスト教用語が飛び出し、やたらに抹香臭い、いやバタ臭いのだ。もうちょっと日常の言葉で話せないものか。

教会は神のみ言葉をもっと徹底して教えなければならない。わたしたちの教会は教えができ

ているだろうかなんて、まどろっこしい言い回しを用いる必要はまったく無い。わたしたちの教会は教えができていない。ピリオドである。だから、何はさて置いても、教会の教会たるところ、教えが回復されなければならない。日本語の教会は「教える会」である。ところが、日本の教える会からは教えがなくなっている。何やら、しち面倒臭い神学的な御高説を、学術論文発表のような感覚で講壇から語るのは、日本の教会の得意とするところだが、もっと、聖書に基盤を置いた日常的な教えはできないものか。割烹着でサンダルをひっかけたおばさんが、毎日４時３７分ころ、下町の商店街で菜っ葉だのがんもどきだのを買うときに使う日本語で、福音を語ることができないものか。その真髄は解き明かせないものか。そういう市井の生活環境の中で、その中に生きている人たちに、その中で生き続けるために、その中で使われる言葉で聖書を教えることはできない相談か。

ヘブル人への手紙の著者は、読者であるヘブル人の信仰の成長の遅さに、いささかやきもきしていた様子が伺われるが、(ヘブル５：１１～６：２）どうしてどうして贅沢な話である。現在のわたしたちの教会の信徒たちの中に、当時の「耳が鈍くなっていて、乳を必要としている幼子」であったヘブル人たちより、耳が鋭く、堅い食物に耐えられる者はどれほどいるだろうか。ちなみに、ヘブル人への手紙を信徒たちに読ませて見るが良い。当時の基礎的なことも分かっていなかったヘブル人より、きちっと理解できる者が何人いるか。

もちろんわたしたちはヘブル人ではないから、ヘブルの習慣、伝統にはうとい。それだけハンディキャップがあるわけだが、それにしても、わたしたちの１０年選手の信徒と比べてどうだろう。「話すべきことはたくさん持っていますが、あなたがたの耳が鈍くなっているため、解き明かすことが困難です」と言いながら、結構難しいことが言えた著者がうらやましい。しかし、これはだれの責任でもない。わたしたち自身の責任である。わたしたちが教会を教会でなくしてしまったのだ。

わたしたちは、聖書を教えるだけでなく、聖書を学ぶ事を教える必要がある。しかも、一人で聖書辞典と注解書と参考書を机一杯に広げて学ぶ学びではなく、数人の者が任意に集まって聖書を読み合い、その意味について理解を交換し合い、その実生活に対する適応に付いて知恵を出し合い、実行できるようにみんなで祈り合う、そんな学びかたを教えなければならない。教会がみ言葉を前に共に学ぶとき、すなわち数人の信徒が共に聖書を読み、学ぼうとするとき、みんなの話し合いの中で、聖霊が導き教え正して下さるということを知らなければならない。聖書の著者は聖霊である。著者にそばにいてもらえば、著者に解説してもらうのが一番だ。そして、現代における聖霊のお働きの中で、もっとも大切なものの一つが、聖書を解き明かしてくださることだ。一緒に聖書を読み始める前に、この聖霊の臨在を認めて、読むときに理解をあたえ、話し合うときに導きを与えてくださるように祈るのがいい。

・・・・そんなことをしたら、間違いが起こると思いますか。そのとおりです。間違いはいつでもどこでも起こります。でも、聖書を読んで聖霊に聞くというのが、プロテスタントの偉大な遺産ではありませんか。間違いを恐れたカトリックは、聖書を読むことを禁じるという間違いを犯した。それこそが最大の間違いだった。聖書を一人で読むことが奨励されることなら

ば、グループで読むことはもっと勧められてしかるべきである。

・・・・・心配いりませんよ。普通の信徒が犯す間違いなんてすぐ訂正もでき、影響力も小さく、大問題に発展するなんてことは、まずありません。わたしたちの教会が聖書に従おうとしている限りあり得ません。危険なのは神学者・聖書学者と言われるような人、あるいは牧師だとか、有名な伝道者たちです。教会の歴史を見ると、そういう人たちが大問題を起こし、異端を発生させているんですよ。信徒ではありません・・・・・・。

教会に必要なのは、立派な奏楽者でも聖歌隊でも独唱者でも司会者でもない。自分たちで聖書を学ぶ人、聖書を学ぶ小さな集まりの中心になれる人である。それにしても、歌唄いが教会でこんなにちやほやされるようになったのは、教会が人集め主義のショー・ビジネスに陥った証拠で、まことに嘆かわしい。

教会が真実の教会であるためには、教えがしっかりしていなければならない。わたしたちの教会は教会と呼ばれるにふさわしいものかどうか。

☆☆☆☆　　交わり　　☆☆☆☆

それから交わりはどうだろう。わたしたちの教会には交わりがあるだろうか。人によっては礼拝会を交わりと呼ぶ。それはまったくの間違いではない。礼拝会が公同の礼拝会であれば、当然そこに交わりの要素がある。しかし現実に、実質的に交わりが行われているだろうか。

わたしたちは、どちらかというと日本的な荘厳さを好むため、礼拝会においても静寂の中にしずしずと「神の臨在」を感じるのが好きである。「我が魂は黙（もだ）して神を待つ」である。周囲の者と会話を交わすと、それだけ神秘性が薄れ行く感じがして、ついついせいぜい黙礼を交わすくらいで席に着き、礼拝後は、戴いた恵みをなくさないようにそっと抱きしめて、挨拶もそこそこに家路に着く。礼拝会の前にぺちゃくちゃお喋りするのは、礼拝会が何たるかをわきまえない若者たちで、礼拝会後いつまでも何のんのと口が減らないのは、軽率ではしたない霊性の低いおばちゃんたちと決まっている。

「いやぁ。うちの教会はそんなことないよ。礼拝会の後にはお茶だって出すし、昼食会だってやるし、別に交わり会だって計画しているし・・・・」とおっしゃる牧師がおいでと思う。なるほどそれはそれで良いと思う。本当のところ牧師の多くは案外交わりに神経質である。たとえば、牧師をいじめたいと思うなら、たったひと言、いえば良い。「この教会には愛がない」これだけでたいていの牧師は、その夜布団の上で涙を流し、１０３回くらいは寝返りを打つまで眠られなくなる。ある種の牧師たちは、交わりを親密に保つためには、教会は小さくなければならないと公言してはばからないほどだ。決して自分の教会が小さいことの言い訳ではないと思う。また、「家族的教会」というのが、日本では理想的教会像の一つになっているが、それは

小さいことを前提としている。わたしも、そのように自称している教会を幾つも訪ねたことがあるが、家族的なのはそのサイズだけで、内容はちっとも家族的ではなかった。

自分の教会を家族的と考えている方は、本当にそうかもう一度見直しをしてほしい。あなたの教会では、実際に信徒たちが家族同様に助け合い、励まし合い、いたわり合い、犠牲を負い合い 、ある時はわがままも言い合い、喧嘩もし、その上で許し合っているだろうか。誰かが熱を出し目まいがするといえば、それ医者だ薬だとあわてふためき、彼が事故にあったと聞けば、心臓が止まるくらい驚いて、居ても立ってもおれずにただおろおろし、あれが夜１１時になっても帰って来ないとなれば、親戚友人の見境なく電話をかけ、やれ警察だ捜索願だと騒ぎたてる、あの一般的平凡家庭のように互いに心配し合っているだろうか。わたしは結婚して子供をもってから、愛するということは心配することだと理解した。聖書は、神がわたしたちのために心配してくださると教えている。

教会が家庭的であるために、小さく留まる必要はないし、小さければ家族的であると言う保証もない。こぢんまりとお茶を飲み、雑談を交わし、冗談を投げ合うといった、そんなものがわたしの言おうとしている交わりではない。そうではなく、キリストがお与えになった「わたしがあなたがたを愛したように、そのように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」という新しい戒めの実行としての交わりである。（ヨハネ１３：３４）

教会は神の家族である。その中にわたしたちは生まれたのであり、産まれたのである。血筋によらず、家柄によらず、信仰により、恵みによってわたしたちは神の家族の一員とされたのである。この神の家族の憲法は、互いに愛し合うことである。愛の基準は、古い戒めのような自己愛ではなく、キリストが示してくださった自己犠牲の愛である。そしてこの神の家族の構成員はすべて、キリストの愛と命にあずかった者であり、愛することが出来る者として新しく生かされているのである。

わたしたちはみんな、かつては死んでいた者であり、真実の意味で愛することができなかった。古い愛の戒めは、それを守り切るため、守りきれるものとして与えられたのではなく、わたしたちがそれを守ろうとしても守り切れないもの、すなわち、わたしたちが自分の不完全さに打ちのめされ、自分は罪人に過ぎないと自覚するために与えられたのである。キリストが自己義を主張する者たちに対して、愛するとはどういうことか具体的に教えた上で、それを実行するようお命じになったことがいくどかあったが、それは、彼らが愛を実行できると期待なさったからではなく、実行出来ないという事実に直面して、自らが罪人であることを悟るのを願っておられたからである。山上の垂訓はそういう理解をもって読まなければ、正しく読むことができないし、富める青年の物語もそうである。

しかし、わたしたちは今や新しい命に生きる者とされ、新しい戒めを与えられている。新しい戒めは、罪を許された者に罪の自覚を生じさせるためではなく、戒めそのものを守るために与えられたのである。わたしたちには新しい命が流れあふれ、新しい戒めを守ることができるようにされたのである。幹につながっている葡萄の枝が豊かに身を結ぶように、わたしたちは

キリストにつながって、実を結ぶことができるようになった。これはまさしく福音である。

初代の教会のクリスチャンたちは、教会を「コイノニア」と理解し、この可能性を最大限に発揮した。「コイノニア」とは互いに分け合う交わりである。教会はキリストの命を分け合い、キリストの使命を分け合い、自分たちの所有物を分け合った。エルサレム教会では、ごく初期のころから、会衆の中の貧しい者、特にやもめ、みなし児に対する救援活動を始めている。しかもそれは、単にときおり必要に応じてと言った程度のものではなく、教会の最も大切な働きの一つとして、教会の最も教会らしい働きとして、少なくても、教会が迫害によってエルサレムから諸方へ散らされるまで、通常の活動として続けられた。もちろんこの働きは教会が始めたものでも、教会だけのものでもなかった。ユダヤ人はもう何世紀にも亘って、会堂を通してそのような救援活動をしていたから、初期の教会はそれを真似たにすぎない。真似たというより、当然のこととして取り入れたのだろう。違いは教会の救援活動がキリストの愛によって触発され、誘発され、増幅され、増大され、大掛かりになり深みに至ったところであろう。

現代の教会はこのエルサレム教会のでき事を、一時的な事として片付けてしまっているが、それは大きな間違いである。あのような救援活動のやりかた、システムは一時的、あるいはケース・バイ・ケースと言うべきものであったに違いない。ただし、救援活動自体は愛の具体的表現であり、必要性がある限りどのような形であれ続けられるべきものである。そして、教会の歴史を通して、そのような必要性がなくなったことは一度もなかったし、これからもないであろう。

パウロは福音宣教のために命を張った。ところが彼は、この救援活動のためにも命を賭けたことをご存知だろうか。教会がエルサレムからユダヤ、サマリア、さらに異邦の地にまで勢力を拡大して行った途上で、この救援活動が形を変え、姿を変えて読けられて行ったことは想像に難くない。そして遂に国際的な活動にまで発展していった。それを指導した一人がパウロだった。パウロは、常日頃から貧しい者に手を差しのべていただけではなく、（ガラ２：１０）飢饉で苦しむエルサレム教会のために、異邦人の諸教会で献金を集め、それを自らの手で届けたことが、少なくても２回あった。

現代のわたしたちの教会が、献金をアピールするときしばしば引用する「恵みの業」と言うのは、パウロがこの支援活動の献金を訴えるために使用したことばであって、教会堂建築資金のためでも、牧師給のためでもなかった。献金それ自体が恵みの業なのではなく、貧しい兄弟たちを助けることが恵みの業なのである。

パウロは、異邦人教会から集めた義援金を持ってエルサレムに向かう途中、エルサレムに行くと必ず捕らえられ、命の危険に晒されるということを、預言によって知らされたにもかかわらず、なおも旅行を続けようとした。供の者たちは何とかしてパウロを思い止まらせようとしたが、かえって彼の逆鱗に触れてしまった。パウロは絶対に、たとえ何が待ち受けていようとも、この恵みの業を自分の手で完成したかったのである。彼の心にはそれによって英雄になるとか、感謝されるとかいう願いは露ほどもなかった。ただただ、この恵みの業を成し遂げるこ

とによって、自分がキリストの弟子であることを確認したかっただけに違いない。

キリストは、「もしあなたがたの互いの間に愛があるなら、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです」と諭し、キリストの弟子である事の証拠を、互いに愛し合うことであると定めたのである。（ヨハネ１３：３５）パウロは自分が使徒であるということを、建て上げた教会の数とか決心者の多少に訴えず、自分の働きの使徒的性格に訴えたが、ここで、バウロは恵みの業のために命を捨てることを、「福音の告白に対して従順である証拠」として示したかったのである。（Ⅱコリント９：１３）

もちろん、わたしたちの教会でも折りに触れて、そのような恵みの業を行ってはいる。だが、その恵みの業を教会の通常の活動として、計画に取り入れている教会はあまりない。多分、わたしのフィリピン山岳奥地宣教に協力して、こちらの貧しいクリスチャンを助けるために、古着類を送って下さっているくらいがいいところだろう。

現代の多くの日本人にとって、古着は捨て場がない厄介物であるから、古着を供出すること自体にほとんど犠牲はない。実際に荷作りして発送する、手間と費用がかなりの額になり、それが大きな犠牲になる。本当のところ、わたしは日本の教会の絶え間ない協力、愛の送り物にとても感謝をしている。それによって随分たくさんの貧しいクリスチャンが恩恵を被っている。古着として配られる分をはじめ、現金化して（クリスチャンだけを対象に教会内でバザーを開いて）事故、病気、火事、その他の緊急援助に使用されているが、この働きはどこの団体よりも手際良くきちっと管理され、効果を上げていると自画自賛できる。

そして嬉しいことは、わたしたちが開拓した教会が、日本からの救援を受けるだけではなく、たとえわずかではあっても、自分たちで互いに助け合うように成長していることである。貧しいながら、さらに貧しい人たちのために、古着や台所用品を供出している。

・・・・ちょうど今、バラトック教会の小さな交わり会から帰ってきた妻が、「２ケ月前に暴漢に殺された信徒の、奥さんと子供たちの住む家の家賃を、教会が面倒をみているんだって」と情報をもたらしてくれた。この国では殺人が多い。今年になってわたしたちの教会の信徒が２人殺されている。２人ともわたしが洗礼を授けた者である。家族を殺されたという信徒はずいぶんいるし、殺人騒ぎは周囲でしょっちゅう起きている。

そこで問題は、わたしたちの教会がこの恵みの業を、パウロと同じように真剣に受け止め、実践しようとしているかどうかである。わたしたちは、神がその民の中の貧しい者、しいたげられている者、弱い者に対していかに特別な関心を払っておられたか、そしてそれが周囲の民への証になっていたかを知る必要がある。旧約聖書によると、イスラエルの民は、農作物のすべてを収穫してはならなかった。我が家の要領の良い娘が、四角い部屋を丸く掃除するように、四角い畑の四隅は刈り残して置くように定められていた。貧しい者が残りを刈り取ることができるためである。ひとたび手からこぼれた麦の穂は、拾ってはいけなかった。乏しい者が自由に拾い集めることができるためであった。葡萄の採り入れのときは、未熟な実は残して置き、

再び収穫してはならなかった。飢えているものが自由に採ることができるためであった。これらのことはくり返しくり返し命じられている。弱い立場の者の借金には特別の考慮が払われ、ヨベルの年も定められ、買い戻しの権利も定められた。１０分の１の捧げ物は、貧しいやもめや、みなし児のためにも使われるように定められていた。イエスがキリスト、すなわちメシヤであることの証拠の一部は、「貧しい者が福音を聞く」ことであった。

わたしたちの教会の中の貧しい者、弱い立場にいる者は教会の配慮を受けているだろうか。ザレパテのやもめの話は良く説教に使われる。預言者の信仰、やもめの信仰、そして神の奇跡。これは実に説教者びいきの物語である。しかし今日、神は同じように必要を満たす奇跡でも、異なった方法で、より大きな奇跡を行ってくださる。神にとって、粉と油をちょっぴりずつ与えることなど、少しも奇跡ではなかった。それよりも、けちん坊で欲深の利己主義者を贖いの愛によって造り変え、貧しい者に与え、弱い者をかえりみ、しいたげられている者を助ける人間にすることのほうが、よほど大きな奇跡である。わたしはザアカイの心の変化こそ、もっとも大きな新約的な奇跡だと思っている。神は現在このような奇跡で、貧しい者を養って下さるのである。

わたしたちの教会に、交わりの奇跡が起こるように祈ろうではないか。ザレパテのやもめの物語から、信仰をもって捧げることを教えるのは間違っていない。だが、それを教えたならば、その女と同じ信仰と犠牲をもって捧げる人たちが､間違いなく必要を満たしてもらえるように、教会として努力しなければ片手落ちである。(片手落ちが差別用語だなんて､馬鹿なことを言っている人には耳を貸さず）残念ながら、現在のわたしたちの教会のシステムにはお金がかかり過ぎて、そんなところまで手が回らないというのが本音である。教会堂だの牧師給だの伝道者の養成だのに、ものすごく金がかかっているのだ。このシステムを変えない限り、教会は「この恵みの業に富むように」は、絶対になりようがない。(Ⅱコリント８：１～９：１５）

教会というものが、同好会、愛好会、サークル、クラブのようなものであり続けようとするならば、西欧的な　個人主義者の集合､「協会」であり続けようとするなら、現状のままでも良いだろう。しかし、教会が神の目論まれたように、キリストの代理者として生きようとするなら、このままであって良い筈はない。

ところで、今年日本に一時帰国したとき、何人かの牧師に驚くべきことを聞かされた。日本の教会では、正式の集会以外で信徒たちが自由に集まったり、会ったりすることを禁じている場合が、いまだにかなりあるという。２０年以上も前、わたしがまだ日本で働いていた頃、そんなふうにやっている牧師もいないではなかった。だが、そんなことがいまだに行われていることに、わたしは愕然とした。こんな事を強制する理由は、信徒が勝手に集まると問題を起こすからだというが、とんでもないことである。

教会の交わりは、教会の集会だけでは不充分だ。集会は交わりのほんの一部に過ぎない。 信徒の交わりは自主的で、非公式で、自由なものでなければならない。集会以外に信徒たちが自主的に交わりを持つことこそ、大いに勧められるべきことである。それが弱いもの、貧しい者

を助けることに向かえばさらに良い。ときには牧師への批判や、悪口がちょっぴり混じってしまっても、牧師さえそれを我慢できるおおらかさを持っていたら、問題はない。信徒の自由な交わりを拘束するのは、信徒の権利を蹂躙することであり、教会の基本的性質に対する反逆である。これは単なる牧会上の誤りではなく、教会そのものにたいする挑戦である。

※※※　　ここでまた、ニュースが入って来た。わたしの管轄下にある山岳奥地から出て来た、若い信徒たち５人が乗り合わせたジプニーが、急な坂道でブレーキに故障を起こし、崖下に転落した。たくさんの死傷者を出したが、信徒５人の内の２人が死に、３人が病院に運び込まれたという。とりあえず、日本の教会から送られて来た古着を売って作った、緊急賛金を出すことにして、今後の対策を練る。「もの凄まじい」ポンコツ車が活躍しているこの国には、事故がとても多い。ちなみに「ジプニー」とは、フィリピンではどこでも使われている、乗り合いのトラックで、日本からの中古車や廃車の部品を組み合わせたものが多い。もともと、米軍が用いていたジープ型の車を改造して作ったところから、この愛称が生まれた。

話を元に戻して・・・・・・イスラエルの民の間では、昔から「シャローム」といって挨拶を交わした。初代の教会でも同じである。「シャローム」とは神様のお与えになる平和という意味であるが、単に争いのない状態、つまり、生物がまったく死滅してしまい、まったく争いの起こりようもない平和といったものではなく、営々とした人間生活のある平和である。 神様の正義と秩序のなかにある、満ち足りた生活である。教会は、この世とこの代における神の国の具体的な現れ、神の支配の実現として、このシャロームを具現化するのである。ひとりひとりはこのシャロームを体験するのである。

☆☆☆☆　　伝道　　☆☆☆☆

さて、次は伝道であるが、これについては今さら述べる必要はない。伝道は単に教会の四つの基本的働きであるだけではなく、教会がこの世に遣わされ、この世に存在し続けなければならない理由、すなわち教会のミッションである。伝道のない教会は、教会としての目的を失ったものである。

もしもわたしたちの教会が、この四つの働きを確実にやり遂げているならば、会堂があろうがなかろうが、神学校を優秀な成績で卒業した牧師がいようといまいと、日曜礼拝会が開かれていてもいなくても、そんな事は大した問題ではない。教会が会衆政治形態を取ろうと、監督政治と長老政治をごちゃ混ぜにして、２で割ったものを取ろうとかまわない。国家教会というはなはだ問題の多い形だって、ある特殊事情の中では認められる。教会が一つの政治形態を聖書的とするのは、おおよそ的外れな議論である。教会がこの基本的な４つの働きを忠実に果たしている限り、婦人会だとか青年会だとか日曜学校だとかいうものもあってもなくてもよい。あるがために、あの四つの働きが充分にできないとすれば、さっさと取り除いたらよい。無いがために充分にできないならば、早速作るのが良い。

「賜物の機能による動きの遂行」

次に取り上げたい普遍的教会の不変性は、教会の働きとは賜物の機能によって遂行されるものだということである。教会の四つの基本的働きはもとより、それが四つのどれに属するかはっきりしないような働きまで、教会の働きと言われるものはすべて、賜物の機能によって進められるように定められている。

ここで言う賜物の機能とは、立場とか地位とか学位とか職制などによる働きに対峙する。たいがいの教会の働きは、牧師や伝道者や宣教師、あるいは役員だの、日曜学校教師だのという、正式な立場と地位を与えられている人たちによって、仕切られている。そのような立場や地位は、必ずしもそれにふさわしい賜物、すなわち、能力や性質があるから与えられるとは限らず、むしろ反対の場合が随分ある。賜物を持たない者が立場を与えられたために、教会の働きがとどこうっているだの、賜物を持っている者が立場を与えられなかったために、賜物の持ち腐れになってしまい、結果として教会の勧きが犠牲になっている。そのような現実は、もう見過ごしにできないほど明白である。

簡単な話が、多くの教会には牧師より説教の上手な人が何人もいる。しかし、彼らの大部分は滅多に説教をさせてもらえないし、しようとも思わないように育てられている。これを宝の持ち腐れと言わずに何と言う。訪問の働きも、聖書研究会で教える働きも、カウンセリングの働きも、未信者を信仰に導く働きも、病気の人のために祈る働きも、教会の計画を作り、プログラムを組む働きも、伝道会の一切の準備と実行の働きも、牧師や伝道者や宣教師より上手に、賢く、手際良くできる、あるいは今はできないがすぐにも出来るようになる、可能性を持った信徒が１人や２人はいるものである。 ところが、そういう人たちの能力が充分に生かされている教会、すなわち賜物の機能によって活躍している教会は、あまり見たことがない。わたしたちの教会は腐った宝のごみ捨て場になっている。

わたしたちが、立場だの地位だのによって教会の働きをしようとすると、神が計画された教会の働きができなくなる。神が計画なさった教会の働きは、神がお与えになった賜物を充分に自由に活用させることによって、自然にできて行く性質のものである。神が信徒に説教ができる能力をお与えになったのは、彼がそれを謙遜に隠しておくためではなく、かえって積極的に、最大限に用いて働くためである。牧師の説教だけでは足りないから、他にも説教者を与えて下さったのである。牧師の説教は学問的であるかもしれない。説教学的にも整っているかもしれない。ところが、日常生活に対する配慮と適応が欠けている。力強く雄弁な叱咤激励であるかもしれない。しかし、優しい心くばりが欠けている。だから、神は聖書の教えを浮き世の営みの繁雑さの中で説き、とつとつと、しかし丁寧な優しさで語ることができる信徒を与えて下さったのである。牧師は大人数を相手に、講壇をぶっ叩きながら天も裂けよとばかりに説教できるが、２人３人を前にして、お茶を飲みながらじっくりとは説教はできない。だから神は、家

庭を訪ね、オフイスをおとずれ、説教できる信徒を与えてくださったのだ。

少し前の日曜日のこと、出席しようとした山岳地の教会へ行く道が閉ざされ、しかたなく取って返してバギオ教会に出席した。英語の日曜学校の大学生のクラスに出てみると、２年半位前に救われた、なかなか熱心で能力のある大学生のひとりが、一所懸命、再臨について教えていた。本当のところ彼の成長を見て、少々感動したのだが、出席していた１２０人くらいの中には 、４年５年の信徒がかなりいたし、以前は日曜学校で教えていた者も何人か見られた。授業が終わって少しばかり時間があったので、教えていたこの学生が、「めったに顔を見せてくれない、わたしたちの忙しい宣教師が来てくださったから、一言お願いします」とわたしに講壇を譲ってくれた。そこで、こう憎まれ口を叩いた。「君たち、こんなところに大勢で集まって何をやっているの。日曜学校だって？　でも、生徒の中には以前は教師をやっていた人もいて、教えた兄弟の３倍も知っている年季の入った信徒だっているじゃないの。君たちのやっているのは日曜学校ではなく、日曜学校ごっこだよ。自分のほうがずっと上手に、詳しく教えられるのに、謙遜なふりをしてじっと座って聞いているなんて、愚の骨張だよ。どうして、そんな無駄なことをするの？ よし、いいことを教えてあげよう。次の日曜日には、ここで勉強するのは２年未満のクリスチャンだけにしなさい。２年以上のクリチャンは2人ずつ組になって、この時間、近所の家を訪問し、道端に出て行き、公園に入って聖書を知らない人を見つけ、聖書の話をしなさい。キリストとその救いの話をしなさい。君たちの賜物が腐りかけているよ」

ひどい宣教師と思わないで欲しい。このくらい言うためには、普段から牧師とも信徒とも充分な心の交流ができていなければならない。日曜日にこの教会を訪れることはなかなかできない相談だが、開拓を始め、責任を持っている宣教師として、毎週何回も押しかけ、牧師とも信徒ともいろいろ喋り、相談し計画を練っているのである。そこで結果だが、つぎの日曜日には３０組くらいの大学生が外に出て伝道をしてきた。これが何回か続き、これを通して救われた者が今もたくさん礼拝会に出席している。

ただし、何事でもぱっと始めて、さっと止めるのがフィリピン人。この性格を彼ら自身「ニーナス　コゴン」すなわち「藁の火」と表現する。ボッと燃えてパサッと消える。これに比べると日本人はコークスである。ちょっとやそこらで火はつかないが、いったん燃え始めると何千度もの高温で長い間撚え続ける。・・・・ と言いたいところだが、むしろ雪に埋もれた開拓時代の北海道の、薪ストーブに投げ入れられた湿ったシナの木のようだと思うことがある。なかなか火はつかないし、ついても、グジュグジュといつまでもくすぶり続けているかと思うと、知らない内に消えている。ま、とにかく、ご多分に漏れず、この時も燃え上がった情熱の命は短く終わったようである。それで今はもとにもどって、１００人くらいのクラスをふたつ、だらだらと続けている。「またその内に、一発かましてやらんといかんな」と、意地悪な宣教師は考えている。

聖霊が信徒を教会にバプタイズして下さったとき、聖霊は信徒がキリストの体の一部として機能するように目論み、機能できるようにバプタイズして下さったのである。「いぼ」になるためではないことはすでに述べた。神はすべての信徒を機能するものとして、機能できる形で教

会に賜物として与えて下さったのである。教会の働きはその賜物の機能によって推し進められるものである。

ところが教会はいつの頃からか、「聖職」という観念を発達させ、「召し」の概念を盛り込み一般信徒と特別な地位と立場を持つ者との間に、大きな溝を作ってしまった。日本語では、一般の信徒は「平信徒」と呼ばれてきた。これが差別用語でなくて何であろう。信徒は怒るべきである。用語はともかく、概念に対して怒るべきである。神はそんな差別を教会に持ち込まなかった。教会では誰もが信徒なのである。すべてが基本的に同じ立場に立つ信徒なのである。

なるほど、新約聖書には、使徒、預言者、伝道者、牧師、教師、などという名前が出てくる。多くの人たちはこれを役職と考えているが、それは間違いである。確かにそれは役であり、役割であり、仕事の分担であり、そのように呼ばれた働き人であった。ところが、それは現代の職、すなわち牧師職とか伝道者職とは随分異なっていた。

現代では一般に「聖職」と呼ばれる職がある。その職務に本当にふさわしい人物であるかどうかという審査は、とても、非常に、物凄くないがしろにされたまま、ただ、必要な学歴と２、３のクリスチャンとしての生活態度のチェックと、聖書学校か神学校の卒業証書が要求されるだけである。特に、日本では伝道者不足が深刻であるから、伝道者になりたいと言う者があれば、少々おかしくても、「神様の奇跡的お取扱い」を信じて聖書学校へ送り、神学校に突っ込んでしまう。学校としては小人数より大人数のほうが、意気が上がるし、経費も割安になるから・・・・・・外国の教会に献金をアピールするにも、人数が多いのに越したことはない・・・・から、少々のおかしさなら我慢をしてしまう。しかも現代のわたしたちの学校教育は、多くの場合、学問偏重で、実際的能力の開発と訓練に欠けている。すでに述べたように、学校は弟子造りに向いていない。

こうして、その人間が確かに伝道者、牧師としてやっていける人物かどうかという厳しい審査がされないまま、その「聖職」に任命されてしまうのである。恥ずかしながら、わたしの卒業した学校もその例に漏れなかった。だから、「幸いにも」わたし程度の人間でも卒業して、宣教師をやって来ることができた。

その上、こんな具合で聖職者になった者が、聖職者の権威を振るって、教会の働きを一人占めしようとする。悲劇である。・・・・・・わたしもかなりの長い間、この悲劇を演出してきたものである・・・・。

新約聖書に挙げられている様々な役割は、聖職ではなかった。むしろ実際的働きで、伝道者の機能を果たしていた者が伝道者と呼ばれ、牧師の機能を果たしていた者が牧師と呼ばれたに過ぎない。つまり、彼らは自分に与えられた賜物を生かして働いて行くうちに、その賜物による働きが教会全体に認められ、牧師と言われ、伝道者と呼ばれ、あるいは使徒、預言者と記されるようになったのである。預言の賜物もないのに、予言者という役職に任命されたから、預言者として預言をしなければならないのではなく、預言者という職は持っていなくても、与え

られた預言の賜物を生かして預言をし続けることによって、やがて、教会全体に認められて預言者と呼ばれるようになったのである。預言者という役職は、祭司という役職と共に、キリストの働きの完成によって廃止された筈である。新約の時代には、キリストの贖いの働きの完成のゆえに、祭司と言う役職が廃止されたにもかかわらず、パウロをはじめ多くの信徒たちは祭司としての機能を果たしていた。おなじように、預言者という役職は廃止されていたが、多くの者が預言者としての役割を果たしていた。

使徒職という言葉はごく一般的で、ほとんどすべての聖書注解者や神学者が、使徒職と言うものがあったという前提で、いろいろなことを言っている。だから、普通の牧師も伝道者も、使徒職があったと決めてかかっている。しかしそのような先入観を持たずに聖書を調べると、聖書の語っているのは使徒職ではなく､使徒の機能というべきものであることが明らかである。使徒職と言うものが確立し、そこに大きな権威があったと理解するには、新約聖書で「使徒」という言葉がかなり曖昧に、つまり定義なしに、いろいろな人に対して用いられていたことが問題である。また、いわゆる１２使徒の権威にまったく注意が向けられていないこと、さらに、かえって、使徒ではなったヤコブが、かなりの権威を伴った重要な働きをしていたという記録も問題になる。パウロが自分の使徒としての身分を弁護したときも、使徒として召されたと主張せず、自分のしてきた働きの使徒的性格に訴えている。彼が使徒だったから、することなすことすべてが使徒的働きになったのではなく、彼の働きが使徒的性格を強く持っていたから、使徒だったのである。

ところが現在のわたしたちの教会は、多くの責任の付髄した牧師という職を先に定めてしまい、それに誰かを無理にでも当てはめようとしている。職が制定され、働きが取り決められ、誰かがその役割を果たさなければ、教会は立って行けないから、たとえ、その役にあまり適していない人物でも、我慢をして迎え入れなければならない。反対に、たとえどんなに牧師としての賜物を持っている人物でも、たとえば彼がすでに結婚して家庭を持っていると、聖書学校や神学校などで、聖職者としての正親の教育を受けることが非常に難しくなるために、牧師になるのは例外的な出来事となる。牧師にならなくては、牧師に定められた働きをすることはできないために、牧師としての賜物を用いる機会も与えられない。賜物が用いられないと腐ってしまう。キリストのタラントの譬えによれば、取り上げられてしまう。そういうわけで、わたしたちの教会では、賜物を持たない者が、持っていない賜物を用いようと悪戦苦闘し、賜物を持つ者が、持っている賜物を用いないように四苦八苦している。ない袖は振れないが、ある袖を隠しておくのも難しい｡このような教会が､力強く使命を果たすことができると思いますか？

聖書的教会の働きは、牧師だの伝道者だのという聖職者によって、定められた職務に従って進められるものではなく、信徒全員が、神に与えられた賜物を最大限に活用させることによって、進められるのである。

牧師の働きはこの賜物という宝の山を前にして、その宝をどう生かして行くかという一点にかかっている。いかにしてこの種々雑多、多種多様、さまざまな成長過程、発展途上にある賜物を上手に整理し、活用できるかである。多くの賜物の自由な活用を放任しておくと、それこ

そ目も当てられないことになりかねない。だからといって押さえ付けると、不満が爆発したり、腐って死んでしまったりする。 信徒一人ひとりの賜物を探り出して理解し、それを教会という共同体の働きの中で、すなわち他の信徒たちの賜物による働きとの関係の中で、いかに滑らかかつに効果的に協調させて用いるか、全体が最善の活動をし、最善の恩恵を受けられるようにするかである。現在の牧師伝道者にとって最も大切な働きは、賜物を探り出し、研ぎ上げ、調整して、活動できるようにすることである。

信徒たちは問題を起こす。ある信徒たちは知らず知らずの内に、ピリピの教会の女性指導者であったユウオデヤやスントケのように、個人的な競争心に駆られて争いを起こすだろう。他の者は背伸びをし過ぎてひっくり返るだろう。牧師より仕事のできる者も出現して、牧師の面子と立場が危うくされることもあるだろう。教会全体の成長より、自分の能力に溺れたり、自分の名誉のために真剣になったりする者も現れて来て、頭痛の種にもなるだろう。とはいえ、それらは産みの苦しみである。 わたしは今、産めない悲しみについて話しているのである。産みの苦しみは、産めない悲しみの深刻さに比べると取るに足らない。

しかしこれらの予想される問題も、上手に信徒を教育して行けばかなり避けることができる。特に、キリストの体としての教会は、愛し合い、協調し合うものだということが充分に徹底して教えられていると、問題はあまり発生しないし、しても大きくならない。ここで、はっきり警告しておく必要があるかもしれない。現在のわたしたちの一般的教会観、欧米から輸入された個人主義の教会観を引き継いだまま、わたしの言っていることを試すと必ず失敗する。 個人主義がたとえ完全には捨てられなくても、「小さく、小さく」されなければ絶対に不可能なのである。

欧米個人主義の一つの侍徴は、競争が正当化され、美化されているということである。アメリカなどではそれが徹底している。子供の頃から常に競争の中で育てられ、他人の上に抜きん出ることを教えられ、励まされ、強要される。そしてうまくいった暁には、誉められ、賛えられ、報いられる。賞をもらい、メダルをうけ、奨学金を支拾される。能力のある者はどんどん上に昇る。あちらでは「出る釘は打たれない」ばかりか、もっともっと出るように励まされる。

一方負けたときの教育も、上手にできているように思う。アメリ力人の「負けっぷり」の良さには、すがすがしさを感じるほどで、ほとほと感心させられる。勝者の敗者に対する態度も、惚れ惚れさせられる。しかしその点、個人主義の土壌の無かったアジア諸国の人たちは、競争こそかなり輸入しているが、負けっぷりの良さはまだ輸入できていない。日本人を含めたアジア人の負けっぷりの悪さ、醜さ、そして勝った者の汚さ、醜悪さはひどいものだ。勝った者は負けた者を滅ぼさずには我慢ができない。負けた者は何が何でも、勝った者に一矢報いずにはおれない。

アメリ力人は、アジア人も自分たちと同じように個人主義、民主主義の基本をわきまえているフェアな人たちであると思い込んでいる、あるいは、少し教育さえすればフェアになると、楽観的に考えて物事を進めてきた。そしてアジア人がアジア人のやり方で、すなわちアメリ力

人から見るとフェアでない方法でアメリカ人に対応すると、彼らは怒り、憤り、悲しみ、興奮し､当り散らし､報復処置を取ってきた｡たしかに､アジア人にはフェアでないところがある‥‥というのは、わたしがアメリカ的だからか。

こういう欧米文化の中で生まれ、育てられてきた教会の感覚、牧会の働きというものは、自ずと、聖書的なものとは異なり、わたしがいま言おうとしていることにも合致しない。彼らは教会の中にも競争意識を持ち込んできた。ここフィリピンはアメリカの植民地だったこともあって、直接、アメリカの影響に晒されている。そのため弊害も直接的である。青年たちが集まれば、やれ聖書知識競争だ、器楽演奏コンクールだ、合唱コンクールだ、独唱コンクールだとやっている。勝者は地域の大会に出、そこの勝者は全国大会に出、そこの勝者は聖書大学の奨学金がもらえて、4 年間ただになる。こんなことで牧師職を与えられた輩は、当然競争ばかりして、協調とか強力ということとは無縁の牧師になる。こんな連中が面子のために教団の選挙に打って出る。 汚い金をばら撒いてでも票を買おうとする。実話ですぞ！！　だから、自分の地位と名誉を相対的に高める、同僚の牧師の失敗は大歓迎で、そのために画策さえしたりもする。わたしの一番嫌いな人種である。 アメリカでは勝ち方も負け方も比較的奇麗である。アジアでは醜いことこの上ない。

日本でもこの競争意識がますます強くなってきている。それが教会の中でも大いに巾を利かせている。信徒たちの間ならばまだしも、牧師たちの間でもかなり激しい。教団の選挙なんてのは、何とかならないものでしょうかね。あれがあるために教団上層部ではいつもぎくしゃく確執が邪魔をして、一致にひび割れが入っているように見受けられるんですが、私の目ががちゃ目だからでしょうかね。みんないい人たちなんだけど、選挙になるとついつい弱さが表に出てきてしまう。一人ひとりの霊的成長もさることながら、システムも悪いのですよ。

２千年前のユダヤという国では個人主義は発展していなかったとはいえ、面子や誇りなどに根差した争いは後を断たなかった。１２弟子たちも、自分たちのうち誰が一番偉いかと、何回も、口角泡を飛ばして騒ぎ立て、そのたびにキリストに厳しく叱られている。だから聖霊の知恵に満ちていた初代の教会は、選挙をしても決戦投票をしなくて済むようにくじを引いた。恨みっこなしですよ。 くじ引きは民族としての知恵でもあったのでしょうね。神に選ばれた民として、神から与えられた知恵でしょうか。彼らは民主主義の原則よりも、神様の干渉を信じていたのですね。うちの教団もこれを取り入れたら、だいぶ平和になりますよ。それとも、現代は神の干渉はあり得ないことになっているのかな。だから民主主義の法則に則って、最後まで投票で争わなければならないのでしょうか・・・・・。自分の教団の悪口を言うのは、剥げかかったかさぶたを剥ぐ、あのチクチクとしたささやかな興奮の心地よさがありまして・・・・。でも聞くところでは、他に、もっともっとひどい教団が随分あるとか・・・・。

わたしたちの団体でも積極的に取り入れてきたあの三つのセルフ、自主経済、自主政治、自主伝道も、それがここ１００年間世界中て受け入れられてきた基本的な宣教概念であり、それなりの効果を上げたものであったとしても、決して聖書的な概念ではない。むしろ聖書の教えに真っ向から対立するものである。この教えは教会の孤立化、牧師の 「ほっといてくれ」「わ

れ関せず」の態度に拍車をかけ、教会の私物化の悪癖を助長してきた。大体、独立教会だの単立教会なんぞというものは、「武士は食わねど」の背景からはあたかも立派に聞こえるが、これほど非聖書的なものも滅多に無い。これは、子どもは成人したら親を離れ独立するものであるという、ちょっとだけ聖書に根差した欧米の個人主義思想を宣教に適用したものであって、聖書の教会観とは何の関わりもない。

言っちゃ悪いが、単立教会とか独立教会の創立者の多くは、他人の言うことに従えない人々である。神様の言うことには耳を傾け絶対に従う謙遜な人物だが、兄弟姉妹の言うことには耳を貸すことも嫌いな人物である。だから、自分の好き勝手にできる単立や独立を選ぶ。そして、自分たちの働きが少し大きくなると、独裁者になっていく。そういう人たちが互いに、「神様はこうおっしゃった」と主張し合いながら、醜い争いを続けている。・・・・・これはフィリピンの話で、日本ではそんなことはありえない・・・・・・と望みたい。

では聖書の教会観ではどうなのか。教会はキリストの体であって、おのおのはその一部である。そこにあるのは競争ではなく、協調である。インディペンデントではなくインターディペンデントである。独立ではなく相互依存である。

わたしたちの教会は、個人主義の悪しき伝統から離れ、聖書の教える相互依存主義に戻らなくてはいけない。これは現代社会の流れに逆らうものである。現代は世を上げて個人主義、個人主義である。しかし、この個人主義では「宇宙船地球号」は破滅してしまうこともはっきりしている。今、欧米諸国でも、新しい共同社会の概念が模索されている。だが、そんなことがわたしの関心事ではない。わたしが言いたいのは、教会が正しい共同体の理解を回復することである。

そうすると、教会から個人主義の考えと行動が少なくなり、信徒たちは自分を共同体の一員として、その責任と役割を持つものとして把握することになる。自分に任せられた賜物を自分のために用いるのではなく、教会全体のため、そして神の栄光のために用いようとする。自分の益でも名誉でも人の誉め言葉でもなく、教会の益、神の栄光を最初に求めるようになると、たとえ、自分が低くされ、他の者が高くされようともそれを大いに喜べる。

こうなると教会の基本的人間関係まで変わってくる。教会の構成員の一人ひとりは自分が他者の役にたっている、助けになっている、益になっているということに自分の存在価値を見出す。牧師は一人ひとりの信徒が教会全体に有益な機能を果たせるように世話をする。牧師同士は互いに競争相手ではなくなる。大きな都会の豊かな教会は当然のこととして田舎の貧しい教会を助ける。いや、助けるなどという言葉も使わない。小さな田舎の教会がなければ、都会の大きな教会の発展も難しかった事を良く理解して、感謝をもって、「献金を送らせていただく」ことになる。北海道の氷に閉ざされた教会も、北陸の雪に埋もれた教会も、四国のはずれの教会も、そして九州の山間の教会も、みんな大切なわたしたちの一部である。彼らがあって都会の教会があるのだ。彼らは都会の教会ができない働きをしているのだ。そこで働く牧師は 「能無しで田舎でしか勤まらない」連中ではない。あえて困難な田舎で働いていてくださる大切な

方々であり、田舎の働きのための賜物をもった方々である。都会の教会は感謝をもって献金を送らせていただくべきだ。私の知る限り、たいがいの都会の教会には、かつて田舎で救われ、育てられ、今は都会で生活しているという忠実な信徒がいる。都会の教会は彼らの什一献金の半分を、田舎の出身教会に送り返させていただいても、バチは当るまい。

教会は全員が一つなのだという認識と自覚をもって生きる。みんなが賜物を持っているのだという理解で、互いに相手の賜物が用いられていることを、感謝し、自分の賜物が他者の益になっていることを喜ぶ。それは教団単位でも、国際的にも適応されるべきものである。教団が単に自主独立の教会の便宜上の同盟にすぎないと考えるのは、個人主義民主主義に毒された会衆主義者の誤りである。わたしたちの教団の母胎とも言えるアメリカの団体は、創立当時のいきさつ上、強い会衆主義の傾向を持つが、日本の教団は幸い会衆主義を取らなかった。ただし、たとえ会衆主義の教会同士であっても、ひとつであるという霊的事実は存在し、その霊的事実を実践することは充分に可能である。反対に、長老主義、あるいは監督主義が、即、一致のある教団とは限らない。

要するに賜物の機能による働きとは、個人個人の賜物の価値を認め、個人個人の可能性を引き出し、生かして行くことによって成し遂げられる働きである。それらの賜物はあくまでも教会という共同体に与えられたものであり、個人の損得勘定とか誇りのために用いられてはならないものである。特に競争意識を徹底的に避けておかなければならない。このためにパウロはピリピ人への手紙を書かねばならなかった。これが警告である。鍵は謙遜である。共同体というものがまだ完全に失われていない、日本に育った方々には、これが、少なくても欧米人よりは良く分かるはずである。

賜物の機能による働きを推し進めるには、教会に対する強い信頼が必要である。どういうわけか、わたしたちは教会を弱い羊の群れ、何から何まで羊飼いに世話をしてもらわなければ、一刻たりとも生きていけないものとして見る見方に慣らされてきた。教会は迷いやすく、獣の餌食になりやすい。だからいつも牧師にそばにいてもらわなければならない。彼に導いてもらい、守ってもらわなければならないと、何となくそう感じさせられて来た。 教会が弱い羊の群れであるという理解も、もちろん正しいものである。しかし教会は、一方では陰府の力もこれに打ち勝てない、力強い神の軍隊であり、神の力と権威を帯びた大使であることを忘れている。実際、聖書を読むと教会は弱い羊としてよりは、圧倒的に強い神の軍隊として語られている。キリストの体と言う表現にも、弱々しさはない。 むしろ、キリストの働きをぐいぐい推し進めて行く、強靭さが溢れている。

牧師の働きは、そうすると、弱く頼りない赤ん坊のお守のような働きではなくなる。雄々しく猛々しいつわものたちの集まりである、軍隊を指揮するような働きである。しかも、作戦本部に引きこもっている将校ではなく、戦線の最先端に真っ先に躍り出て戦う軍曹である。状況と一人ひとりの兵士の能力に応じて、臨機応変、迅速、活達。

軍曹はたいてい、２等兵から実戦で叩き上げてきた百戦練磨の、言うならば戦闘の「通」、最

前線の「玄人」である。陸軍大学だの海軍士官学校を出たエリートではない。天下国家のことを論じるのは苦手だが、実際の戦闘になったら、エリート将校もとてもかなわない。わたしたち教会にはこのような実践的牧師がたくさん必要である。ギリシヤ語だのヘブル語をこね廻し練り上げる、神学校出の牧師、修士号、博士号を持った働き人も必要であるが、戦闘の通である叩き上げの牧師がもっともっと必要である。

教会の力、すなわち信徒一人一人の力を過小評価しないようにしたい。教会が弱々しい羊であるというのは一面の真理である。また、飼い主である神なくしては生きて行けないという意味においては正しい。しかし教会は、陰府の力も打ち勝つことができない、力強い軍隊である。悪魔の支配する世界を、神の国の力によって攻撃し続ける軍隊である。力強い軍隊として教会を見直そう。信徒一人ひとりを猛々しい兵士として見直そう。

教会の働きは、一握りの特殊な地位と立場と学歴を持った人たちによってではなく、教会のすべての会員のすべての賜物によって、成し遂げられるものである。これも教会の普遍的普遍性の大切な一面で、決してないがしろにしてはならないものである。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

やれやれ、飽きっぽいこと天下一品。ちゃらんぽらんなことでは決して人後に落ちない私が、曲がりなりにもここまで書き続けて来た。大変なことですよ。これは・・・・。自分で感心しても始まらないが、やっぱり大変なことですよ。 読み返して見ると、支離滅裂、意味不明瞭、論旨混沌、脱線につぐ脱線で、言いたいことの半分も言えてない。それで、やっぱり止めようかと、挫けそうになる気持をなんとか手なずけて、ここまで頑張って来た。だがしかし、読んで下さっている方にはまったくもって迷惑至極。「いい加減にしろ」とお叱りを戴くことになるのを覚悟している。そこで、幾らかでも論旨をご理解いただくために、ここまでの大まかなアウトラインを示しておきたいと思い至った。

I

手始めは、四つの「でも」のでも伝道の宣伝。

※ 「いつでもの伝道」をすること。
※ 「どこでもの伝道」をすること。
※ 「だれでもの伝道」をすること。
※ 「なんでもの伝道」をすること。

そして以上を補足する意味での四つの原則。

※ 経済的であること。
※ 容易であること。
※ 適応性に優れていること。
※ 増殖的であること。すなわち再生産性に優れていること。

それから、以上の事を本気で実践しようとすると、現在の教会観ではとうてい立ち打ち出来ないことから、じやぁ、教会とは何かという疑問が生じて、その疑問に真っ向から立ち向かうのには、いささか力不足の気後れがしたわたしは、代わりに、もう少し実践的な「どんな教会を建てるべきか」という問題にすり替えた。そして、わたしたちの建てるべき教会は・・・・、普遍的教会の不変性を地域に於いて具現化することであり・・・・・・。その普遍的教会の不変性とは・・・・・・

※　ひとつの共通性を持っている人々の、共同体であること。そしてそのひとつの共通性とは、キリストを生ける救い主として信じ従う信仰であること。

※　この共同体はミッションのために存在すること。そしてミッションとは神の贖いの働きに関わることで、伝道に他ならないこと。

※　この共同体はキリストの代理者として、キリストのミッションを受け継ぐこと。キリストの性質からくる生き様と、ミッションを混同してはならないこと。

※　この共同体は wife として覚えると記憶し易い、四つの基本的働きを持っていること。すなわち・・・・・

礼拝　worship
教え　instruction
交わり　fellowship
伝道　evangelism　であること。

※　この四つの働きを成し遂げて行くのは、賜物の機能によるのであって、地位とか立場とか役職によるものではないこと。

・・・・・と、まあここまで青息吐息で書き綴ってきたつもりである。そしてこれから、普遍的教会の不変性を地方に具現化させる働きの最後として、聖霊による力の賦与ということを取り上げたい。

「聖霊のバプテスマによる力の賦与」

教会の働きは、聖霊が教会にお与えになった賜物、すなわち、聖霊が教会にバプタイズしてくださった人々と、その人々に託された能力によって遂行されるべきであることは、いま学んだところであるが、この賜物をより活発に用いられるようにし、効果的にまた力強く機能させるのが聖霊の力である。

教会史を見ると、聖霊とその働きについては、長い間、ほとんど関心がはらわれないままであった。１９世紀になって、アメリカのホーリネス運動などによって聖霊のきよめの働きに強い関心が集まり、１９世紀の後半になると、聖霊のバプテスマという言葉が、きよめの働きとのかかわりで、頻繁に用いられるようになった。１９世紀の末になると関心は、単なる主観的体験に過ぎない、きよめの働きとしての聖霊のバプテスマから、聖書の裏づけのある力の賦与

としての聖霊のバプテスマへと広がり、一部の人々の間では、異言への関心も高まって行った。はじめうち彼らは、異言は福音宣教のために与えられる、新しい言葉を話す能力と考えたが、まもなくその間違いに気づき、異言は聖霊のバプテスマに伴う印であると考えるようになった。こうして２０世紀に入り、聖霊のバプテスマの大々的な傾注に至り、宣教の力の賦与としての聖霊のバプテスマと、そのバプテスマに伴うしるしとしての異言という考え方が定着した。この理解の上に、ペンテコステ運動の中心的な存在である、アッセンブリーズ・オブ・ゴッドが誕生したのである。

１９世紀のホーリネス運動まで、わずかの例外を除いて、聖霊はいつも、良くて脇役、ほとんどの場合は忘れられた存在に甘んじてきた。その聖霊を、ペンテコステ運動は表舞台に連れ出した。教会の主役に持ってきた。これはわたしたちの目を、２千年前に活動された歴史上のイエス・キリストから、いま生きておられるキリストの霊、教会の内に住み教会を通して働いておられる、キリストの霊に向けさせることになったという点において、非常に大切である。正しくは、ペンテコステ運動が聖霊を表舞台に連れ出したのではなく、聖霊が教会を動かし、ペンテコステ運動を起こしてくださったのである。

聖霊に対する関心が非常に希薄だった頃に構築された、改革派やルーテル派、あるいは長老派などを始めとする伝統的教会の神学では、聖霊についての学びがほとんどできていないことを、知っておかなければならない。１９６０年代になってカリスマ運動が起こり、いま８０年代になって第三の波運動と自称する運動が起こって、これらの伝統的教会の中にも、聖霊の働きに関心を深めている人々がいるが、聖霊に対する理解がほとんどないままに構築された自分たちの神学に、新しいペンテコステ的聖霊の理解を繋ぎ合わせようとしているために、あたかも、木に竹を接いだようなことになりつつある。彼らがこれからどのような方向に向かおうとしているのか、不透明である。ただ彼らもまた、「神は聖霊を通し、教会を通し、今も活発に働いておられる。キリストはただ単に２千年前にお働きになった方としてではなく、聖霊を通し、教会を通し、今も働きを続けておいでになる方として、信じ崇められなければならない」という理解においては、わたしたちと共通である。

ただ、異言を伴う聖霊のバプテスマと聞くと、伝統的な教会の人々はもちろんのこと、カリスマ運動や第３の波運動に属する人々の中にさえ、身の毛がよだつとおっしゃる方々もたくさんいらっしゃることと思う。伝統的ペンテコステ派に属するわたしも、随分身の毛をよだたたせてきた。特に感情に流される傾向のある人たちの、聖霊のバプテスマに関する言動には、すでにバケツにたっぷり一杯ほどの冷や汗を流してきた。だからしょっちゅう聖霊のバプテスマ風邪をひき、聖霊のバプテスマ・アレルギーを起こしている。

またカリスマ運動の中には、聖書の教えと関係のないさまざまな現象を強調する傾向があり、彼らとの付き合いも多いわたしは、さらに、新しい冷や汗を流すことになっている。しばらく前、すぐ近くにあるフィリピン・ミリタリー・アカデミーという士官学校の副校長さんが、わたしたちの聖書研究会で救われた。エキサイトした彼は自分の立場を利用して、この学校で伝道会を開いた。メイン講師には当時映画やテレビで活躍していたタレントで、少し前にカリス

マ運動で救われた人物を連れてきた。わたしも乞われて出席した。どうも全体にエキサイトし過ぎて、嫌な予感がしたものである。

この学校はフィリピン第一のエリート士官学校で、始業式や卒業式には必ず大統領が出席する。この国の大将や指導的な地位にある者の多くが、ここから出ている。最近のクーデター騒ぎの張本人たちの多くもここ出身である。士官候補生全員、多分７００人前後が体育館に集まり、集会になった。講師は自分の「感動的体験」を語った後、「キリストを救い主と信じる者」の決心、いわゆる救いの決心を迫った。 ほとんどがカトリックの背景をもち、講師に恥はかかせないという、「美しい道徳」をわきまえているフィリピン人エリートたちは、例外なく手をあげた。 それに勢いを得た講師は、続けて聖霊のバプテスマのために祈りだした。 説明もなにもない。 わたしは「そら来た」とばかり心備えをした。

わたしの心配は、ペンテコステ派の人々が、７０年も前からしばしば陥った誤りを、カリスマ運動の人々がぶり返していることだ。彼らの間違いの一つは、「スレイン」、文字通り訳すと「殺される」という現象に関するものであった。わたしたちが祈ると、どういうわけか目の前の人間たちが、信者と未信者の区別もなく、バッタバッタとぶっ倒れるのである。わたしもこれには少々閉口した。集会などで「下手に」祈ると、特に手などを置いて祈ろうものなら、みんな、ばたばた、ぐにゃり、へなへなと倒れ伏してしまうのである。カリスマ運動の人たちはこの現象を特別に大切にして、聖霊の働きの証明、あるいは聖霊のバプテスマの証拠にまでしていた。ここが問題である。これをテレビ番組で流して、霊的巨人として名声を博した伝道者もいた。

しばらく聖書研究会に出席していた美容院のかみさんが、少しの間、顔を見せなかった。道ですれちがったときに聞くと、祈られるたびに倒れるので、頭を硬い床にぶっつけるのではないかと心配で、出席を見合わせているという。中には自分に霊的力がある事を見せ付つけようとして、手を置いて祈るとき無理やりに押し倒そうとする、肉体的力に溢れた伝道者も、相当いた様子である。

そんなことで心備えをしたのである。講師は始めからみんなが倒れることを期待し、なんと言ったか忘れたが、あの、わたしたちがラジオ体操をするときにとる両手間隔で立つように、全員を並び替えた。相手は士官候補生、ビシッと決まって並び立った。それから、講師は聖霊のバプテスマのために祈り出した。わたしは集会前、少なくても、倒れる現象は聖霊のバプテスマではないということを、講師に理解させたが、実際の集会になると、もう興奮してしまってそんな理解はどこかに消し飛んでしまうのを、経験によって知っていた。しょうがないから、わたしも真面目に祈りに加わって、一人ひとりにもういちど救いを説明し、聖霊のバプテスマについて簡単に話し、そして祈った。ところが、体育館全体は興奮に包まれて、次から次と士官候補生たちが倒れはじめ、収拾がつかなくなり始めた。昔で言うなら甲種合格のいかつい候補生たちが、堅いコンクリートの床にドサッと倒れないように、後ろに回って支えながら、寝っ転がるのを手助けしてやるのが精一杯であった。ふと見渡すと、候補生のおおかたは既に芋虫のように転がっていた。しかし、異言を語っている者は一人もいないようであった。次の日

から、わたしは時ならぬ腰痛に悩まされた。

これが契機になって、この学校でも聖書研究会が開かれるようになった。ただし、この伝道会にたいする士官候補生たちの反応は、みな一様に懐疑的で否定的であった。倒れたという事実は認めるが、それが、神の業であるとは認めることができないようであった。奇しくも、わたしの見解と同じである。そのあとの聖書研究会への招待を、わたしは丁重に断った。わたしは共産ゲリラが多数出没する山岳奥地で、互いに遭遇することを上手に避けながら働いていたからである。わたしは彼らの主義主張と真っ向から対立する宣教師であり、わたしの名は、彼らの間でも広く知られていたらしいが、彼らは、わたしの貧しい住民支援の働きを認め、わたしが彼らの支配地を徘徊するのを黙認していたのである。だから、もしもわたしが士官学校に出入りしていると噂が伝わると、わたしが最も力を入れている、この山の奥に入ることはできなくなる。

恍惚状態になったり倒れたりする現象は、あるいは正真正銘の聖霊の働きであるかも知れない。ところが、そうでないことも随分あるだろう。ある種の心理状態が作り出されるらしい。始めから倒れたくて来る人たちもいる。彼らは倒れることが聖霊の恵みを受けることだと思っているらしく、聖霊の恵みを受けたと思われたいために倒れる。ただ、このような事があったからといって、真実の、聖書的な聖霊のバプテスマが否定されてはならない。わたしが集会を主催したり、説教をしたりする場合は、しばしば倒れる者が出ないように注意した。倒れて騒ぐより、わたしが語る聖書の教えに耳を傾けなさいと指導した。もちろん、自然に倒れることは容認しておいた。わたしたちペンテコステ派と言われる中の正統的交わりに属する者は、この運動の発展途上の混乱、誤り、過ち、行き過ぎを素直に認めなければならない。ただし、たとえそうしたとしても、もう少し自分たちの神学に自信を持っても良いと思う。

例えば、わたしの属しているアッセンブリーズ・オブ・ゴッドの神学は、実に穏健で正統なものである。その聖書観、神観、贖罪観、その他どの分野を取っても非常に穏健な正統信仰である。さらに聖書解釈にもあまり無理がない。自分たちが伝統的に金科玉条にしている神学を持ち出して、その神学に沿って何でも理解させようなどと言う無理強いはないから、イスラエルと教会を同一視したり、洗礼と割礼を同一視したりすることもないし、幼児洗礼なんぞというカトリシズムの卵の殻を尻にくっ付けたりもしていない。ディスペンセーショナリズムではあるが、これもとても非常に穏健で、スコフィールド聖書の言うことを、そのまま受け入れている人に会った事はないし、ここ２０年間、この聖書を持ち歩いている人にも会ったこともない。だから、新約聖書が書かれた時代と現代に、ディスペンセーショナルな差を付けることはしないし、使徒の時代に起こった事柄は現代も起こり得ると信じている。 また、瞬間的きよめも第二の恵みの業も主張しない。

・・・・・だからしばらく前、ペンテコステ信仰に対する決定的な打撃の著書として随分話題をさらった、ブルンナーの「聖霊の神学」(The theology of the Holy Spirit)の攻撃も、いささか的外れである。また、極端なカルビン主義は排するが、神の主権を明確にするという点を評価する一方、人間の自由意思と罪にたいする責任を認める。

わたしは「ペンテコステ教会には神学がない」という自虐的通説を信じて来た。そしていつも、伝統的福音派諸教会にたいして、何となく、こう、引け目を感じて来た。しかし本当は、「自分たちの神学」をあまり必要としていなかったのである。もちろん、わたしたちは神学よりも実践に力を注いで来たということもあったが、実は、わたしたちの神学は聖霊に関わる事柄以外は、あまり取り立てて論じるべき特徴を持っていないのである。他の正統的な福音派諸教会の神学を寄せ集め、それぞれの極端なところ、少々無理な聖書解釈をして、我田引水をしているように思える点を排除してまとめると、わたしたちの神学になるのである。

とはいえ、わたしたちにも我田引水がなかったというのではないし、これからもそういうことはしないだろうというのではない。ただ、あまり重々しい神学的伝統を持っていないだけ、聖書に素直になりやすいというのが有利である。この素直に聖書に向かう態度こそ、わたしたちの最も大切な遺産である。これからのわたしたちは、この遺産を生かしてより聖書的な神学、聖書神学を基盤とした聖霊論、教会論そして宣教論、牧会論をうちたてて行かなければならない。

最近に至って、ペンテコステの神学がかなり使徒の働きに頼っているところから、使徒の働きのような歴史書から神学は立てられないとい主張して、ペンテコステ神学を土台から打ち壊そうと言う議論が起こった。ここしばらくはこの議論が続くかもしれない。ただし、この議論が正しいとすると、旧約聖書の大部分からは神学を論じられなくなるから、そんなことをまじめに主張する人は、よほどペンテコステ神学を嫌う人か、ペンテコステ神学を水で薄めて、他の福音派と妥協したい人に限られるだろう。だから、議論はあまり広がることも、長く続くこともないだろう。

まあ何はともあれ、ペンテコステの信仰は、いまやプロテスタントの主流になりつつある。現在の世界の宣教の大きな部分は、ペンテコステ信仰に属する人々によって進められている。ある専門家たちの計算によると、紀元２千年までには、ペンテコステ信仰のクリスチャンが、世界のプロテスタントのクリスチャンの過半数を占めることになるそうである。こうして、聖霊のバプテスマは伝道のための力の賦与であるという、わたしたちの理解は実証的にもかなり証明されている。そして、先入観によらない冷静な聖書神学が強調されるようになり、かなり推進されているから、神学的にも認められ受けいれられ始めている。

ただ、ペンテコステ信仰の人たちが、感情的になりすぎたり、超自然的現象にあまり重点を置きすぎたりするところは注意したい。とは言え、日本ではもう少し超自然現象に対する信仰を掲げても良いと思う。例えば祈りによる病気の癒しは、もっと大きな伝道の力になるべきである。あるいは、いわゆる悪魔や悪霊の力に対しても、ペンテコステ信仰の人たちは特異な対処が出来る筈である。

そう言えばつい２、３日前、バギオ教会の牧師がこんな事を言っていた。信徒伝道者のひとりが家庭聖書研究会に出かけたところ、ちようど、その家の裏で建てかけていた家から、足を

踏み外して転落したダイロク（大工に足りない）が、足の骨を折って、病院に行くため手配した車を待っていたところだった。そこで、信徒伝道者が手を置いて祈ったところ、変形していた場所がゴキゴキ鳴って、たちどころに癒されてしまったという。この信徒伝道者はわずか数週間前にも、別の家庭集会で、背中にこぶし大の腫瘍があって、シヤツの上からもはっきりとそれと分かる人のために、手を置いて祈ったところ、祈っている内に腫瘍が消えてしまったという経験をしている。「もしかしたら、彼は癒しの賜物をいただいたのかもしれないですよ」 最後に牧師がつぶやいた。そんな働きをするのが牧師ではなく、信徒であるというところが良い。

多くのアジア、アフリカ、ラテン・アメリカの人々と同様に、基本的に幼稚なアニミズム信仰に頼っているフィリピン人の間には、いわゆる悪霊、幽霊のたぐいの物語が溢れている。一般的に言って、西欧合理主義と自然科学至上主義の洗礼を受けたプロテスタント諸教会は、これを時代遅れのばかばかしい迷信として、まったく取り合わない。つまり、無視することによってこの問題に立ち向かう。ところがこのような物語には、たしかに単なる作り話や、夢と現実とを取り違えた空物語もあるが、かなりのものは、たとえそれがどれほど陳腐に聞こえたとしても、また明々白々な迷信であったとしても、当事者にとっては現実のでき事であり、恐ろしい力を持つ。無視することによっては解決できない。

一方カトリック教会は、これを教会の概念と行事の中に上手に取り入れることによって、解決してきた。だから、この国のカトリック教会には幽霊話が絶えない。信仰そのものが、本質的にアニミズムで、「外見だけがカトリックになったに過ぎない」とは、わたしの観察ではなく、この国のしっかりしたカトリックの学者たちの一致した意見である。これに対してペンテコステ信仰に立つ諸教会は、伝統的に悪魔と悪霊の存在とその現実の力を認め、これに戦いを挑んで来た。少なからず行き過ぎがあって、何でもかんでも悪魔や悪霊のせいにしてしまうことさえあったのである。たしか、２５年程も前のクリスチャニティ・トウディ誌に載っていた一こま漫画だったと思うが、悪魔が涙を流しながら不満を訴えている。 「また、ペンテコステ信者たちが、俺のあずかり知らぬ悪を俺のせいにしている」

しかし、ペンテコステのクリスチャンたちが最も果敢に、このような悪霊との戦いを続けて来たのは事実であるし、わたし自身の限られた体験の中にも、悪霊との喧嘩はずいぶんある。そして、ある人たちがパワー・エンカウンタリングと名付けたこの喧嘩が、世界中のペンテコステ教会の成長に大きく貢献していることは、疑う余地がない。聖霊は現在も「しるしと不思議」をもって働いておいでになる。

と、ここまで書き進んで来たところで、３人の現地人が訪ねて来た。彼らの内の１人が、昨年の１２月頃から突然「ものに憑かれて」、他国の言葉で話し出すようになったという。それが日本語のように聞こえたために、これは、「旧日本軍兵士の霊が、山下将軍の隠し財宝のありかを、我々に教えようとしているに違いない」と判断して、身振り手振りを頼りに方々ほじくり回ったが、結局見つからなかったのだそうだ。そこで、これは日本人の助けを借りた方が良いと考えて、その他国の言葉を、ものの１時間ほども録音して、私のところに本人ともども持参したというわけだ。

フィリピンには、山下将軍の隠し財宝の話が広く流布されている。マレーの虎と呼ばれてその勇猛さを称えられた山下将軍は、その後フィリピンの日本軍総司令官になったが、圧倒的戦力のアメリカ軍に追い詰められ、わたしがいま宣教地としているこの山岳地まで逃亡してきて遂に捕らえられた。結局彼は、モンテンルパ捕虜収容所で処刑されてしまったのだが、捕らえられる前に、日本軍の財宝をどこかに埋蔵したと信じられているのである。とくに彼が捕らえられた場所であるこの山岳奥地では、その埋蔵財宝に根強い人気と執着があって、やたらにあっちこちが掘り返されている。今までにも随分「協力」を依頼されたものだが、協力したくなる程まともなものはひとつとしてなかった。まあ、しょうがないから、その録音テープを聞いて見たのだが、いささか驚いた。日本語ではなかったのだが、かといってただやたらに大声でわめくような、聖霊のバプテスマに伴う異言の真似ごとのようなものとは違って、しっかり、落ち着いて、明確に語っているのである。母音がとても明瞭で、K、T、N、H、Y、Wの子音に加え、日本語的な「ら行」の子音、英語のＬでもＲでもない奴があって、日本語に間違えられたのも無理がないと思わされた。ＣＨＡ、ＣＨＵ、ＣＨＯの音を少なくすれば、もっと日本語らしい。

とにかく、私は話を転じて、この男の状態について色々聞き出した。もう、２ケ月ほども、日に何度も憑かれた状態になって、そのたび、この言葉を語り、くり返すごとに大変なエネルギーを消耗し、肉体的にも精神的にもすっかり参ってしまっているらしい。そこでわたしは、もし彼らが隠し財宝に心を奪われて、この男からもっと何かを聞き出そうとして、あれこれやり続けると、しまいにこの男は、精神に異常を来してしまうに違いないと警告し、見つかるかどうか当てにならない財宝を求めて、この男の人生を破壊してしまうか、財宝を諦めてこの男を立ち直らせるか、ふたつにひとつである事をはっきり分らせた。幸い、本人も他の２人も財宝は諦めた。

わたしはもっと詳しくカウンセリングをしてもらうために、土地の言葉を話せるバギオ教会の牧師に連絡を付け、彼らを連れていった。カウンセリングの後、牧師はイエス・キリストの名によって、この男に取り憑いている悪霊に出て行くように命じた。この時、この男は正常な状態だったために、すぐその場での結果は不明であった。多分、この後しばらく様子を見なければならないだろう。しかし、今私が言いたいのは、結果がどうなったかということではなく、このような例がこの国にはたくさんあるし､日本でさえ珍しくないという事実である。これは、キリストの時代も、パウロの時代も同じであった。

伝道とは本来的に、本質的に、そして基本的に神の働きである。神に起源を持ち、キリストによって土台が据えられ、聖霊によって実践されているものである。人間はただ聖霊に用いられているにすぎない。聖霊は人間を賜物として教会に与え、さらに能力としての賜物を増し加え、その上さらに、それらの賜物がより力強く効果的に用いられるように、常に働きかけておいでになる。

わたしたちが、自分の生まれながらの能力とか、教育とか訓練で得た能力を有効に用いて伝

道に役立てるのは、当然のことだし、おおいにやるべきである。しかし、聖霊に対する信頼と、聖霊の直接的干渉を期侍する信仰を忘れてはならない。わたしははなはだ非霊的な人間であるから、人間的力を一切放棄して、ただただ聖霊の力に頼ってなどという言い方には興味がない。立派な霊的牧師たちとは異なって、そのような教えを聖書かに見つけ出すことができないからである。わたしたちは、最大限に自分の人間的力を発揮すべきである。しかし、たとえ自分の能力がいかに優れたものであったとしても、それが贖いによって神のものとされたこと、または、聖霊によって賦与されたものであるとしっかり認識しながら、更にその上に聖霊の直接的働きかけを期待し、祈り求めるべきである。

どう言うわけか、日本ではいわゆる奇跡とか癒しとか言われる、超自然現象はなかなか起きない。日本人クリスチャンに信仰が無いのではない。神の取扱の相違のようである。フィリピンではわたしが祈っても癒される人が現れ、日本ではたとえオーラル・ロバーツやＴ．Ｌ．オズボーンが祈ってもたいした業が行われなかった。だから、日本ではついつい臆病になり、病気のために祈るなどという、「迷信的な信仰」は持っていない教会の真似をしてしまう。しかし、神に訴えて祈り続けるべきである。

話を本筋に戻そう。聖霊は教会に賜物をお与えになるだけではなく、その賜物がより有効に、効果的に、力強く用いられるように、力を与えて下さるのである。そして聖書はこの聖霊による力の賦与も、また賜物であると教えている。しかし、これは今まで取り扱ってきた賜物とは少しばかり性質が違う。前者はさまざまな能力の賦与であり、後者はその能力をより良く用いるための力の賦与である。そして、この力の賦与のさいたるものが、聖霊のバプテスマである。

わたしは、力の賦与はすべて聖霊のバプテスマによる、すなわち聖霊のバプテスマを受けなければ、まったく力が無いとは考えていない。聖書がそのようには語っていないからだ。とはいえ、聖霊のバプテスマは力の賦与のクライマックスである。これによって、クリスチャンは最も強大な、聖い力を得るのである。だからと言って、聖霊のバプテスマをいただいた者が超能力者になるのではない。先にいただいていた能力を、より力強く用いることが出来るようになるのである。そんなわけで、聖霊のバプテスマを受けてもいないし、信じてもいない人たちの中にも、自分に与えられた能力を充分にわきまえ、それを効果的に用いる事によって、聖霊のバプテスマを受けた人たちより、大きな働きをしている者が沢山いるというのは、別に不思議なことではない。 しかし、全体的に見ると、聖霊のバプテスマを信じ、その力を強調している教会の方が、より力強い宣教の働きをしているということは、紛れもない事実であり、歴史がそれを証明している。

そして、聖霊のバプテスマはクリスチャンを大胆にするらしい。これは使徒の働きの記事によっても推測できるし、多くの体験からも実証できる。ところが、この力は万能薬ではないし、永久に効力を発揮するものでもない。キリストを否定した臆病者のペテロは、単に復活を見ただけではなく、聖霊のバプテスマを体験したことによって、かつてキリストを否定したその同じ場所で、大胆に迫害者に対応することができた。それなのに、しばらくするとまた臆病者に戻って、ユダヤ主義者と妥協したりして、こともあろうに、後輩のパウロに叱責されているの

である。

世の中には、聖霊のバプテスマを受けていなくても、受けた人よりずっと大胆であるという人物もいるであろう。しかし、それは聖霊のバプテスマの有効性と必要性を否定してしまうものではない。聖霊のバプテスマは、本来クリスチャンを聖くするためではなく、大胆にするためにある。このあたりは、１９世紀のホーリネス運動をそのまま引き継ぐ人たちの考え方と、おおいに違う点である。先に述べたように、ホーリネス運動はペンテコステ運動の母胎となった大切なでき事で、聖霊のバプテスマを、改心に続く第２の恵みの業である瞬間的きよめと理解したのであるが、ペンテコステの人たちは、その理解をもう少し聖書的に調べ直して推し進め、実は、これは本来きよめではなく、力に関わる体験であることを知ったのである。 特にまた、わたしたちの団体はもう一歩進んで、瞬間的きよめを聖書的にあらずとして退け、第２の恵みの業という神学を離承しなかったのである。ただし、聖霊のバプテスマが結果的に、あるいは付随的に、きよめをもたらすことがあるというのは事実らしい。ペンテコステのでき事に伴った炎のようなものは、きよめを象徴しているのかもしれない。

とはいえ、やはり聖霊のバプテスマは、本来力に関するものである。強烈な伝道者はペンテコステ派と言われる団体に多い。そして道徳的な失敗で消えて行く強烈な伝道者も、ペンテコステ派では後を断たない。大胆にされるだけで、きよめがあまり進められていないと、悪事にも大胆になってしまうのか。なんとなく、旧約聖書のサムソンを彷彿とさせるが、これは大いに、大いに、そして大いに反省しなければならない。

ともあれ、聖霊のバプテスマは、たくさんある聖霊の働きの一つに過ぎず、一番大切な働きとさえ言うことはできない。しかし、こと宣教あるいは伝道の上では、すなわち教会の存在目的の遂行、使命の達成のためには非常に大切であって、決してないがしろにしてはならない。ただし、たとえ宣教あるいは伝道の働きの上でさえも、バプテスマだけが聖霊の働きなのではない。聖霊のバプテスマとは、聖霊が教会を力付けるための一つの、そして、最も特異な方法であるにすぎない。 そしてこれは、ペテロの言葉によると、すべての時代のすべての地域の教会に約束されている賜物であって（使徒２：３８～３９）、これを無視するという手はない。わたしたちはすべての非ペンテコステ教会に、このことを大胆に主張して行くべきだと思う。それはわたしたちの教会の主張ではなく、聖書の教えなのだから。

すべての時代のすべての教会が、素直にこの約束された賜物を戴くべきである。ただ、それが聖霊の力をいただく唯一の方法ではない。それがなくてはまったく宣教ができないのではない。 だが、もしも、聖霊の力をまったくいただかないとなると、教会は伝道ができなくなる。教会の宣教、伝道はまったく、もっぱら聖霊の力によるのである。

ただ､なんとなく思うのだが ････なんとなくと言うところが､また大切なんですよね ･･･････。ある種の直感による、危険信号の受信ですよ・・・・・最近はまたとみに、聖霊によらない宣教というか､聖霊の力に取って代わるものが強調されているようですね。 教会堂を立派に美しく魅力的にするとか、集会の内容をことさら世の人々に迎合させてショー化するとか、そうそ

う、やたらに教育を重んじ、やれアメリ力帰りだ、ドイツ帰りだ、イギリス帰りだ、それ D.D だ、D.Th.だ、DDT だと、ひけらかしてこけ驚かすのも、そのうちのひとつだ。

幸か不幸か、近代に至って、アメリカの教会の世界宣教が、圧倒的に他の国々の教会の宣教を凌いだ。しかも第二次世界大戦の後は、これもまた圧倒的国力によって、アメリ文化が世界を席巻した。良しにつけ悪しきにつけ、殆どすべての分野に於いて、わたしたちはアメリ力文化の洗礼を受けた。クリスチャンと言われる人種の多くは、２重にアメリ力文化の洗礼を受けているのである。

取るに足らないことかも知れないが、下層階級の移民が大部分だったアメリ力には、古い伝統的文化の流れをくむ爵位というものが無くなった。わずかな例外を除いては、家名というのも無視された。しかし人間というものは、何とかして他人より抜きん出たいと考える。 そこで、一番てっとり早いのが、金持ちになることと高い教育を受けることだった。そこで、家柄だとか、先祖だとかによらない、純粋に個人の能力による競争が「フェア」であると美化され、成金と学者が尊敬されるようになった。ちなみに、同じ本でも、アメリカの出版社から出されたものと、イギリスで出版されたものを比べてみると面白い。アメリカの出版社から出た本の著者には、必ずこれ見よがしに D.Th.だとか D.D.だとか Ph.D.という学位が付けられている。ところが、イギリスのは、ただ名前だけである。だから、アメリカ・キリスト教の影響下にある世界の教会の多くは、このような性格を共有している。

しかも悪いことに、ペンテコステ教会というのは歴史が浅い。わたしたちの団体の親団体とも言える、アメリカのアッセンブリーズ・オブ・ゴッドが創立されたのは１９１４年だから、まだ７５歳である。歴史が浅いということは、信徒たちの大多数が、まだいわゆる下層階級に属しているということである。キリスト教の歴史を調べればすぐわかることだが、ある種の霊的覚醒によって起こった団体の初期の信徒たちは、例外なく下層階級の人々だった。それが、きちっとしたクリスチャン生活の結果として、金銭的にも社会的にも向上し、中流階級に加わり、上流階級にまで足が届くほどになるのである。

だからわたしたちの団体は、全体として、いまや一所懸命上へ上へと駆け登ろうとしている。無暗に教育が強調され、やたらに学位がもてはやされる。金持ちになることには・・・・・・聖書に金持ちに対する厳しい警告があるので、公にはあまりちやほやされないが・・・・・潜在的羨望がとても強い。あの物質文明の臭気紛々、現世利益主義の権化、「繁栄の福音」に群がっている輩は、悲しいことにわが仲間に最も多い。

結果として、アメリカの影響をもろに被ったフィリピンのペンテコステ教会のクリスチャンたちは、その弱さを決定的に受け継ぎ、ただしゃにむに学位を取ろうとする。団体のほうも、何とかして、他の歴史の長い教団と肩を並べようとして、盛んに背伸びして、より高い学位を出せる学校を建てようと奮戦する。教育が強調されること自体は、別に悪いことではない。ところが学位が強調されるとおかしなことになる。ましてや、教育が献身に取って代わり、学位が聖霊の力の代理を勤めるようになっては、おしまいである。アメリカ文明の強烈な影響下に

ある、お隣の韓国もものすごい学歴社会であり、学位にたいする羨望が強烈である。牧師の名刺に４つくらい学位が並ぶのは普通だ。その病気が日本にも上陸しそうだ。

その昔トマス・アクイナスは、時の法王が「我々はもう『金銀は我に無し』と言う必要が無くなった」と語ったのに答えて、「『ナザレ人イエス・キリストの名によって立って歩け』とも言えなくなった」と嘆いたそうである。現代のわたしたちは、もう「無学のただ人」ではなくなった。そして、「誰の前でも恐れず、大胆に証できる人間」でもなくなったのである。

わたしたちの聖書学校だの神学校の学生たちが、祈る時間も惜しんで調べ物をし、日曜礼拝に出席する時間も犠牲にして、レポート作りに血眼になっている姿を見ていると、つくづく、彼らは聖霊より学問に頼っているのではないかと、思ってしまうのである。

宣教とか伝道とか言うものは、徹頭徹尾聖霊の力によるものであることを認識し、聖霊により頼むべきである。何事を始めるにも、聖霊の力を祈り求めて始めるべきである。だが、それだけでは足りない。聖霊の直接干渉を信じ期待しながら、仕事を進めるべきである。しかしそれでもまだ足りない。自分が自分の仕事をするには、聖霊の力が必要だという以上に、自分は聖霊に用いていただいているに過ぎないという、基本的事実をくり返し、くり返し咀嚼しながら働くべきである。すべての活動において、聖霊の御意思を第一にし、自己を殺して行くべきである。

教会にはいろいろな形態があり、伝統がありやり方がある。どのような形をとり、どんなやりかたをするかは、かなりの範囲において個々の教会の自由である。ただし、聖霊の力によって伝道するというのは、「ＭＵＳＴ」であり「ねばならない」である。聖霊の力によらないで伝道してはならないのである。これが普遍的教会の不変の原則である。わたしたちがこの普遍的教会をある地域に自己表現させようとするとき、この不変の原則を曲げてはならないのである。

あるとき、わたしたちはフィリピン山岳地でも最も奥深いところにある集落を訪ねていた。もうすでに一過間ほど、毎日馬も通れない険しい道を何時間も歩き、先々の集落で集会をし、南京虫に攻め立てられて眠られぬ夜を過ごし、すっかりくたびれ果てていたのだが、長いあいだ病気の青年がいるから祈ってほしいと頼まれては、断るわけにはいかない。痛む足腰に鞭打って、やぶれかぶれのやけくそで、急な斜面を滑り転んで青年の家に辿り着いた。窓一つない真っ暗な小屋の中に、青年は着の身着のままで転がっていた。もうずいぶん長い事、満足に食べられないでいるのだという。今まで無理をして町に出て、５つの病院に行ったが、原因も分からず、治療もしてもらえなかったと、一緒についてきた集落の娘が説明してくれた。 一番近い小さな病院まで行くのに、健康な男の足で１０時間はかかる。電気機器の設備がある次の病院は、さらに３時間、凸凹道をバスに乗らなければならない。

このあたりの責任を持っている信徒伝道者と一緒に、手を置いて祈った。祈っている内に期待が広がってきた。神が今にも癒して、この青年を立ち上がらせて下さるのではないかと、何かこう、わくわくして、目を開けながら祈り続けた。だが、その場では奇跡は起こらなかった。

だから、その日一日、そして一晩中、心わくわくしてまんじりともしなかった。 次の朝、彼はまだ寝っ転がっていた。わたしはいささか心残りではあったが、次の目的地に出発した。

数ケ月後、再びこの集落を訪れた。開かれた交わり会のために、大きな豚を肩にひっ担いで急な坂道を登って来たかと思うと、休むこともなく手際よくてほふって捌き、てきぱきと食事の準備をしていたのがあの青年であった。この山岳地では、このようなとき料理をするのは男の役割である。いま彼は、信徒伝道者として働いている女性にほのかな想いを寄せ、気に入られようと、ほほえましいほど一所懸命である。

わたしたちは、何をするにも聖霊の働き、直接の干渉を期侍して、心をわくわくさせながら働くべきである。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

さて、前の行を打ち終わってから、この行を打ち始めるまで、ちょうど２年の空白があった。別にさぼっていた分けではない。本来の仕事に追われたりして、ワープロに向かい合う機会がなかっただけである。長い乾季に、外回りの活動でたっぷり汗を流し、やっと雨季になって、やれうれし。ワープロとじゃれ合おうかと企んでいる矢先、予期せぬでき事のため、一時帰国をしなければならなくなった。その上、わたしの活動地を中心に大地震が発生し、１５００人を超す人々が死に、私たちの働きも大きな被害を受けた。私は取るものも取らず、やれ救援だ、それ復興だと駆けずり回り、日本とフィリピンの間を何回も行き来した。そして、まあ何とか一段落したところだが、そうしている間に、私たちにも大きな変化が起こり、長い海外生活に別れを告げて、故国で生活するという運びにまでなってしまった。わたしの故国は、２０年以上も昔の日本であって、現在の日本ではない。今のわたしは外国人に違いない。しばらくの間は懸命になって、現代日本人になる努力を続けなければならないだろう。

しかし、横着な私はワープロでごまかそうとしている。現代日本人になるためには、もっとしっかり、ワープロが打てるようになっていなければならないと、都合のいい大義名分が頭をよぎったからである。ところが、このワープロ君、随分と苦労をさせてくれたものである。形が古くなったのか、製作者の思いが及ばなかったのか、徹底して電気事情が悪い、フィリピンの片田舎なんぞに持ち込んだ私が悪いのか、停電のたびに、精魂込めて打ち込んでいた文章をきれいさっぱり消し去ってくれる。ファイルに入れていた分さえも、めちゃくちゃにかき混ぜ、まったく役立たずにしてくれたことさえ一度だけではない。この小冊子に支離滅裂なところが多いのは、ひとえにワ―プロのせいである。・・・・・・良い、言い訳のネタができた。

今日はこれから、引越しの準備だ。家族はもう日本に戻っている。わたしも、ワープロを仕舞い、続きは日本で書かなければならないかもしれない。あるいは、片づけが早く済んだら、たっぷり時間があるから、ワープロに向かえるか。

実践の部

まあまあ、へらず口はそのくらいにして、本題に入ろう。これまでは、どちらかと言うと理屈に重点を置いて論じてきたが、これからは、実践面に焦点を当てて話してみたい。

「開拓伝道」

まず、実際に伝道を始めるにはどうしたら良いのだろう。ここでいう伝道とは、普遍的教会の地域的表現、あるいは顕現としての地域教会を建てるという、明確な目的を持った伝道の働きであって､電車で乗り合わせた人にトラクとを手渡したという程度の伝道ではない。つまり、開拓伝道である。どのようにして開拓伝道を始めるべきだろうか。

勿論、条件というものがある。伝道する側の条件、即ち年齢、経済、能力、知識、コネ、手蔓、信仰、そして、男性か女性か、独身か家庭持ちか、協力者があるかないか、あるいは伝道の対象、される側の条件、すなわち、地域社会の規模、住んでいる人々の社会的立場、経済、学問、文化背景、宗教観などが複雑に絡み合っていて、これだ、という開拓伝道法などあり得ない。

しかし、それでもいくつかのことが言える。少なくても一つのことは言える。それは、今までの日本の教会がやって来たやり方を、くり返してはいけないということである。はっきり言って、日本の教会は日本の宣教に失敗して来た。現在、伝道を始めて３０年４０年という伝道者は勿論のこと、１０年２０年という伝道者もはっきり告白しなければならない。「私たちの宣教は失敗であった」と。失敗を謙虚に認め、その失敗を真似ようとする若い伝道者たちに、警告しなければならない。「私たちと同じ失敗をくり返してはならない」 失敗を恐れさせてはならない。しかし、私たちと同じ失敗をくり返させてはならない。私たちが出来なかったことをしてもらうのだ。私たちが考え付かず､思いも及ばなかったことを大胆に試みてもらうのだ。その上で失敗するならその失敗は宝である。しかし、私たちが何回も試みて成功しなかった、その同じ事をくり返し、同じように失敗するなら、その失敗は塵芥にも及ばない。

そういうわけで、わたしが提言しようとしている開拓伝道法は、最善の方法ではないし、従来の方法に比べてもどうこう言うほどの事は無いかも知れない。とはいえ、従来の方法と異なっていることだけは事実であり、それゆえに試してみる価値のあるものだ。さて・・・・・いや、待て。私がおしなべて、日本の教会の宣教は失敗だったと断言し、経験を積んだ、忠実な僕である伝道者に向かって、失敗を認め告白せよと言いつのるのに、いささか怒りを押さえかねておられる方も、たくさんおいでのことと思う。「礼拝出席者数２００人以上の教会の牧師も

おれば、７００人の会員を持つ教会だってある」とおっしゃるにちがいない。なるほど、確かにそのとおりである。感謝なことに日本にもそのような超人牧師、名人牧師が少なからず存在し、自分にはおおよそ何の関わりもないのに、「ああ、あの教会ならば良く知っていますよ。実を申せばあの教会の牧師は、私の・・・・」などと、ついつい、あたかも親密な関係にでもあるかのように言いたくもなってしまう。

ここでこの八つ当たり伝道論は、突然幕を閉じました。日本に帰ってきたとき、フロッピーが行方不明になったためです。粗稿をプリントアウトしたものはあったのですが、それを打ち直す元気もなくしてしまい、すっかり忘れて、どこにしまいこんだのかも思い出せなくなっていたのです。でもつい最近、飼い猫の粗相がきっかけでプリントアウトを発見しました。そしてスキャナーという便利な現代機器を使って、不完全ながら、古い文章を活字にすることができました。

お分かりのように、これは２０年も前に、フィリピンで宣教師としていたときに書いたものです。すでに時代遅れになったと思われる点もないとはいえません。たとえば、日本の伝道のために必要なのは牧師ではなく、伝道者であるという主張などは、言い換えられなければならないでしょう。いまや、日本では高齢化が進み、急激に牧師の数が不足し始め、無牧の教会が続出することが予想されているからです。なんとしても多数の牧師を輩出しなければなりません。しかしそれでも、日本は基本的に宣教地であることに変わりはありません。必要なのは伝道なのです。牧会ではありません。そういうわけで、内容的には、まだまだ益になるものがあると考え、皆さんに披露するものです。

２００９年1月２０日